42629
教科書文庫
4
810
51-1932
200030
1917

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

教科書文庫
4
810
51-1932
2000301917

資料室

375.9
Ka9

昭和七年二月十七日

文部省檢定濟

師範學校國語漢文科用

師範 國文選

卷五

（第五學年用）

東京高等師範學校教授垣内松三編

広島大学図書
2000301917

社會式株
田神・院書治明・京東

一、文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。

一、教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一、小學國定讀本の研究と聯關して學習と應用との融合を圖れり。

一、縱に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。

一、教育のために玉稿轉載を許諾せられたる原作家各位に深謝す。

廣島大學圖書之印

廣島大學教
30749

目次

一　五十嵐力　國語の愛護　六
二（古事記）　古事記鈔　一三
一　八俣の大蛇　一三
二　稲羽の素菟　一六
三　出雲大社　一八
四　日本武尊の東征　二三
三　武田祐吉　大和國原　三一
四（萬葉集）　萬葉集鈔　三九
過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌　三九
山部宿禰赤人望不盡山歌　四一

思子等歌　四一
詠水江浦島子　四三
五　土居光知　平安朝の文學　四七
六　芳賀矢一　敍事詩の展開　六三
七（竹取物語）　月の都　七八
八　紀貫之　土佐日記鈔　八六
九　紫式部　須磨の秋　九六
一〇　清少納言　春は曙　一〇三
一一　尾上柴舟　古今と新古今　一〇七
一二（大鏡）　世繼の物語　一二二
一三（平家物語）　大原御幸　一三〇
一四（增鏡）　新島守　一四一

一五（太平記）　落花の雪　一五
一六　松尾芭蕉　幻住庵記　一五七
一七　近松門左衛門　馬方三吉　一六二
一八　井原西鶴　奈良の庭竈　一七一
一九　瀧澤馬琴　芳流閣　一七六
二〇　村田春海　芳宜園大人の靈を祭る　一八三
二一　高須芳次郎　新しい詩の生誕　一八七
二二　土井晩翠　星落秋風五丈原　二〇一
二三　森鷗外　寒山拾得　二〇六
二四　夏目漱石　山路　二一六
二五　島崎藤村　春を待ちつゝ　二四〇
二六　和辻哲郎　樹の根　二五三

附錄
尋常小學國語讀本教材研究
その五　教材資料
その六　教材資料

一　國語の愛護

祈年祭の祝詞は、延喜式の中に跡を留めた三十篇足らずの古祝詞の中、最も名高いものの一で、殊にこゝに引く一節は、多くの學者から日本民族本來の使命・抱負を道破した大文章と視られて居り、或少數の熱心家からは、東西古今に通じて天地間第一の文章とも視られて居るものである。

それは伊勢に坐す天照大御神の神德を稱へて年穀の豐熟を祈つたものであるが、いかにも蒼古素樸な言句の中に宏遠雄大正々堂々たる抱負をいひ現したもので、これを國民永久の理想とするに異論はなく、また古來の國學者の與へた解釋にも、大體に於て異論はない。併したゞ一つ私の不審に思つて居るのは「青海原は棹柁干さず。」から「長道間なく

參考資料

祝詞　神前にて朗讀する祭文。年を經るに從つて形式一定せり。延喜式には（祈年祭・春日祭・廣瀨大忌祭・龍田風神祭・平野祭・久度古開・六月月次・大殿祭・御門祭・六月晦日大祓・東文忌寸部獻横刀時呪・鎭火祭・道饗祭・大嘗祭・鎭御魂齋戸祭・伊勢大神宮・豐受祭・四月神衣祭・六月月次祭・九月神嘗祭・豐受宮同祭・同神嘗祭・齋內親王奉入時詞・遷奉大神宮祝詞・遷却崇神祠・遣唐使時奉幣・出雲國造神賀詞）を收む。その書法は漢字の音訓を以てし、その修辭は對句・疊句・冠辭・比喩法・擬人法等を多く用ひ、雄渾正大の氣に富みたり。古來の參考書の重なるものは、

賀茂眞淵「祝詞式解・祝詞考」
鈴木重胤「延喜式祝詞講義」

立て續けて、」までの數句の意義をば、朝貢の船舶・馱馬の連續することと取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を刈除し、理想を弘布する我が宣傳使の海陸兩路に於ける行列と見るべきかといふ點である。

私かに思ふに、是は朝貢の船や馬が遠近の領國から來ることではなくして、多分皇化宣傳使が勢揃ひして出かけて行くことであらう。向うから來るのではなくして此方から往くのであればこそ、「船の艫の至り留る極み、馬の爪の至り留る限。」とはいつたのであらう。「陸より來る道。」といはずして、「陸より往く道。」といつたのであらう。また船を滿て續け、馬を立て續けて、狹き國を廣くし、峻しき國を平らかにするといひ續ける以上は、どうしても一種の理想を持つ團體の積極的遠征を意味すべき筈で、小弱國が叩頭して强大國の主權

次田　潤「祝詞新講」
御巫清勇「祝詞式新釋」
武田祐吉「上代國文學の研究」
同　「神と神を祭る者との文學」

祈年祭　陰曆二月四日、風雨の災害なく年穀の豐熟せんことを神祇に祈る祭。

延喜式　五十卷。法令の施行細則を記せるもの。延長五（一五八七）年藤原忠平撰進す。

廣島大學圖書之印

者に奉る朝貢の船や馬と解して、狹き國を廣くし、峻しき國を平らけくするといふやうに取るのは、何の意義をも成さぬことである。かたゞ〳〵これはどうしても皇化宣傳使が仁義・平和の大道を高く揭げて、有形的には狹き國、險阻な國を平坦にし、精神的には惡政惡俗に苦しむ國を化して道ある國とするといふ意味に取るべきであらうと思ふ。

かやうなことは一見文法や古文辭に囚はれた好事家の暇つぶしのやうにも見えるが、併し考へやうによつては、古文を正しく解釋するのは一種の大切な仕事で、殊に建國當初に國民の大理想の宣せられた偉大な文章の意味を、左と解くべきか右と解くべきか、消極的に解釋すべきか、積極的に解釋すべきか、坐つて居て御土產を貰ふことと取るべきか、難路を切開いて尊い贈物を憐な人に與へることと取るべきかは、國文學に携る小さき學徒としてのみならず、日本國民としても輕視すべきことではあるまいと思ふ。

この文章に對して、かういふ解釋を與へた人が既にあるかどうか。私の知る限では、鈴木重胤が『祝詞講義』の中に、

さて船の滿て續くといふに、二義に亙りて聞ゆること有り。其の一は八百船千船の外國より參り湊ひて、萬國の酋長等の貢賦を奉る義と、一は狹き國は廣く峻しき國は平らけく爲りて、國土・人民の漸く大いに蕃息して、皇孫命の國を弘め給ふ義とを兼ねたり。

とあつて、多少似通つて居るやうにも見えるが、これはたゞ狹き國峻しき國といふに關聯させて見ただけで、我より往くといふ意味は現れて居ないやうに思はれる。

此の解釋を、或は神代の事實と思ひ比べて不妥當だと思

鈴木重胤　國學者。淡路の人。文久三(一八六三)年歿す。年五十二。
祝詞講義　正しくは延喜式祝詞講義といふ。二十六卷。註釋詳細にして、卷首に隨神の道を說けり。

ふ人があるかも知れぬ。それは私も認めるところである。けれども、此の點に關しては、朝貢說の方も同じことである。要するに、是は原始時代に於ける吾等の祖先の頭に描かれた理想の現れと見るべきで、針小棒大に寫し出された誇張ではあるが、同時にうぶな心に實現を豫期せられた主觀的事實と見るべきであらう。そして此の見方を以てすれば、遠くは伊邪那岐命が天照大御神に、「高天原を知らせ。」と言ひ、月讀命に、「夜の食國を知らせ。」と言ひ、須佐之男命に、「海原を知らせ。」と言はれたのも、宇受賣命が海中の魚族に對して、降臨された皇孫に從ふか否かと問うたのも、大國主命や日本武命が山河を跋渉しての功業も、四道將軍の派遣も、皆一種の皇化宣傳と見るべきであらう。これが公文書的の傍證としては、崇神天皇の十年、四道將軍を派遣する時に下された詔勅に、

伊邪那岐命云々　古事記上卷に、「此の時伊邪那岐命いたく歡喜ばして詔り給はく、『吾は子生み生みて、生みの終に三柱の貴の子得たり。』とのり給ひて、卽ち其の御頸珠の玉の緒母由良邇取り由良迦志て、天照大御神に賜ひて詔り給はく、『汝が命は高天原を知らせ。』と事依さし給ひき。故其の御頸珠の名を御倉板擧之神と謂す。次に月讀命に詔り給はく、『汝が命は夜之食國を知らせ。』と事依さし給ひき。次に建速須佐之男命に詔り給はく、『汝が命は海原を知らせ。』と事依さし給ひき。」

宇受賣命云々　同書天孫降臨の條に、「こゝに（天宇受賣命）猨田毘古神を送りて、還り到りて、乃ち悉に鰭の廣物鰭の狹物を追ひ聚めて、『汝は天神の御子に仕へ奉らむや。』と問ふ時に、諸々の魚ども皆、『仕へ奉らむ。』と白す。」

大國主命云々　一八頁參照。

日本武命云々　二二頁參照。

四道將軍　崇神天皇十（五七三）年、大彥命を北陸に、武淳川別を東海に、吉備津彥を西海に、丹波道主を丹波に遣してその地を治めしむ。

民を導く本は教へ化くるにあり。今既に神祇を禮ひて災害皆耗きぬ。然れども遠荒の人ども、なほ正朔を受けず。これ未だ王化に習はざればか。それ群卿たちを選びて、四方に遣して朕が憲を知らしめよ。

とあるのが、此の祝詞に現れた積極的風化主義・仁義的帝國主義の史的實在を裏書するものであらうと思ふ。

祝詞については、文法的・修辭的・心理的に見て、精細に其の意義を調べ直すべき點が可なり多いと私は思つて居る。祝詞は傳說を大體そのまゝに書いた古事記などとは違つて、上代人が神々を慰めるために美辭麗句の綴り合せに、小さい頭を惱ました結果の作であつて、單文を書くに適した文章上の原始人が複文を書いたために、かやうに後の研究者に疑惑の種を遺し、同時に努力の種を遺したのであらう。

（五十嵐力―「國語の愛護」）

辭別きて伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽るかしします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つかぎり、青雲の靄く極み、白雲の墜坐向伏すかぎり、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留る極み、大海原に舟滿て續けて、陸より往く道は、荷の緒縛堅めて、磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留るかぎり、長道間なく立て續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引寄することの如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、殘をば平らけく聞召さむ。また皇御孫命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉るが故に、皇吾が睦神漏伎神漏彌命と、鵜じもの頸根衝拔きて、皇御孫命の珍の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。（祝詞）

五十嵐力　國文學者。文學博士。米澤市に生まる。東京專門學校文學科出身。早稲田大學教授。

皇神の見霽るかし云々　天照大神は日の神にまします故に、高天原より遠く國土を見渡し給ふなり。

荷前　貢物の初もの。

手長の御世と云々　「た」は接頭語。堅磐は堅き岩、常磐は長へに變らぬ岩。

皇吾が睦云々　天皇の親しき皇祖神と稱へ奉りて、鵜の如く頸を前につき出し垂れて神を敬ふなり。

珍の幣帛を云々　珍の幣帛を奉り置きて、善言美辭を盡くして神德を稱讃し奉れと、中臣氏がそこに集れる神主・祝部等にこの祝詞を宣り聞かするなり。

二　古事記鈔

一　八俣の大蛇

速須佐之男命やらはえて、出雲國の肥の河上なる鳥髮の地に降りましき。此のをりしも、箸その河より流れ下りき。こに須佐之男命その河上に人有りけりと思ほして尋上りいでましかば、老夫と老女と二人在りて、童女を中に据ゑて泣くなり。爾ち「汝等は誰ぞ。」と問ひ給へば、其の老夫、「僕は國つ神大山津見神の子なり。僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂す。」と答す。また「汝が哭く故は何ぞ。」と問ひ給へば、「我が女は本より八稚女ありき。こゝに高志の八俣遠呂智なる年毎に來て喫ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣く。」と答す。其の形は如何さまにか。」と問ひ給へば、

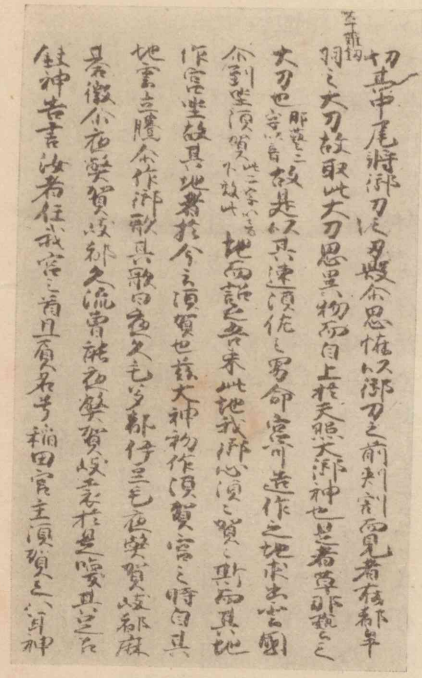
□尋常小學國語讀本五　大蛇たいぢ參照

參考資料

古事記　三卷。元明天皇和銅四（一三七一）年九月十八日、太安麿勅を奉じて、語部の稗田阿禮の諳誦せる神代より推古天皇の朝までの傳說・歷史を記錄したるものにて、翌年正月二十八日に成れり。漢字の音訓を以て國語を記し、よく上代の面目を傳へたり。參考書には、

本居宣長「古事記傳」
茜部相嘉「古事記傳追加繼考附錄」
平田篤胤「古史傳」
富士谷御杖「古事記燈」
敷田年治「古事記標註」
次田潤「古事記新講」
津田左右吉「古事記及び日本書紀の研究」

「彼が目は赤加賀智なして、身一つに頭八つ、尾八つ有り。また其の身に蘿また檜榁生ひ、其の長さ谿八谷峽八尾を度りて、其の腹を見れば悉にいつも血あえ爛れたり。」とまをす。爾、速須佐之男命その老夫に、「これ汝の女ならば吾に奉らむや。」と詔り給ふに、「恐けれど御名を知らず。」と申せば、「吾は天照大御神のいろせなり。故、今天より降りましつ。」と答へ給ひき。爾、足名椎・手名椎神、「しかまさば恐し、奉らむ。」と白しき。



古事記（眞福寺本）

爾、速須佐之男命乃ち其の童女を湯津爪櫛に取成して、御美豆良

やらはえて　追放せられて。

肥の河上　今の斐伊川の上流。斐伊川は船通山（古稱鳥髮山）に發し、北流して宍道湖に注ぐ。

高志　今の簸川郡古志村及び布智村。

赤加賀智　日本書紀に赤酸醬、古事記傳に赫都實の義かとあり。眞赤なほゝづき。

いろせ　同母弟。

湯津爪櫛　五百箇の爪形の櫛。

に刺さして、其の足名椎・手名椎神に告り給はく、「汝等八鹽折の酒を釀み、且垣を作り廻ほし、其の垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐を結ひ、其の佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其の八鹽折の酒を盛りて待ちてよ。」と告り給ひき。故、告り給へるまに〳〵如此設備へて待つ時に、其の八俣遠呂智、まことに言ひしがごと來つ。乃ち船毎に己が頭を垂れて其の酒を飲みき。こゝに飲醉ひて留り伏し寢たり。爾ち速須佐之男命その御佩かせる十拳劒を拔きて、其の蛇を切りはふり給ひしかば、肥の河血になりて流れき。故、其の中の尾を切り給ふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして御刀の前もちて刺割きて見そなはししかば、都牟刈の太刀あり。故、此の太刀を取らして、異しき物ぞと思ほして天照大御神に白し上げ給ひき。こは草薙の太刀なり。

八鹽折の酒　幾度も繰返して釀せし強烈なる酒。

佐受岐　棧敷（假床）なり。

都牟刈　刀の切味よき形容。

二　稲羽の素菟

此の大國主神のみ兄弟八十神坐しき。然れども皆、國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は、其の八十神各、稲羽の八上比賣を婚ばはむの心有りて、共に稲羽に行きける時に、大穴牟遲神に帒を負はせて、從者として率て往きき。こゝに氣多の前に到りける時に、裸なる菟伏せり。爾に八十神その菟にいひけらく、「汝爲むは、この海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の岑の上に伏してよ。」といふ。故、其の菟、八十神の教ふるまゝにして伏しき。

こゝにその鹽の乾くまに〳〵、其の身の皮悉に風に吹裂かえしからに、痛みて泣伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神その菟を見て、「何ぞも汝泣伏せる。」と問ひ給ふに、菟白さく、「僕淤岐の島にありて、此の國に渡らまく欲りつれども、渡ら

□尋常小學國語讀本四　白ウサギ參照

稲羽の八上比賣　今鳥取縣八頭郡曳田村に八上比賣神社あり。

大穴牟遲神　大國主神の別名。

氣多の前　鳥取縣氣高郡末恒村字内海なる「正木端」。

淤岐の島　隱岐國。一説に氣多の前の沖にある小島。

むよし無かりし故に、海の鰐を欺きて言ひけらく、「吾と汝と族の多き少きを比べてむ。故、汝は其の族のありのことごとく率て來て、此の島より氣多の前まで、皆列み伏しわたれ。吾その上を踏みて走りつゝ讀み渡らむ。こゝに吾が族と、孰れ多きといふことを知らむ。」かくいひしかば、欺かえて列み伏せりし時に、吾その上を踏みて、讀み渡り來て、今地におりむとする時に、吾、「汝は我に欺かえつ。」といひ竟れば、卽ち最端に伏せる鰐、我を捕へて悉に我が衣服を剝ぎき。此に因りて泣き患ひしかば、先だちていでましし八十神の命もちて、「海鹽を浴みて風に當りて伏せれ。」と教へ給ひき。故、教のごとせしかば、吾が身悉に傷はえつ。」と白す。

こゝに大穴牟遲神その菟に教へ給はく、「今疾くこの水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、卽ち其の水門の蒲黃を取

りて、敷散らして、其の上に輾轉びてば、汝が身もとの肌のごと、必ず癒えなむものぞ。」と教へ給ひき。故、教のごとせしかば、其の身本の如くになりき。これ稻羽の素菟といふものなり。今に菟神となもいふ。故、その菟、大穴牟遲神に白さく、「此の八十神は必ず八上比賣を得たまはじ。帒を負ひ給へれども、汝が命ぞ獲たまひなむ。」と申しき。

三　出雲大社

こゝをもて建御雷神・天鳥船神の二柱の神、出雲國の伊那佐の小濱に降りつきて、十掬劒を抜きて浪の穗に逆さまに刺立てて、其の劒の前にあぐみゐて、其の大國主神に問ひ給はく、「天照大御神・高木神の命もちて問ひに遣せり。汝がうしはける葦原の中つ國は我が御子の知らさむ國とことよさし給へり。故、汝が心奈何にぞ。」と問ひ給ふ時に、答へ白さく、「僕

□尋常小學國語讀本十　出雲大社參照
天鳥船神　船の神。
伊那佐　島根縣簸川郡大社町の海岸の古名。
高木神　高御產巢日神の別名。

はえ白さじ。我が子八重事代主神これ白すべきを、鳥の遊すなどりしに御大の前に往きて、未だ還り來ず。」と答しき。故、こに天鳥船神を遣して、八重事代主神を徵し來て問ひ給ふ時に、其の父の大神に、「恐し、此の國は天つ神の御子に奉り給へ。」と言ひて、卽ち其の船を蹈傾けて、天の逆手を青柴垣に打成して隱りましき。

故、こゝに其の大國主神に問ひ給はく、「今汝が子事代主神かく白しぬ。亦白すべき子有りや。」と問ひ給ひき。こゝにまた白しつらく、「また我が子建御名方神あり。此をおきては無し。」かく白し給ふをりしも、其の建御名方神千引石を手末に擎げて來て、「誰ぞ、我が國に來てしぬび〳〵かくものの言ふ。然らば力競せむ。故、我先づ其の御手を取らむ。」と言ふ。故、其の御手を取らしむれば、卽ち立氷にとり成し、また劒刃にとり成し

御大の前　同縣八束郡美保關町の東に突出せる地藏崎をいふ。
天の逆手　呪ふ時に打つ拍手なりといふ。
青柴垣　神籬の內に隱るゝ意と鈴木重胤は說けり。
立氷　垂下がるつらゝ（氷柱）に對して上に向かつて突立ちたる氷柱をいふ。

つ。故、懼れて退き居り。こゝに其の建御名方神の手を取らむと乞ひかへして取れば、若葦を取るがごと捻み批ぎて投げはなち給へば、卽ち逃げ去にき。故、追ひゆきて科野國の洲羽海に迫め到りて、殺さむとし給ふ時に、建御名方神白しつらく、「恐し、我をな殺し給ひそ。此の地をおきては他處に行かじ。亦我が父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此の葦原の中つ國は天つ神の御子の命のまに〳〵獻らむ。」と申し給ひき。

故、更にまた還り來て、其の大國主神に問ひ給はく、「汝が子等事代主神・建御名方神二神は、天つ神の御子の命のまにまに違はじと白しぬ。故、汝が心奈何にぞ。」と問ひ給ひき。爾に答へつらく、「僕が子等二神の白せるまに〳〵僕も違はじ。此の葦原の中つ國は命のまに〳〵既に獻らむ。唯僕が住處をば、

洲羽海　諏訪湖。湖畔に官幣中社諏訪神社あり。

既に　悉くの意。

天つ神の御子の天津日繼しろしめさむ登陀流天の御巢なして、底津石根に宮柱ふとしり、高天原に氷木高しりて治め給はば、僕は百足らず八十坰手に隱りて侍ひなむ。また僕が子等百八十神は、八重事代主神、神のみをさきと爲りて仕へ奉らば、違ふ神はあらじ。」かく白して乃ち隱りましき。故、白し給ひしまに〳〵、出雲國の多藝志の小濱に天の御舍を造りて、水戸神の孫櫛八玉神を膳夫として、天の御饗獻る時に禱ぎ白して、櫛八玉神鵜になりて、海の底に入りて、底の波邇を咋ひ出でて天の八十毘良迦を作りて、海布の柄をかりて燧臼に作り、海蓴の柄を燧杵に作りて、火を鑽りいでて申しけらく、「是の我が鑽れる火は、高天原には神產巢日御祖命のとだるあまの新巢の凝烟の、八拳垂るまで燒き擧げ、地の下は底津石根に燒き凝らして、栲繩の千尋繩うち延へ釣らせる

登陀流　古事記傳に、富み足る義にて炊煙の盛んに立昇る狀といへり。

天の御巢　天つ神の廚の屋根の煙出しのある處。

八十坰手　現土を遠く隔てたる幽界。

百八十神　日本書紀に、大國主の御子凡一百八十一神とあり。

多藝志　同縣鄕川郡斐伊川のほとり、今の川跡村の地なり。

波邇　泥土をいふ。

八十毘羅迦　多くの平瓮。ヒラカは平筍の義。筍は物を盛る器の總稱。

海蓴　小藻の義。

海人が、大口の尾翼鱸さわ〳〵に引きよせ騰げて、拆竹のとをを〳〵に天の眞魚咋獻らむ。」と申しき。故、建御雷神返り參上りて葦原の中つ國平けやはしぬる狀を復奏し給ひき。

四　日本武尊の東征

こゝに天皇また頻きて倭建命に、「東の方十二道の荒ぶる神またまつろはぬ人どもを平けやはせ。」と詔り給ひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣す時に、柊の八尋矛を賜ひき。故、命を受けたまはりて罷りいでます時に、伊勢大御神の宮に參りまして、神の朝廷を拜み給ひて、其のみ姨倭比賣命に白し給へらくは、「天皇早く吾を死ねとや思ほすらむ。いかなれか、西の方のまつろはぬ人等を擊りに遣して、返り參り來しほど幾時もあらねば、軍衆をも賜はずて、今更に東の方十二道のまつろはぬ人等を平けに遣すらむ。此によりて思へば、なほ吾早く死ねと思ほしめすなりけり。」と申して、患ひ泣きて罷ります時に、倭比賣命草薙劍を賜ひ、また御囊を賜ひて、「若し急のこと有らば、この囊の口を解き給へ。」となも詔り給ひける。

故、尾張國に到りまして、尾張國造の祖、美夜受比賣の家に入りましき。乃ち婚さむと思ほししかども、また還り上りたらむ時にこそ婚さめと思ほして、期り定きて、東の國にいでまして、山河の荒ぶる神またまつろはぬ人等を悉に平けやはし給ひき。故、こゝに相模國に到りませる時に、其の國造詐りて白さく、「此の野の中に大沼有り。この沼の中に住める神いたく千早振る神なり。」と申す。こゝに其の神をみそなはしに其の野に入りましつれば、其の國造その野に火をなもつけたりける。故、欺かえぬとしろしめして、かのみ姨倭比賣命

尾翼鱸　尾翼は小鰭の義。

□尋常小學國語讀本九　弟橘姫參照

天皇　景行天皇を申す。

美夜受比賣　熱田大神緣起に、尾張氏の健稻種公の妹宮酢媛とあり。

の賜へる囊の口を解開けて見給へば、其の裏に火打ぞ有りける。こゝに先づ其の御刀もて草を苅撥ひ、其の火打をもちて火を打ちいで、向火をつけて、燒退けて還り出でまして、其の國造等を皆切滅し、卽ち火をつけて燒き給ひき。故、其地をば今に燒遣とぞ謂ふ。

それより入り幸でまして走水海を渡ります時に、その渡の神浪をたてて、み船たゆたひてえ進み渡りまさず。こゝにその后、み名は弟橘比賣命白し給はく、「妾御子にかはりて海に入りなむ。御子はまけの政とげて、覆奏し給ふべし。」と申して、海に入りまさむとする時に、菅疊八重・皮疊八重・絁疊八重を波の上に敷きて、その上におりましき。こゝに其の暴浪自らなぎて、御船え進みき。爾、其の后の歌はせるみ歌、

さねさし　相模の小野に　燃ゆる火の　火中に

燒遣　靜岡縣志太郡燒津町に燒津神社ありて日本武尊を祀る。前に相模國とあるは誤か。

走水海　浦賀海峽。

立ちて　とひし君はも

故、七日ありて後に、其の后の御櫛海邊によりたりき。乃ちそのみ櫛を取りて、御陵を作りて治め置きき。

それより入り幸でまして、悉に荒ぶる蝦夷等を平け、また山河の荒ぶる神等をやはして還りのぼります時に、足柄の阪本に到りまして御粮きこしめす處に、その阪の神白き鹿になりて來立ちき。爾、其の咋遺りの蒜の片端もて待ちうち給ひしかば、其の目に中りて打殺さえたりき。故、その阪に登り立ちてねもごろに歎かして、「阿豆麻波夜」と詔り給ひき。故、その國を阿豆麻と謂ふなり。

卽ちその國より越えて甲斐に出でて、酒折宮にましくける時に歌ひ給はく、

にひばり　筑波を過ぎて　幾夜か寢つる

御陵　神奈川縣中郡西村に吾妻神社あり。

足柄の阪本　今の足柄峠。

酒折宮　今の甲府市の東方なる西山郡里垣村の酒折八幡宮がその遺蹟なりといふ。

こゝに其の御火燒の老人、御歌を續ぎて歌ひけらく、

かゞなべて　夜には九夜　日には十日を

こゝを以てその老人を譽めて、東の國造にぞなしたまひける。

その國より科野國に越えまして、科野の阪の神を平けて、尾張國に還り來まして、先に期りおかしし美夜受比賣の許に入りましつ。故、こゝに、其の御刀の草薙劍を、其の美夜受比賣の許に置きて、伊服岐能山の神を取りに幸でましき。

こゝに詔り給はく、「この山の神は徒手にたゞに取りてむ。」と詔り給ひて、その山に登ります時に、山邊に白き猪逢へり。その大いさ牛の如くなりき。爾、言擧げして詔り給はく、「この白き猪になれる者は、その神の使者にこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむ。」と、詔り給ひて登りましき。こゝに

科野の阪　長野縣伊那郡より岐阜縣へ越ゆる險道。

伊服岐能山　滋賀縣と岐阜縣との堺なる伊吹山。

大氷雨を零らして、倭建命を打惑はし奉りき。故、還り下りまして、玉倉部の清泉に到りて、息ひませる時に、御心やゝ寤めましき。故、其の清泉を居寤清水とぞ謂ふ。

其處より發たして、當藝野の上に到りましし時に詔り給へるは、「吾が心恒はそらよりも翔り行かむと念ひつるを、今吾が足え歩まず、當藝斯の形に成れり。」とぞのり給ひける。故、そこを當藝と謂ふ。そこよりやゝ少しいでますに、いたく疲れませるに因りて、御杖を衝かしてやゝに歩みましき。故、そこを杖衝阪と謂ふ。尾津の前の一つ松の許に到りませるに、先にみ食せし時、そこに忘らしたりし御刀、失せずて猶ありき。爾、御歌よみし給はく。

尾張に　たゞに向かへる　尾津の前なる　一つ松吾兄を　ひとつ松　人にありせば　太刀佩けま

玉倉部　滋賀縣阪田郡と岐阜縣不破郡の間にある長競の地とも、阪田郡醒ケ井ともいふ。

當藝野　岐阜縣多藝郡。

當藝斯　船尾の舵。

杖衝阪　三重縣三重郡。

尾津の前　同縣桑名郡多度村・古濱村の地。

ましを　衣著せましを　一つ松　吾兄を

そこより幸でまして三重村に到りませる時に、亦「吾が足三重の勾なして、いたく疲れたり。」と詔り給ひき。故、そこを三重と謂ふ。

そこより幸でまして能煩野に到りませる時に、國思ばして歌ひ給はく、

大和は　國のまほろば　たゝなづく　青垣山
こもれる　大和しうるはし

また、

命の　またけむ人は　たゝみごも　平群の山の
熊白檮が葉を　髻華に挿せ其の子

此の歌は思國歌なり。又歌ひ給はく、

はしけやし　吾家の方よ　雲居たち來も

三重村　同縣三重郡内部村采女。

能煩野　同縣鈴鹿郡平野。

平群の山　奈良縣生駒郡生駒村の山地。

こは片歌なり。此の時御病甚急になりぬ。爾に御歌して、

をとめの　床の邊に　わが置きし　劍の太刀
其の太刀はや

と歌ひ竟へて卽ち崩りましぬ。爾、驛使をたてまつりき。

こゝに倭にます后等また御子等、もろ〳〵下りきまして御陵を作りて、そこの那豆岐田に匍匐ひ廻りて、哭かしつゝ歌ひ給はく、

なづきの　田の稻幹に　稻幹に　這ひもとほろ
ふ　ところづら

那豆岐田　廬附田の義にて御陵の周圍の田をいふ。

こゝに八尋白智鳥に化りて、天に翔りて濱に向きて飛行しぬ。爾、其の后また御子等、其の小竹の苅杙にみ足跭破るれども、其の痛きをも忘れて、哭く〳〵追ひいでましき。此の時の御歌、

淺小竹原　腰なづむ　そらは行かず　足よ行くな

又其の海鹽に入りて、なづみゆきましし時のみ歌、

海處行けば　腰なづむ　大河原の　植ゑ草　うみがは　いさよふ

又飛びて、そこの磯に居たまへる時のみ歌、

濱つ千鳥　濱よは行かず　磯づたふ

この四歌は皆その御葬に歌ひたりき。故、今に其の歌は天皇の大御葬に歌ふなり。故、其の國より飛翔り行ましして、河内國の志幾に留りましき。故、そこに御陵を作りて鎮りまさしめき。卽ち其の御陵を白鳥御陵とぞ謂ふ。然れども亦そこより更に天翔りて飛びいましぬ。凡て此の倭建命平國に廻りましし時、久米の直の祖、名は七拳脛、いつも膳夫としてみ從仕へ奉りき。（古事記）

志幾　大阪府志紀郡長吉村・三木本村。
白鳥御陵　同府南河内郡古市村大字輕墓。
直　上古の姓の一。

三　大和國原

わが上代文學には、日本群島に居住してゐた諸民族の間に發生し生育したところの文化の痕跡を止めて居る。しかし古代に於てその諸民族が未だ溶合せずして、各地に分布して居た時に當り、大和の國に居を占めてゐた所謂大和民族の間には、既にその固有の文化が釀成せられてゐたので、その文學が遂に國文學の主流をなすに至り、爾來悠々三千年、わが國文學史を貫流したのである。かくて大和の國は永い間の文化の中心地となつたために、上代文學に關する文獻は殆どこの地に於て成立したのである。

神武天皇が皇居を橿原の地に奠め給うてから、千三百數十年、歷朝おほむね高市・十市・磯城の三郡の中に都せられて、

高市・十市・磯城　奈良縣中央部にある郡名。十市郡は今磯城郡に合併せらる。

他郷に移つたことは寧ろ稀であつた。當時の皇居は一代ごとに處を異にして宮殿を營んだのであるから、その造營も簡單であつた。皇居の所在地は必ずしも都邑を形成するのではなく、國民が集團をなして點在した聚落に過ぎなかつた。故に皇居はその集團の散在してゐる集團内に於て移動したのである。かくて泊瀬・飛鳥・曾我の三川の流域に居住した人々の間に原始文藝は養育せられたのである。泊瀬川・飛鳥川などの流域は、昔と今とは異なるであらう。これらの川は土砂を押流すので、大雨の後にはもとの河床が高く涸れて、あらぬ處に濁流の漲るのが常であつて、飛鳥川の淵瀬は古來變り易きものとせられてゐたのである。香具山の麓に海原の如き埴安の池のできたのも、それは多武峰から流れ落ちる倉梯川のいたづらであつたであらう。

泊瀬川　源を磯城郡上之郷村に發し、初瀬町の南を經、三輪山の南麓をめぐり、奈良平野に出でて大和川に入る。
飛鳥川　源を高市郡高市村に發し、飛鳥村を經て大和川に入る。
曾我川　飛鳥川の西方にあり。飛鳥川に竝行して大和川に入る。
飛鳥川の淵瀬　古今集卷十八雜歌下に見えたる讀人知らずの歌に、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」
埴安の池　今、磯城郡香具山村大字南浦にその跡あり。
多武峰　磯城郡にあり。
倉梯川　寺川の一支流。

飛鳥川の東に天の香具山・耳成山、西に畝傍山があつて鼎立してゐる。いづれも平野の中に孤立した美しい小山である。畝傍山はやゝ形が鋭い。その附近は昔から森林であつたと思はれる。耳成山は形がなだらかである。古來梔子の樹を以て有名であるが、今も猶存してゐる。天の香具山はその背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たない。然し古代から最も人事と交渉の多い山で、神事にはこの山の眞榊を根こじにし、又この山の土を取つて齋瓮を作つたのである。

この三山の地が古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて、泊瀬の山々が聳え、南には多武・高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また多武・高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山がそゝり立つてゐる。たゞ北方のみ

梔子　クチナシ。茜草科に屬する常綠灌木。夏、六裂の白色花を開き、赤くして黃ばみたる六稜の實を結ぶ。
齋瓮　イミベ。神事に用ふる甕。

はやゝ開けて、奈良・郡山の平原を控へてゐるが、それもその末は奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやゝ激しい。昨日まで青葉に茂つてゐた山も、一夜の雨に黃葉してしまふやうに感じられることも少くない。併し京都ほどの氣象の激變はなく、雨量は少く、風もさして烈しくはない。晴れて雲の退くまゝに仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽より出でて、玉くしげ二上山に沈む。この平和の鄕に古聖帝は皇居を奠められたので、そこに住む人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目鼻にも偲ばれるのである。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を最北の奈良平原に遷して、こゝに平城宮を造營せられた。爾來七代七十餘年の間、こ

卷向の弓月が嶽　卷向山は磯城郡に在り。弓月が嶽・穴師山などはその一山なり。

玉くしげ　み・ふた・あくなどの枕詞。

二上山　今は「にじやうざん」と呼ぶ。奈良縣と大阪府との境にあり。

和銅三年　一三七〇年。

七代　元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七天皇の御代。

の地は帝都として榮えたのである。この南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平原に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せて、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河內國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、天空の開豁を喜んだのである。もゝしきの大宮人は佐保の內に邸宅を連ねて、馬醉木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。此の間に古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられた。萬葉集の前身である多くの家集も、恐らくはこの時代の前半に成つたのであらう。時に都を山近き恭仁の宮、海近き難波の京に遷したこともあつたけれども、それも一時で、

藤原　高市郡飛鳥村の邊をいふ。

高圓山　奈良縣添上郡に屬す。春日山の東南に竝ぶ。

佐保　奈良縣添上郡佐保村に發し、佐保山の麓を流れて大和川に入る。

懷風藻　一卷。天平勝寶三（一四一一）年、淡海三船編す。天智天皇より淳仁天皇に至る間の漢詩百二十篇を收む。

律令云々　天武天皇の定め給ひしところに基づきて、大寶年間に大寶律令を定められ、養老年間に之を修正せり。

恭仁　京都府相樂郡木津町の古稱。聖武天皇、一時こゝに都を遷し給へり。

難波　今の大阪市の古稱。仁德天皇こゝに都し給へり。

またもとの平城の京に還つた。時代はもう都を遷すには餘りに面倒な事情を伴なふやうになつてゐたのであらう。

青丹よし奈良の都は咲く花の薫ふが如しと歌はれてゐる。香具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを分けて草深百合の花咲みに咲ますを尋ぬる人もあらう。それより高取の山を越ゆれば、山峽の間を流れて吉野川はとほ白く西に走る。後の吉野朝の花は山上であるが萬葉人の遊んだところは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てて行幸せられたのは隨分昔からのことで、天武・持統以後も屢〻この宮に行幸せられた。

萬葉集頃の人々の通路は、葛城山の麓なる巨勢の野を通つて吉野川の溪谷に出た。それより下り、眞土の山を越えて紀伊の和歌の浦へも出た。難波への往還は、奈良からは生駒

青丹よし　萬葉集卷三雜歌に見えし小野朝臣老の歌に、「青丹よし奈良の都は咲く花の薫ふが如く今盛りなり」

夏草の　萬葉集卷七雜歌に見えし作者未詳の歌に、「道のべの草深百合の花咲みに咲みしがからに云云」

瀧つ河内　激流の流域。「河内」は河を中心として、河原より山裾に至るまでの範圍をいふ。

眞土の山　奈良縣と和歌山縣との境にあり。吉野川の北岸に當る。

山脈を越えた。峰の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧げして峠に出れば、かゞやく難波の海は眼の前に廣げられて、遣唐の船舶も、その岸の住吉の神を祈つて眞楫しゞぬき漕ぎわかれたのである。奈良より北へ奈良阪を越えれば、泉川の清流は鹿背山の間を流れて來る。いはばしの近江の國へはこれから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠であつた。

大君のまします時は卽ち都であるが、天皇の御心が一旦その地を離れて北へ奈良阪を越え給へば、さしも「ここは」にと思ひ定めて造られた奈良の都も、いつしか衰へて、僅にその東部のみが興福寺の勢力の下に殘つた。これが現在の奈良市である。

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひ

龍田の神　奈良縣生駒郡三郷村にある龍田神社。今は官幣大社なり。風神なる天御柱神・國御柱神を祭る。

住吉の神　大阪市住吉區にある住吉神社。今は官幣大社なり。表筒男神・中筒男神・底筒男神・神功皇后を祭る。

しゞぬく　繁く連なる意。

泉川　今の木津川の古稱。

鹿背山　京都府相樂郡鹿背山村にあり。

いはばし　岩橋。あふ・よる・なびにかゝる枕詞。

立ちかはり云々　萬葉集卷六雜歌に見えたる悲寧樂故京都作歌と題せる田邊福麿の長歌、「やすみしし吾が大君の高しかす日本の國は云々」の反歌なり。福麿は天平の頃の人。

けり

これは天平の中ごろに、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺跡を見て、また同じ感慨に浸るであらう。併し工作物は亡びても、いにしへ人の生活の蹤は儼として今も殘つてゐる。古人の殘した文藝の力はたやすく吾人の心の上に古人の心を呼起さしめる。文化の故郷を偲び祖先の心情を懷かしむ者に取つては、大和の國の一草一石も意味ある存存である。

（武田祐吉―「上代日本文學史」による）

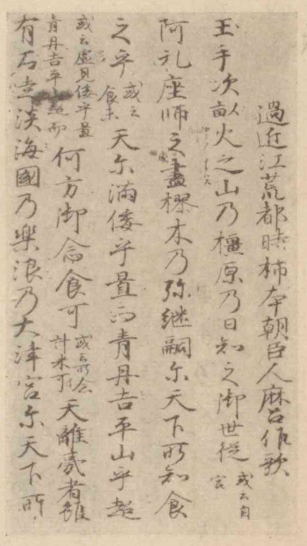
敷島のやまとのくには言靈のさきはふ國ぞまさきくあり
こそ（作者未詳）

武田祐吉　文學博士。東京の人。國學院大學の出身。國學院大學教授。

四　萬葉集鈔

過近江荒都時、柿本朝臣人麿作歌

玉だすき　畝火の山の


過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌
玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從
阿礼座師之豊御食乃炊屋乃
之宇
天下所知食
天下乃海
何方御宮
天雖滿者
有石之
元暦萬葉集

橿原の　ひじりの御世ゆ
生れましし　神のことごと
樛の木の　いや繼ぎ〳〵に
天の下　しろしめしをし

参考資料

萬葉集　二十卷。撰者不詳。仁德天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首（短歌四千百七十三、長歌二百六十二、旋頭歌六十一）を漢字の音訓もて記錄せるもの。參考書には、

仙覺律師「萬葉集抄」
僧　契沖「萬葉代匠記」
賀茂眞淵「萬葉考」
橘　千蔭「萬葉集略解」
鹿持雅澄「萬葉集古義」
木村正辭「萬葉集美夫君志」
次田　潤「萬葉集新講」
井上通泰「萬葉集新考」
佐々木信綱等「校本萬葉集」
同　「萬葉集選釋」
武田祐吉「萬葉集新解」
辰巳利文「大和萬葉地理研究」
川村悅麿「萬葉集傳說歌考」

空見つ大和をおきて
青丹よし　奈良山を越え
いかさまに　おもほしめせか
天離る　鄙にはあれど
いはばしの　近江の國の
さゝ波の　大津の宮に
天の下　知ろしめしけむ
天皇の　神のみことの
大宮は　こゝと聞けども
大殿は　こゝといへども
春草の　しげく生ひたる
霞たち　春日の霧れる
百敷の　大宮どころ

柿本人麿　歌人。持統・文武の兩朝に仕へて舍人たり。山部赤人と竝稱せらるゝ歌聖。歿年不詳。此の歌萬葉集卷一雜歌に見えたり。

玉だすき　うね・かくにかかる枕詞。

橿原のひじりの御世　神武天皇の御聖代。

空見つ　大和にかゝる枕詞。

天皇　天智天皇を申す。

見ればかなしも

反歌

さゝ浪の志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船まちかねつ

山部宿禰赤人望不盡山歌

天地の　分れし時ゆ
神さびて　高く貴き
駿河なる　布士の高嶺を
天の原　ふり放け見れば
渡る日の　影も隱ろひ
照る月の　光も見えず
白雲も　い行き憚り
時じくぞ　雪は降りける

辛崎　滋賀縣滋賀郡下阪本村。

山部赤人　聖武天皇頃の人。萬葉集の中の歌人として、人麿と竝稱せられ、共に歌聖として仰がる。歿年未詳。此の歌同集卷三雜歌に見えたり。

語り繼ぎ　言ひ繼ぎ行かむ
不盡の高嶺は　ゆ
反歌
田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける。

思子等歌

瓜はめば　子供おもほゆ
栗はめば　ましてしぬばゆ
いづくより　來りしものぞ
まなかひに　もとな　かゝりて
やすいしなさぬ
反歌
しろがねも黃金も玉も何せむに　まされる寶子に

思子等歌　同集卷五雜歌に見えし山上臣憶良の歌。山上憶良は從五位下伯耆守たり。曾て遣唐使に從ひて渡唐す。後、詔によりて東宮に侍す。天平五（一三九三）年歿す。年七十四。
まなかひ　眼の前。眼前。
もとな　何故とは知らず氣にかゝりて。やるせなくて。

しかめやも

詠水江浦島子

春の日の　霞める時に
住の江の　岸に出でゐて
釣船の　とをらふ見れば
古の　事ぞおもほゆる
水の江の　浦島の兒が
かつを釣り　鯛つりほこり
七日まで　家にも來ずて
海阪を　過ぎて漕行くに
わたつみの　神の處女に
たまさかに　い漕ぎむかひ
相とぶらひ　ことなりしかば

□尋常小學國語讀本三　うらしま太郎參照
詠水江浦島子　同集卷九雜歌に見えし作者未詳の歌。
住の江　京都府與謝郡さいふ。
水の江の浦島の兒　水の江は氏、浦島は名、子は男子の美稱。

かき結び
わたつみの
内のへの
たづさはり
老いもせず
永き世に
世の中の
わぎも子に
暫くは
父母に
明日のごと
言ひければ
常世邊に

常代にいたり
神の宮の
たへなる殿に
二人入りゐて
死にもせずして
ありけるものを
愚人の
告りて語らく
家に歸りて
事をものらひ
吾は來なむと
妹がいへらく
またかへり來て

今のごと
この篋
そこらくに
すみの江に
家見れど
里見れど
あやしと
家ゆ出でて
垣もなく
この筥を
もとのごと
玉くしげ
白雲の

あはむとならば
ひらくなゆめと
堅めし言を
歸りきたりて
家も見かねて
里も見かねて
そこに思はく
三年のほどに
家うせめやと
開きて見ては
家はあらむと
少し開くに
箱より出でて

常世邊に　たなびきぬれば
立ち走り　叫び袖ふり
こいまろび　足ずりしつゝ
たちまちに　情けうせぬ
若かりし　肌もしわみぬ
黒かりし　髪も白けぬ
ゆなくは　息さへ絶えて
後つひに　命死にける
水の江の　浦島の子が
家どころ見ゆ

反歌

常世邊に住むべきものを劍刀己が心から鈍やこの君

（萬葉集）

ゆなくは　後々にはの意。

五　平安朝の文學

萬葉と古今とを比較すれば、次のやうな心の變化を看取することができる。萬葉の歌人は、

睦月たち春の來らばかくしこそ梅を折りつゝ樂しきを經め

梅の花咲きて散りなば櫻花次ぎて咲くべくなりにたらずや

の如く刹那に生き、それを享樂することができた。古今の歌人は、

色も香もおなじ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける

花の色は移りにけりな徒らに我が身世にふるながめ

萬葉　萬葉集。
古今　古今和歌集。二十卷。醍醐天皇の勅を奉じて紀貫之等の撰びたる歌集。
睦月たち　萬葉集卷五雜歌に見えたる大貳紀卿の歌。
梅の花　同集同じ卷に見えたる藥師張氏福子の歌。
色も香も　古今集卷一春歌上に見えたる紀友則の歌。
花の色は　同集卷二春歌下に見えたる小野小町の歌。

めせしまに

の如く刹那の過ぎゆくを嘆き、

梅が香を袖に移して留めてば春はすぐとも形見な
らまし

の如く感傷的に刹那を留めんとし、

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけか
らまし

の如く刹那を一層深く味ははんとすることに自意識的に
なつて却つて焦躁した。萬葉の歌人は、

能登川の水底さへも照るまでに三笠の山は咲きに
けるかも

春の苑くれなゐ匂ふもゝの花下照る道にいで立つ
少女

梅が香を　同集卷一春歌上に見えたる讀人しらずの歌。

世の中に　同集同じ卷に見えたる在原業平の歌。

能登川の　萬葉集卷十春雜歌に見えたる作者不詳の歌。能登川は奈良市春日山より發し、三笠山の麓を經て、佐保川に流れ入る川。

春の苑　同集卷十九に見えたる大伴家持の歌。

の如く鮮明なる色調を喜んだ。古今集には滿開を讃嘆する
歌は殆どなく、

花散らす風の宿りは誰か知るわれに教へよ行きて
恨みむ

の如く、散るをあはれがり恨んだ歌が多い。また、

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくも
のぞなき

の如く、平安朝の歌人は霞の奥の花のにほひ、晝よりも夜の
調子を喜んだ。奈良朝の色は生命の輝であり、實感の色であ
る。平安朝の色は想像を娯しまし め、情趣的調和を深める暈
色である。

萬葉の歌ふ經驗は特殊である故に『われ』『汝』の代名詞及び
地名などが絶えず詠入れられてゐるが、古今のそれは典型

花散らす　古今集卷二春歌下に見えたる素性法師の歌。

照りもせず　新古今集卷一春歌上に見えたる大江千里の歌。

である故に、かゝる代名詞は不必要になり、吉野春日野等の代表的なもののみとなつた。自然に對しても、萬葉では、

冬ごもり春さり來らし足引の山にも野にも鶯なくも

の如く、實感をありのまゝに歌ひ、古今では、

鶯の谷よりいづる聲なくば春來ることを誰かしらまし

の如く、理窟に傾きがちである。また古今の歌人は、

春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき

の如く、對照法を用ひて歌を構成してゐる場合が多い。一般に萬葉の詩はおのづから歌はれた歌であり、古今以後の歌は作られた歌であるやうな印象を受けることが多い。土佐

冬ごもり　萬葉集卷十春雜歌に見えたる作者未詳の歌。

鶯の　古今集卷一春歌上に見えたる大江千里の歌。

春の日の　同集同じ卷に見えたる文屋康秀の歌。

土佐日記の著者　紀貫之。

日記の著者は歌を書きつける毎に、「辛くひねり出して」といつてゐる。

平安朝の初に於ては、興味の中心が刹那より連續へ、個體的より典型的へ移りつゝあつたことを感ずると同時に、反省する心が目ざめて、實感の率直な告白より想像力による構成的表現の力を得つゝあつたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自我を連續の相の下に見出さんとしたがためであらう。日記は現存せるものの他にもあつたことは、紫式部日記及びその他の日記を綜合して作つたらしい榮花物語によつても推察される。また源氏が須磨に於て繪日記をつけ、「紫の上もわが御有樣を日記のやうに書き給へり。」などある句からも、

紫式部日記　二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の日記。

榮花物語　四十卷。宇多天皇より後朱雀天皇までのことを載せ、殊に藤原道長のことを詳述せる物語。作者未詳。

日記をつけることが、教養あり、徒然わぶる當時の人々の常であつたやうに想像される。かゝる日記は、多くは三人稱で書かれ、表現も回顧的である。蜻蛉・和泉式部・更級日記等は和歌が中心であつて、他の部分は後に歌が作られた事情を想ひ出して敍述したと考へらるゝ節が多い。蜻蛉の後半は短篇小說に近づいてゐる。伊勢物語は在五中將日記と稱せられ、和泉式部日記は和泉式部物語とも稱せられた。平安朝の日記文學は抒情詩と物語との中間に位するものである。自己の生活を反省し、その抒情的に高潮した刹那々々を聯結して表現し、連續の相の下に人生を觀照する態度は、更に自由に想像力を活して人生を描かんとする態度に進みゆくのが自然である。

物語は「汝」と「我」との關係の推移――歡び・嘆き・矛盾・消長・環

蜻蛉日記　八卷。右大將道綱の母の作。天曆年間より天延年間に亘る二十餘年間に、作者の身邊に起れることを年月のもとに記せり。

和泉式部　一卷。和泉式部の作。長保五（一六六四）年四月より翌寛弘元年正月までの日記。

更級日記　一卷。菅原孝標の女の作。東國より京都に上る紀行を主としたる日記。

伊勢物語　二卷。作者未詳。百二十六條の小話集にて、概ね「昔、男ありけり。」と筆を起し、次に來る和歌の序詞書をなせり。

境との交渉、――を內容とする。記・紀は外なる世界の歷史であり、萬葉は內なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歷史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歷史を輕んじ、心情の歷史を重んじた。螢の卷に、紫式部は、「（物語）は神代よりあることを記し置きけるなむなり。日本紀などは唯かたそばぞかし。これら（物語）にこそ道々しく委しきことはあらめ。その人の上とてありのまゝに言ひいづることこそなけれ、善きも惡しきも世に經る人の有樣の、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて、言ひおき始めたるなり。善きさまに言ふとては善きことのかぎりをえり出で、人に隨はむとては、又あしきさまの珍らしきことを取りあつめたる、皆かたがたにつけて、この世の外の事ならずかし。」といつてゐ

記　古事記。

紀　日本書紀。三十卷。神代より持統天皇十一（一三五七）年八月までの事蹟を漢文にて記せるもの。養老四（一三八〇）年舍人親王・太安麿等勅を奉じて撰ぶ。日本紀。

螢の卷　源氏物語の卷の名。

る。從來の歴史は眞實の外面を粗雜に語つてゐたに過ぎない、心のことが神代よりこの方、眞に在ることである、眞の價値である、物語はこれを精微に表現するものであるとの自覺が源氏物語を產んだ。當時の人々がこの物語に最も充實した價値ある生活を見出したことは、更級日記の著者が、「源氏を一の卷よりして人も交らず几帳のうちにうち臥して引きいでつゝ見る心地、后の位も何かはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外のことしなければ、自ら名などはそらに覺え浮かぶをいみじきこと」に思ひ、物語のうちにある生活に憧れたことによつても想像される。

しかし、紫式部の考へた價値はあまりに主觀的であつて、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心情の推移

が興味の中心になつてゐる。しかし、精神の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良朝以後の人々は狹い主觀の世界に閉ぢこもり、平安朝の貴族は權勢や官位を得んとする運動と、歌舞遊樂の生活と以外になすことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、世間的な經驗を殆ど持たなかつたのである。精神的成長は主觀と超主觀的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後者が內化されることによつて可能になる。主觀に閉ぢこもつた人人は道德的意識も朧げであつて、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連續は弛緩・倦怠・分裂に終る。連續的な姿にせんとすれば却つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑剌たる印象を、緊張した斷想を、そのまゝに書きつけた。それは枕草子・徒然草の如き隨筆文學

枕草子　清少納言の著した隨筆。
徒然草　吉田兼好の著した隨筆。

である。

萬葉と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雜を通過した簡潔さがある。前者は刹那刹那に生きた人々の表現であり、後者は連續の世界を分裂せる刹那に集中した人々の表現である。和歌に於ても、古今以後の典型的趣味を超えて、再び印象的な、敍景的な表現に赴いた新古今の新鮮味は、同一の傾向から生まれたものであらう。當時の歌に於て、萬葉ぶりの新しい流行があつた。しかし萬葉、詩人の純樸はそのまゝに復活することの出來るものではない。

奈良朝の歌人は純樸であつたが、平安朝の文學者は感傷的になつた。平安朝の優秀な作家は、皆、縣の少き國守か、その子女であつて、地方の素樸な生活に接觸し、それと堂上貴族

新古今　新古今和歌集。二十卷。後鳥羽上皇の詔を受けて藤原定家等の撰びたる勅撰集。

の浮華な生活とを對照して眺め得る位置にあつた。彼等は地方人の蒙昧のうちにある時は都に憧れたであらうが、宮仕をするに及んでは、外面の光彩に心醉することなく、絶えず反省を促されたであらう。藤原氏に私有された文明は、制限された、極めて狹苦しいものであつて、貴族生活を讃美することなくしては、その中に迎へ入れらるゝことなく、一言の非難もその圈外に放逐されたであらう。されば、彼等の言葉は婉曲を極め、思ふことを朧にうちかすめ、人生の批評を言葉の奥深く祕めなければならなかつた。彼等は主觀的でありながら、主觀を直截に表現し得なかつた。かくて文章のリズムは低く、細やかな調子となり、その表現は不徹底になつた。源氏に表現された世界は、永遠の黄昏の沈滯した空氣に垂れこめられて、人々は優柔不斷となつた。平安朝の文學

リズム　調子。Rhythm.

は妥協的なものであつて、裝飾の要素が多く、外面の華美によつて內部の貧弱を補はうとしてゐた。貴族等は只享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は恐ろしいことであつたらう。當時の佛教は、國々に國分寺を建てた奈良朝の人道的熱誠もなく、個人の壽福を祈る加持祈禱教となり、寺院・法會・僧侶・讀經等、皆貴族の官能を喜ばすやうに裝飾化された。疫病・「もののけ」の怖に惱み、享樂の生活によつて無氣力にされた當時の人生には、奈良朝の晴朗は影も留めてゐない。當時の秀でた人々には、この不徹底さを逃れんとする希望が早くから動いてゐた。貫之は諧謔と典型美とによつて悲哀を忘れようとしてゐるが、蜻蛉日記の著者は、當時の婦人の苦悶をかなり深刻に表現した。和泉式部は宮仕の浮沈多き生活と僧庵の靜かな生活との對照を夢のやうに

感じた。紫式部は美的生活に對する興味と冥想との傾向を有し、初は前の傾向に從つて現實と理想とを調和しようとしたが、晩年には後の傾向に從つたやうである。主觀に生きることは、その奧に超主觀的なものを見出すのでなければ、唯自己の世界を狹めるのみである。更級日記の著者は、物語と幻想とのうちに生き、夢と現實との區別もなかつた。夢が賣買されたのはこの時代のことである。藤原の榮華が衰微し始めた時、その黃金時代の追懷に現實を忘れようとしたことが、榮華物語などの書かれた動機であらう。しかし沈滯は息苦しいほどになり、彌縫と虛飾とによつて內部の靡爛を隱して來た文明は、全く行きつまつて潰滅した時に、人生をはかなみ、これに執著するを迷忘とし、享樂を罪とする厭世觀が盛んになつたのは自然である。西行や長明はこの思

夢が賣買　玉葉集・宇治拾遺物語・曾我物語等にその事實を記載せり。

西行　俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕ふ。出家して四方に周遊し、建久元（一八五〇）年寂す。年七十三。

長明　鴨長明。和歌所寄人となり、後出家して日野山に閑居す。建保四（一八七六）年寂す。年六十三。

潮の代表者である。

平安朝の『つれ〴〵』といふ語は、世紀末のアンヌイといふ語を聯想せしめる。紫式部はその作品を中宮に奉る際に、「されど徒然におはしますらん。またつれ〴〵の心を御覽ぜよ。」と書いてゐる。これは紫式部日記が書かれた動機を語つてゐる句であらう。源氏を讀んでも、遊樂がつれ〴〵を慰めるために行はれたことが多かつたのを感じる。つれ〴〵とは、展開なき沈滯のなやみ、充實した人生を見出し得ざる悶ではあるまいか。兼好が、「つれ〴〵なるまゝに日ぐらし硯に向かひて、心に移り行くよしなしごとをそこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。」と書いた序文は、「充實した生活、展開する思惟に入ることが出來ぬ。この途を見出さんがためには分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して、

アンヌイ　倦怠。Ennui.

中宮　上東門院を申す。

されど徒然に　紫式部日記に見えたる語。

つれ〴〵なるまゝに　徒然草序段、開卷第一の句。

我が姿を如實に眺めなければならぬ。然るに何といふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感ずる。」といふ如き意味ではなからうか。西行や長明は社會と人生とに背き、自然の愛、彼岸の宗教に逃れようとした人であるが、兼好はこの對立の一半を捨てて、他の半面に生きるには餘りに複雜な心の所有者であつた。彼の心中には、平安朝の美的趣味と鎌倉・室町時代の厭世觀とが爭つてゐた。彼にとつて、「つれ〴〵わぶる」心は靜寂主義に赴かんとする心である。彼は「佛に仕う奉るこそつれづれもなく、心の濁も清まる心地すれ。」といつて、社會生活を離れようとしてゐる。しかし一方には來世の信仰に生きることの出來ぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識ぶり、古き世を戀ひ、

佛に仕う奉る　徒然草第十七段の句。

家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて清貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。彼は元來、享樂主義の傾向を有してゐた。そして彼が死を直視し、人生の無常を痛感したことは、却つて生の價値を切實に感じ、最も充實した刹那を持つやうに、それがためには自己を知り、自己に忠實になり、自己に集中しようとした。かゝる複雜な精神內容を統一することは、當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者であつて、彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想が理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮した文章であつて、辯證論的な考へ方の眞摯さがある。これを消閑の戲筆と見ることは不可能である。（土居光知―「文學序說」）

辯證論的　Dialectic の譯。直觀・經驗によらず、概念を分析して事の理を研究すること。

土居光知　英文學者。高知縣に生まる。東京帝國大學の出身。東北帝國大學教授たり。

六　敍事詩の展開

上古、中央集權政府の確立と新文化の輸入との結果は、絕えず舊來の傳說遺聞を散佚する傾ありしかば、こゝに修史の事業は起り、風土記編纂の計畫は始れり。日本書紀・古事記は傳へて今日に至れども、風土記は概ね亡佚して、今僅に出雲風土記の全部と他に二三の殘缺とを存するに過ぎず。古事記は舊記の口誦によりて安麻呂の筆記せしものと稱し、務めて舊辭を保存せしものの如し。上代の敍事詩は或はその中に求むべきに非ざるか。然れども、安麻呂が眞意を以て文章を改刪せしところ亦無きに非ざるべければ、もとより之を以て純粹なる最舊

一矢賀芳

風土記　和銅六（一三七三）年の詔に從ひ、諸國に於て編纂進獻したる國々の地誌。現に完存するものは出雲風土記にして、常陸・播磨の大部、肥前豐後の一部もなほ現存せり。

安麻呂　太安麻呂。文武天皇の朝、從四位上、民部卿に拜せらる。博學にして、故典に通じ、文をよくす。勅を奉じて古事記三卷を撰ぶ。養老七年歿す。

文學とは目すべからざるも、風土記の文と併せて之を奈良朝の散文と見るを至當とせんか。

凡そ奈良朝の世、社會萬般の發達は大いに見るべきものありしに關らず、文字は尙漢字を用ひて、之を音韻的に使用せしのみ。いはゆる萬葉假名の時代にして、太古以來奈良朝を通じては、我に國字なき時代なり。假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは、淸和・文德兩朝以後にあらんか。これよりして、韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と、之に對する翫賞とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

和歌の流行はまづ和歌に關する物語を產めり。伊勢物語、一名在五中將物語は、和歌についての傳說集なり。在五中將

在五中將　在原業平のこと。

の初冠より書起して、その今はの時の歌を以て筆を收む。すべて歌を主としてその由來・境遇を敍述せるものにして、物語の文は卽ち和歌の序の如し。書中の「むかし男」はすべて業平の事と了解せられ、卷中の歌は悉くその歌と見做され、後の勅撰集にさへ業平の歌としてこの物語より引用せるもの多し。然れども、篇中の歌は萬葉集・古今六帖・新撰萬葉集中に見ゆるもの尠からず。或は多少其の句を變更したるものあり。業平以後の作者の歌も亦加れり。これらは、要するに人口に膾炙せる古今の名歌を基礎として、その歌の由來を說きたるものといふべし。

萬葉集十六に有由緣歌として古歌に伴なへる各種の傳說を擧げたり。これ卽ち伊勢物語と性質を同じうせるものといふべし。和歌に關する傳說は、後世に至りて愈〻多し。平安朝

古今六帖　十二卷。私撰歌集。紀貫之の女の撰と傳へらる。四千六百餘首の歌を六帖に分類收載せり。

新撰萬葉集　二卷。寬平年間の后宮の歌合の歌などを眞字にて書き、七言絕句を添ふ。菅原道眞の撰と傳へらる。

有由緣歌　ユカリアルウタ。萬葉集卷十六に見えたる有由緣歌は、櫻兒の歌・竹取翁の歌以下數多あり。何れもその歌の由來を說明せる序の詞を置く。

風流時代の產物としてまづ伊勢物語の出でたるは、たまたま以て國民が和歌に對する感興の旺盛なるを示したるものに過ぎず。余は之を名づけて歌物語と稱す。歌を主として其の種々の境遇を擧げたるものにして、歌の趣味その中核をなせばなり。伊勢の後に大和物語あり。同じく歌物語にして、當時の名歌に關する說話を收め、又弘く古代の和歌傳說を收錄せり。采女・菟名日處女の類、萬葉を去ること久しくして已に幾多の變遷を生じたるを見る。その伊勢物語と相竝びて後の歌人に尊崇せられたるは、亦故ありといふべし。

物語の祖と稱せらるゝ竹取物語は、月中女子の傳說を骨子として、後の物語類とはその性質を異にすれども、話說の一段毎に言語の滑稽を以て結び、之に和歌を添加せるは、尙歌物語の性質を有せりといふべく、和歌と物語とは到底相

大和物語　二卷。歌を中心とせる小話を多く集めたる短篇物語集。作者は異說多くして詳かならず。中に、姨捨山の話、采女の投身の話、或は菟名日處女の話などを收む。

竹取物語　一卷。赫映姫を中心とせる物語。作者未詳。

離るゝ能はず。

うつぼ物語は源氏以前の物語として、恐らくはその最も大部なるものなるべく、その主人公仲忠の父俊蔭の事を敍するや、亦印度の宗教傳說によりて奇怪不思議の談多し。

落窪物語も亦源氏以前の物語にして、繼子傳說を骨子とす。源氏に、繼子物語多しといへるは、この類をいへるなるべし。

かくの如き種々の物語は、尙外にも多かりしならん。源氏・枕草子にも物語の名十五六を擧げ、風葉集には百九十五種を擧げたり。今皆傳らず。然れども、大抵異曲同工にして、其の傳らざるは寧ろ其の特色なきがためか。かくの如き物語册子の流行につれて、源氏物語は成れり。源氏物語はこれらの物語を大成したるものといふべく、平安朝物語の白眉とし

うつぼ物語　二十卷。仲忠を中心とせる長篇物語。作者未詳。

落窪物語　四卷。落窪の君を中心とせる物語。作者未詳。

風葉集　二十卷。私撰和歌集。撰者未詳。古今の物語中よりの和歌千五百餘首を收めたり。

源氏物語　五十四帖。光源氏君竝びに薫大將を主人公とせる長篇物語。紫式部の作。

て、この時代の代表的傑作と見做すを得べし。全篇貫通の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の女性の性格も亦明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。かの歌物語が歌について種々なる戀の境遇を敍述したるは、こゝに至りて始めて完全大成せられたりといふべし。

源氏の大作たる所以は、その人物の描寫に於けると同じく、その自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點にあり。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。上古以來人事と自然とを融合せる詩的思想は、こゝに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず和歌の景情を含めり。源氏は卽ち和歌の最も大なるものなり。

人事の境遇と自然の推移との常に結合して離るべからざるは、五十四帖を一貫して、敍事的小說といはんよりは、半

ばは一大抒情詩の感あらしむ。人物の形容の常に自然に對比せられたる、卷名の多くは自然の景色を離れざる、もとより當然の結果にあらずや。後世の歌人が源氏物語を以て歌人必讀の書となししも、眞に故なきに非ず。

源氏の後、狹衣物語あり。紫式部の女大貳三位の作と稱せらる。

此の外に、更級日記の著者孝標の女の作といへる濱松中納言物語、及び兼輔の作と稱せらるゝ堤中納言物語あり。作者に就いては皆疑ふべし。文辭・脚色ともに源氏の上に駕する能はず。これらも亦源氏の脚色を襲へる點尠からざるが如し。然れども、源氏以前已に幾多の物語あり、源氏以後亦數多ありとすれば、單に事實の類似を以て源氏物語の脚色を襲へるものとなすことも早計なるべし。

狹衣物語　四卷。狹衣大將を中心とせる物語。作者は大貳三位といへども確說にはあらず。
大貳三位　歌人。名は賢子。後一條帝の乳母。また辨局といふ。
孝標　歌人。菅原氏。
濱松中納言物語　四卷。濱松中納言を中心とし、舞臺を唐土にとれる物語。
兼輔　藤原氏。賀茂川の堤の下に寓居せしによりて堤中納言といはる。
堤中納言物語　二卷。同名の書二種あれど、こゝにていへるは、十篇の短篇を含める短篇集なり。

堤中納言物語は完全なる一箇の物語に非ずして、十箇の小話を集めたるものなり。文辭は勁健にして後世の調を帶びたり。女流の作にはあらざるべし。

平安朝初期の歌物語一變して小說的物語となり、日記となり、再變して歷史物語を生ぜり。日記の或ものは自己見聞の事實を記して全く敍事的なるものあり。小說物語は宮中を中心とせる小說にして、亦常に朝廷の行事を漏らさず。その一轉して歷史を記するに至りたるは當然の推移といふべく、紫式部日記が現に榮華物語の初花の卷の中に入れるが如きは、この間の關係を示して餘りありといふべし。歷史物としては卽ち榮華物語・大鏡等あり。

榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始りて、紫野の卷に終るといへども、要は關白道長が一生の榮華を寫せ

初花の卷　榮華物語の第八の卷の名。

榮華物語　四十帖。別に目錄系圖一卷。宇多天皇の御宇より堀川天皇の御宇に到る約百五十年間の事蹟を描寫したり。作者未詳。

るものなり。この書、一名世繼物語と稱せしは、歷史物語といふに等し。歷史と稱すといへども宮廷の歷史なり、後宮の歷史なり。この點に於て假構物語と相距ること幾ばくも異ならず。物語の名も亦ふさはしといふべし。文辭は精練を缺くところ多し。この書の大鏡との關係に就いては、古來異論尠からず。

大鏡も亦世繼物語と稱せり。但し榮華の編年體なるに比して、大鏡は卽ち紀傳體なり。世繼物語の名は蓋し歷史といふに等しと見るべきか。文學上の價値よりすれば、大鏡は遙かに榮華の上に在り。大鏡は歷史として紀傳體を取れり。而してその藤原氏の榮華を寫すは全く榮華に等し。最初に帝王の本紀を擧げ、次に攝關の列傳を揭げ、最後に各種年中行事を敍述せるは、猶かの志類の如し。しかも雲林院の菩提講

大鏡　八卷。文德天皇の御宇より後一條天皇の御宇に到る百七十餘年間の歷史。作者未詳。

志　紀傳體の歷史にて、本紀・列傳の外に、天文・地理・神祇・禮樂などに關する沿革を記したる記錄。

に來り合へる大宅世繼・夏山繁樹二人の老翁の談話として之を記し、間々傍聽者の意見を挿み、全體の構造の詩的なるは、文學的の性質を存して正史のこちゝしきところなし。折にふれたる和歌を收錄して、飽くまで物語たる性質を失はず、その文やゝ勁健にして、筆端褒貶の意を含めるは、疑ふらくは男子の作なるべし。

この二書は、藤原氏時代の最後の文學として、藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。藤原氏の榮華は道長に至りて極る。二書ともに、道長の盛世を寫すを主眼として藤原氏の歷史を敍し來れるなり。しかも最もよく平安朝の上下の事情を見るべきものは、今昔物語の如きはなし。

今昔物語は女流の作物にあらず。文學の書といはんよりも傳說を集めたる書なり。印度・支那・日本にわたりて種々の

今昔物語　六十卷。一に宇治大納言物語といふ。平安朝の小話集なり。每章の始を「今は昔」と書起せるを以て此の名あり。源隆國の著。

奇談雜話を類聚せり。最初の五卷は印度の部にして、佛の降誕より始めて種々の奇蹟・靈驗を集め、支那の部、日本の部亦佛教に關し、佛徒の訓話極めて多し。かのジャータカの式によれる訓話あり。イソップの物語との同話も多し。啻に我が國の傳說を知る上に於ての珍書たるのみならず、眞に世界傳說研究者に取りては至大の寶といふべし。パンチャタントラ・ジャータカ等の書と對照して、その價値は尙その上にあるべし

抒情歌に始りて敍事的小說と發達せし國文學の趨勢は、鎌倉・足利の近古時代に入りては、更に劇詩的方面の發達を促し來れり。上流女子の彩管に成りて、宮廷の間に弄ばれし物語・草紙は、漸く變じて國民的文學の傾向を帶び來らんとす。

ジャータカ　闍多迦。釋迦在世中弟子に對して話したるものとして傳る說話中、其の前世に關するもの。本生經と譯す。

イソップ　紀元前六世期頃希臘に在りし童話作者。Aesop その童話集は世界的に弘く行はる。

パンチャタントラ　般遮單怛羅。處世の要義を巧妙なる寓言的物語とし、これを集めたる印度古代の書。五敎書の義なり。

近古時代を文學的に代表する最初の作物は、尙敍事詩の種類に屬せる戰記物語なり。

保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記等の軍記物語は、我が國民の有せる最大敍事詩といふべく、その後世の文學を感化し、民心に影響せること平安の物語よりも過ぎたり。いづれも其の當時の戰爭の起因より時世の關係を記し、單に戰鬪の記事に非ずして、人をして直ちに其の時代の一般情態を想起せしむるを得るは、眞箇の史筆に近きものあり。單に宮廷の事情を述べたる平安朝の歷史物語に比ぶれば、却つて數等の上にあり。古來之を以て歷史の參考書として珍重したるも亦故ありといふべし。然れども、これらの書は皆文學的の書にして、決して眞正の歷史に非ず。

軍記物語はよく武人の戰場に於ける武勇の活動を寫し

保元物語　三卷。主として保元の亂の顚末を記したる戰記物語。作者未詳。
平治物語　三卷。主として平治の亂の顚末を記したる戰記物語。作者未詳。
平家物語　十二卷。主として平氏一門の興亡の樣を記したる戰記物語。作者未詳。
源平盛衰記　四十八卷。主として源平兩氏盛衰の跡を記したる戰記物語。作者未詳。

出せるのみならず、亦其の常人としての情愛を現し得たり。戰袍怱忙の際尙その人情を到る處に發揮し、又詩歌・音樂の風流を棄てず、武人のなさけは全篇を通じて躍動す。これその乾燥無味なる軍日記と大差ある所以にして、この點に於てホーマーの大敍事詩を讀むの感あらしむるなり。而してホーマーの單に情事をのみ主とせるに反して、之は道德・節義を以て之を一貫し、理想的武士の面目躍如として、殊に趣味の橫溢せるを覺ゆ。この書の國民に愛玩せられたるも故ありといふべく、後世の武勇傳說は實に源平時代を以て中心とするに至れるも、亦これがためなり。

太平記は吉野朝凡そ五十餘年間の事を記して、時代の長きが如く卷數も亦四十餘卷あり。然れども、平家・盛衰記等を學べるものに過ぎず。義經記・曾我物語の二書は、體裁に於て

ホーマー　希臘の詩人。前九世紀頃の人。イリヤッド・オディッセイの二大敍事詩の作者といはる。Homer.

太平記　四十卷。主として建武中興前後の戰亂の樣を記せる戰記物語。作者未詳。
義經記　八卷。主として源義經の一生を記せる傳記物語。作者未詳。
曾我物語　十二卷。主として曾我兄弟の一生を記せる傳記物語。作者未詳。

已に他の軍記類にあらず、ともに箇人に關する敍事詩と見るべく、歷史的敍事詩に對して、之は傳說的敍事詩といふべし。

鎌倉時代に發達せる敍事詩は、鎌倉の末葉より次第に戲曲化せられんとする傾向を生じ來れり。演義・傳記は耳よく古人の事蹟を聽くを得べしと雖も、目之を睹る能はざるべければ、更にその人物を舞臺の上に活動せしめて、その行動を見、その言語を聞かんとするは自然の要求なるべし。鎌倉の末に流行せる田樂にも已に歷史的材料を取れるものあり。足利氏の初に至りて延年舞といふもの起りて、始めて戲曲の初步と見るべきものあり。又別に曲舞あり。之を大成せるは謠曲の能にして、足利氏に至りて能樂の起るに及び、從來の文學・技藝はすべてその中に吸收せらるゝに至り、能樂

田樂　デンガク。平安朝時代の中頃、農夫が耕作の勞を慰めんために演じたる舞踊。後支那傳來の散樂を取入れ、輕業的曲藝を加へて、流行せしも、猿樂の勃興と共に衰ふ。延年舞　延曆寺・興福寺などにて僧侶の演ぜし舞。簡單なる扮裝をなし、劇的要素を含めり。曲舞　クセマヒ。樂器を用ふることなく、扇拍子にて舞ふ一種の舞。

は實に一種の綜合美術として當時の耳目の娛樂を集むるに至れり。かくの如くして戲曲詩の發達を成ししは、近古文學に於ける一大偉觀といふべし。

和歌に發して中古物語となり、近古の軍記物語となり、更に之を戲曲化せる形に於て謠曲の發生せるは、上古より近古時代に至るまでの國文學變遷の大綱と稱すべく、抒情詩より敍事詩となり、敍事詩より劇詩となれる順路を經過し來れり。但し之を繼承し完成してあらゆる方面の發達進步を示したるものは、卽ち近世文學に在り。（芳賀矢一の文に據る）

伊勢の海の、伊勢の海の、淸き渚の、しほがひに、なのりそや摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ。（催馬樂）

芳賀矢一　文學博士。福井縣の人。東京帝國大學の出身。東京帝國大學敎授・國學院大學長等に任ず。昭和二年歿す。年六十一。

催馬樂　奈良朝時代の俗樂の一。平安朝に至りて、唐樂と共に雅樂の內に取入れらる。舞を伴なはず。

七月の都

春の初より赫映姫月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の月の顔見るは忌むことと制しけれども、ともすれば、人まには月を見てはいみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出で居て、切に物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げて曰く、「赫映姫例も月をあはれがり給ひけれども、此の頃となりては、たゞごとにも侍らざめり。いみじく思し歎くことあるべし。よく〳〵見奉らせ給へ。」と言ふを聞きて、赫映姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に。」と言ふ。赫映姫、「月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。赫映姫のある處に到り

参考資料

竹取物語　一卷。かぐや姫物語、又は竹取の翁物語ともいふ。作者不詳。参考書には、
小山伯鳳「竹取物語抄」
田中大秀「竹取物語解」
今泉定介「竹取物語講義」
福永弘志「竹取物語新釋」

赫映姫　竹取の翁嫗夫妻が竹の中より得たる女。

ふづき　陰暦七月の稱。又ふみづきといふ。

竹取の翁　野山に入りて竹を取ることを業とせる老人。

て見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる。」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ずにはあらむ。」とて、なほ月出づれば出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月のほどになりぬれば、なほ時時は打歎き泣きなどす。これをつかふものども、なほ物思すことあるべしと囁けど、親を始めて何事とも知らず。

はづき望ばかりの月に出で居て、赫映姫いといたく泣き給ふ。人めも今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも「何事ぞ。」と問ひさわぐ。赫映姫泣く〳〵いふ、「さきぐも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬ

あが佛　我が子の佛の如き清らなるものの意。

はづき　陰暦八月の稱。

るぞ。己が身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむこの世界にはまうで來にける。今は歸るべきになりにければ、この月の望に、かのもとの國より迎へに人々まうで來むず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひていみじく泣く。翁、「こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさおはせしを、我がたけたち竝ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。」といひて、「我こそ死なめ。」とて泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。赫映姫の曰く、「月の都の人にて、父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事も覺えず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉

れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず、罷りなむとする。」といひて諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃ならひて、たち別れなむ事を、心ばへなどあでやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へ難く、湯水も飲まれず、同じ心に悲しがりけり。

この事を帝聞しめして、竹取が家に御使遣させ給ふ。御使に竹取いで會ひて泣くこと限なし。この事を歎くに、髮も白く、腰もかゞまり、目も爛れにけり。翁今年は五十ばかりなりけれども、物思には片時になむ老になりにけると見ゆ。御使仰せ言として翁に曰く、「いと心苦しく物思ふなるは、まことにか。」と仰せ給ふ。竹取泣く〳〵申す、「この望になむ月の都より赫映姫の迎へにまうで來なる。たふとく問はせ給ふ。この望には、人々賜はりて月の都の人まうで來ば、捕へさせむ。」と申

す。御使歸り參りて、翁の有樣申して、奏しつることども申すを聞しめして宣ふ、「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、旦暮見馴れたる赫映姫を遣りては、いかゞ思ふべき。」かの望の日司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人を差して、六衞のつかさ合はせて、二千人の人を竹取が家に遣す。

家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人人も弓箭を帶して居り、母屋の内には女共を番にすゑて守らす。嫗塗籠の内に赫映姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁の曰く、「かばかり守る處に天の人にも負けむや。」といひて、屋の上に居る人々に曰く、「つゆももの空に翔らば、ふと射殺し給へ。」守る人々の曰く、「かばかりして守る處に蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと

六衞　左右の近衞・衞門・兵衞の六府の總稱。

塗籠　土藏造りの家。

思ひ侍り。」といふ。翁これを聞きて、頼もしがり居り。

これを聞きて、赫映姫は、「鎖しこめて守り戰ふべき下ぐみをしたりとも、あの國の人を、え戰はぬなり。弓箭して射られじ。かく鎖しこめてありとも、かの國の人來ば皆開きなむとす。相戰はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。」翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して、眼を摑み潰さむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を搔出でて、こゝらのおほやけ人に見せて、恥見せむ。」と腹立ち居り。

赫映姫曰く、「聲高になる宣ひそ。屋の上に居る人どもの聞くに、いとまさなし。いますかりつる志どもを、思ひも知らで罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、ほどなく罷ッぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親達のかへりみをいさゝかだに仕うまつらで、罷らむ道も安

まさなし　正無しの意にて、良からぬこと。

くもあるまじきに、月頃も出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心のみ惑はして去りなむことの、悲しく堪へ難く侍るなり。かの都の人は、いと清らにて老いもせずなむ、思ふこともなく侍るなり。さる處へまからむずるも、いみじくも侍らず、老い衰へ給へるさまを見奉らざらむこそ戀しからめ。」といひて泣く。翁「胸痛きことなし給ひそ。うるはしき姿したる使にもさはらじ。」とねたみ居り。

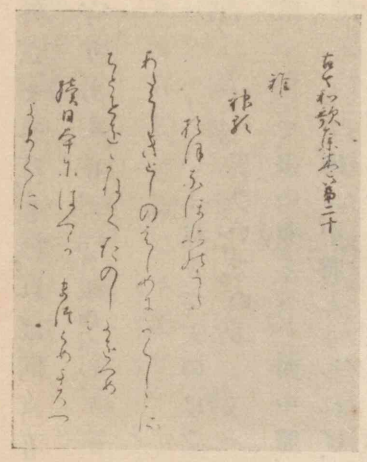
かゝるほどに、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のほとり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乘りて降り來て、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に襲はるゝやうにて、相戰はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外ざまへ往きければ、何れも戰はで、心地たゞ痴れに痴れて守りあへり。（「竹取物語」）

いまはとて天のはごろもきるをりぞ君をあはれと思ひいでぬる

とて、壺の藥そへて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣著つる人は、物思もなくなりにければ、車にのりて百人ばかり天人具して昇りぬ。其の後、翁嫗血の涙を流して惑へどかひなし。あの書きおきし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにか命も惜しからむ。誰がためにか何事も益もなし。」とて、藥もくはず、やがて起きもあがらず病みふせり。（「竹取物語」）

八　土佐日記鈔

男もすなる日記といふものを、女もして見むとてするなり。それの年の十二月二十日あまり一日の日の戌の時にかどです。そのよしいさゝか物に書きつく



傳紀貫之筆

ある人、縣の四年五年はて、例の事ども皆しをへて、解由など取りて、すむ館より出でて、舟に乘るべき處へわたる。これかれ知る知らずおくりす。年比よく具しつる人々なむわかれ難く思ひて、其の日頻りにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。

參考資料

土佐日記　一卷。紀貫之の作。土佐の國より京都に歸るまでの日記。參考書には、岸本由豆流「土佐日記考證」鈴木弘恭「訂正增補土佐日記考證」

古今和歌集卷第二十
雜
神歌
おほなほびのうた
あたらしきとしのはじめにかくしこそちとせなかれてたのしきをつめ
續日本にはつかへまつらめよろづよまでに

富士谷御杖「土佐日記燈」鹿持雅澄「土佐日記地理辨」松本弘蔭「土佐日記地理辨追考」今泉定介「土佐日記講義」

それの年　朱雀天皇の承平四（一五九四）年。

二十二日、和泉國までたひらかにと願ひたつ。藤原言實舟路なれどうまのはなむけす。上・中・下ゑひ過ぎていとあやしく、潮海の邊にてあざれあへり。（中略）

九日、つとめて大湊より那波の泊をおはむとて漕出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて見送りに來る人あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ御館より出で給ひし日より此處かしこに追ひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々のふかき志はこの海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて往く。これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎゆくまに〳〵、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれど、此の歌を獨言にしてやみぬ。

解由　ゲユ。平安朝時代に內外官の任期終りたる時、その引繼事務の滯りなかりし由を記して、新任者より前任者に渡せし文書。

九日　翌承平五年一月。

大湊　高知縣香美郡前濱村か。

那波　同縣安藝郡奈半利町。

おもひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずやあるらむ

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。その松の數いくそばく、幾千年へたりと知らず。本ごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴とびかふ。おもしろしと見るに、たへずして、舟人のよめる歌、

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千世のごちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は處を見るにえ勝らず。かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに〳〵、山も海もみな暮れ、夜ふけて西東も見えずして、天氣のこと、櫂取の心にまかせつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女はふなぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子、櫂取はふなうた歌ひて何とも思へらず。（中略）

宇多　同縣香美郡岸本町より手結村に至る海岸か。

五日、けふ辛くして、和泉の灘より小津のとまりをおふ。松原目もはるゝ〳〵なり。これかれ苦しければ詠める歌、

行けどなほ行きやられぬはいもがうむをつの浦なるきしの松原

かくいひつゝくるほどに、「舟とく漕げ、日のよきに。」と催せば、櫂取、舟子どもにいはく、「御舟より仰たぶなり。あさぎたの出で來ぬさきに、綱手はや引け。」といふ。この詞の歌のやうなるは、櫂取のおのづからの詞なり。櫂取はうつたへにわれ歌のやうなる事いふとにもあらず、聞く人の、あやしく歌めきてもいへるかなとて書きいだせれば、實に三十文字あまりなりけり。今日浪な立ちそと、人々終日に祈るしるしありて、風浪たゝず。今し鷗むれゐてあそぶ處あり。京のちかづく喜のあまりに、ある童のよめる歌、

五日　二月。

小津　大阪府泉北郡大津町。

いのり來る風間と思ふをあやなくに鷗さへだにな
　みと見ゆらむ

といひてゆく間に、石津といふ處の松原おもしろくて濱邊
とほし。また住吉のわたりを漕ぎゆく。ある人の詠める、

　いま見てぞ身をば知りぬる住の江の松よりさきに
　我は經にけり（中略）

九日、心もとなきに、明けぬから舟を引きつゝ上れども、川
の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる。此の間に和田の泊の
あがれのところといふ處あり、米・魚などこへば贈りつ。かく
て舟引きのぼるに、なぎさの院といふ處を見つゝ行く。その
院、昔を思ひやりて見ればおもしろかりける處なり。しりへ
なる岡には松の木どもあり。中の庭にはうめの花さけり。こ
こに人々のいはく、「これむかし名高く聞えたる處なり。故惟

石津　同郡濱寺町下石津。

住吉　大阪市住吉區。

川　淀川。

和田　今其の名を失ふ。大阪府北河内郡牧方町邊か、或は同府三島郡三箇牧村三島江附近かといはる。

なぎさの院　同府北河内郡牧野村字渚の邊。

喬親王の御供に在原業平中將の、

　世のなかにたえて櫻の咲かざらば春のこゝろはの
　どけからまし

といふ歌よめる處なりけり。」いま興ある人處に似たる歌よ
めり。

　千世へたる松にはあれどいにしへの聲の寒さはか
　はらざりけり

又ある人のよめる、

　君こひて世をふる宿のうめの花むかしの香にぞな
　ほにほひける

といひてぞ、京のちかづくを悅びつゝのぼる。かくのぼる人
人の中に、京より下りし時に、皆人子どもなかりき。至れりし
國にてぞ子うめる者どもありあへる。みな人舟のとまる處

世のなかに　此の歌伊勢物語には、第三句「なかりせば」として見ゆ。

に子を抱きつゝおりのぼりす。これを見て昔の子の母かなしきに堪へずして、

なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくて來るがかなしさ

といひてぞ泣きける。父もこれを聞きていかゞあらむ。（中略）

十六日、今日夕つ方京へのぼる序に見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、糂餅の法螺の形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬこゝぞいふなる。かくて京へ行くに、島阪にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにもかへりごとす。夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに月いでぬ。桂川月の明きにぞわたる。人々のいはく、「この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬さらにかはらざりけり。」と

山崎　京都府乙訓郡大山崎村。
小櫃の繪　小さき櫃に繪を描きたるを童の翫物に賣りしか。
糂餅　マガリ。油にて揚げたる餅。
島阪　同郡向日町の邊か。詳かならず。

いひて、ある人のよめる歌、

ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり

又ある人のいへる。

天ぐものはるかなりつるかつら川そでをひでても渡りぬるかな

又ある人よめる。

かつら川わがこゝろにも通はねどおなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば處々も見えず。京に入りたちてうれし。家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりていふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたり

つる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。されば、たよりごとに、物も絶えず得させたる。こよひかゝることと聲高にものもいはせず、いと恥づらく見ゆれど、志をばせむとす。さて池めいてくぼまり水づける處あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに千年や過ぎにけむ、かた枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大かた皆あれにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生まれし女子のもろともに歸らねば、いかゞはかなしき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちに猶かなしみに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。猶あかずやあらむ。又なむ、

見し人を松のちとせに見ましかば遠くかなしきわかれせましや

忘れがたくくちをしき事多かれど、えつくさず。とまれかくまれ疾く破りてむ。（紀貫之「土佐日記」）

山櫻よそに見るとてすがの根の長き春日をたち暮らしつる（紀貫之）

澤べなる眞菰刈りそけあやめ草袖さへひぢてけふや引くらむ

足引の山かき暮らししぐるれど紅葉はなほぞ照りまさりける

降る雪に色しまがへばうちつけに梅を見るさへ寒くぞありける

紀貫之　歌人。延喜年中醍醐天皇の勅を奉じて、紀友則等と共に古今和歌集を撰す。延喜六（一五六六）年御書所預となり、ついで土佐守に遷り、良吏の聞えあり。天慶八（一六〇五）年從四位下・木工權頭に進み、翌九年歿す。

九　須磨の秋

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の關吹越ゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、また無くあはれなるものは、かゝる處の秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少し搔鳴し給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

戀ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ

と謠ひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれ

[參考資料]
源氏物語　五十四帖、光源氏の君を中心人物とせる前篇四十帖と、薫大將を中心人物とせる後篇（宇治十帖）十餘帖とより成る。紫式部の著。主なる參考書には、
四辻善成「河海抄」
一條兼良「花鳥餘情」
西三條公條「源氏物語細流抄」
北村季吟「源氏物語湖月抄」
僧契沖「源註拾遺」
賀茂眞淵「源氏物語新釋」
本居宣長「源氏物語玉の小櫛」
萩原廣道「源氏物語評釋」
佐々醒雪外三氏「新釋源氏物語」
池邊義象・鎌田正憲「校訂源氏物語詳解」
金子元臣「定本源氏物語新解」

てあいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。實にいかに思ふらむ。我が身ひとつにより、親・兄弟かたとき立離れがたく程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戲事うちの宣ひまぎらはし、徒然なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ手習をし給ひ、珍らしき樣なる唐の綾などにさま〴〵の繪どもを畫きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語り聞えし海山の有樣を遙かに思しやりしを、御目に近くてはげに及ばぬ磯のたゝずまひ、になく書集め給へり。此の頃の上手にすめる千枝・常則などを召して、作繪仕う奉らせばやと心もとながりあへり。懷かしうめでたき御有樣に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕う奉るを嬉しきことにて、四

行平の中納言の　續古今集卷十羇旅歌に見えたる在原行平の歌に「旅人は袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」

五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ〳〵咲亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御さまのゆゝしう清らなるに、處がらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく打亂れ給へる御さまにて、

「釋迦牟尼佛弟子。」と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひのゝしりて漕行くなども聞ゆ。ほのかに、たゞ小さき鳥の浮かべると見やらるゝも心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲機の音にまがへるをうちながめ給ひて、

はつかりはこひしき人のつらなれや旅のそら飛ぶ聲のかなしき

と宣へば、良清、

直衣　ナホシ。平安朝時代貴人の平常の服。

かきつらねむかしのことぞ思ほゆる雁はそのよの友ならねども

民部大輔、

心からとこ世を捨ててなく雁をくもの餘處にもおもひけるかな

前の右近丞、

常世出でて旅の空なるかりがねも列におくれぬほどぞなぐさむ

「友まどはしては如何に侍らまし。」といふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれで、參れるなりけり。したには思ひ碎くべかんめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。

三月の朔日に出で來たる巳の日、「今日なむ、かく思すこと
ある人は御禊し給ふべき。」となまさかしき人の聞ゆれば、海
面もゆかしくて出で給ふ。いと疎かに、軟障ばかりを引廻ら
して、この國に通ひける陰陽師召して、祓せさせ給ふ。船にこ
とぐしき人形載せて流す
を見給ふにも、よそへられて、
知らざりし大海の原
に流れ來てひとかた
にやはものは悲しき
とて居給へるさま、さる晴に
出でて、言ふよしなく見え給ふ。海の面はうらゝと凪ぎわ
たりて、行方も知らぬに、來しかた行くさき思しつゞけられ
て、

古本挿畫

軟障　ゼジャウ。ゼンジャウ。一種の帷幕。白絹の幔幕の如きものにて、紫などの縁をつく。繪は松を描くを本とし、簾・壁に添へて引廻す。

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれ
となければ
と宣ふに、俄に風吹出でて、空もかき昏れぬ。御祓もしはてず、
立騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたゞしければ、皆
歸り給はむとするに、笠も取りあへず。さる心もなきに、よろ
づ吹きちらし、またなき風なり。波いと嚴しう立ち來て、人々
の足をそらなり。海の面は衾を張りたらむやうに光滿ちて、
雷鳴りひらめく。落ちかゝる心地して、辛うじてたどり來て、
「かゝる日は見ずもあるかな。風などは吹けど、景色づきてこ
そあれ。あさましう珍らかなり。」と惑ふに、なほ止まず鳴りみ
ちて、雨の脚あたるところ通りぬべく、はらめき落つ。かくて
世は盡きぬるにやと、心ぼそく思ひ惑ふに、君はのどやかに
經うち誦じておはす。暮れぬれば雷少し鳴り止みて、風ぞ夜

肱笠雨　ヒヂカサアメ。笠を取る暇もなきほどにて、肘を翳して凌ぐ雨の義といふ。にはかあめ。

もふく。多く立てつる願の力なるべし。今しばしかくだにあらば、浪に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、とりあへず人損はるゝことは聞けど、いとかゝることは、まだ知らず。」といひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいさゝか寢入り給へれば、その樣とも見えぬ人來て、「など、宮より召あるに參り給はぬ。」とて、たどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の龍王の、いといたう物めでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、このすまひ堪へがたく思しなりぬ。（紫式部―源氏物語）

秋のけはひのたつまゝに、土御門殿の有樣いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水の邊の叢、おのがじし色づき渡りつゝ、大方の空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれまさりけり。（紫式部）

紫式部　實名は傳らず。藤原爲時の女。藤原宣孝に嫁し、夫の死後上東門院に仕ふ。和漢の書に通じ、朝廷の典故に詳し。歿年不詳。

土御門殿　藤原道長の邸。

一〇　春は曙

春は曙。やう〳〵白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日華やかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音などいとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

參考資料

枕草子　異本多くして卷數一定せず。清少納言の隨筆。參考書には、
加藤磐齋「枕草紙抄」
北村季吟「枕草子春曙抄」
鈴木弘恭「訂正增補枕草子春曙抄」
松平　靜「枕草紙詳解」
武藤元信「枕草子通釋」
金子元臣「枕草子評釋」
永井一孝「校定枕草紙新釋」

淵はかしこ淵。いかなる底の心を見えて、さる名を付きけむと、いとをかし。ないりその淵。誰にいかなる人の教へしならむ。青色の淵こそ、又をかしけれ。藏人などの具にしつべくて。稻淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

野分の又の日こそ、いみじう哀に覺ゆれ。立蔀・透垣などの伏しなみたるに、前栽ども心ぐるしげなり。大きなる木ども倒れ、枝など吹折られたるだに惜しきに、萩・女郎花などの上に、よろぼひ這ひ伏せる、いと思はずなり。格子の壺などにさきはを殊更にしたらむやうに、こまぐ〳〵と吹入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとも覺えぬ。いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、うすものなどの小袿著て、まことし

藏人などの具　六位の藏人の定服は淺緑なれども、又青色のをも著く。

立蔀　タテジトミ。庭先などに立てて、外より室内の見すかぬやうにしたる蔀。

小袿　コウチキ。中古、相當身分ある婦人の通常禮服。

く清げなる人の、夜は風のさわぎにねざめつれば、久しう寢おきたるまゝに、鏡うち見て、母屋より少しゐざり出でたる、髪は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほど、まことにめでたし。物あはれなる氣色見るほどに、十七八ばかりにやあらむ、ちひさうはあらねど、わざと大人などは見えぬが、生絹の單衣のいみじう綻びたる、花もかへり濡れなどしたる、薄色の宿直物を著て、髪は尾花のやうなるそぎすゑも、たけばかりなれば、衣の裾にはづれて、袴のみ鮮かにて、そばより見ゆる、わらはべ、若き人々の、根ごめに吹折られたる前栽などを、取りあつめ起し立てなどするを、羨ましげに推量りて、簾に添ひたるうしろもをかし。

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃

花もかへり　花色の褪せたること。

そぎすゑ　髪を切揃へたる末端。

に火おこして物語などして集り侍ふに、宮、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く捲上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。人々、「なほこの宮の人にはさるべきなめり。」といふ。（清少納言―「枕草子」）

うつくしきもの。瓜にかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするにをどり來る。またへにつけて据ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむるいとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎて這ひ來る道に、いとちひさき塵などのありけるを目ざとく見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髪のおほひたるを搔きはやらで、うちかたぶきてものなど見る、いとうつくし。……八つ九つ十ばかりなるをのこの聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。（清少納言）

宮　一條天皇の皇后藤原定子。當時中宮。

香爐峯の雪　白氏文集に、「遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥ハネテヲ簾看。」

清少納言　清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕ふ。才氣あり、紫式部と竝びて平安朝時代女流作家の雙璧と稱せらる。歿年不詳。

へ　足緒。鳥の脚を結びおく紐。

一一　古今と新古今

一

舊來の歌を知らんとするものは平安朝時代を知らねばならぬ。隨つて又平安朝時代のそれを知らねばならぬ。併し、その平安朝時代の歌を完成したのは、平安朝の第二期、延喜時代である。卽ち古今和歌集を以て代表せらるべき時代である。貫之・躬恒の活躍した時代である。而して此の時代に於ける歌は、前の奈良朝時代の歌の舊套を脫して、一の新旗幟を樹立したもので、技巧と情緒を巧みに結合した抒情詩である。これで形式も思想の範圍も大抵一定して、以後はこれの外に出るものはない。

併し、第三期、寬弘時代に於ては、この風が少し飽かれて、多

參考資料

古今和歌集　二十卷。醍醐天皇の延喜五（一五六五）年四月十八日、紀貫之・紀友則・凡河內躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す。歌を春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・戀・雜・哀傷・雜體（長歌・旋頭歌・誹諧歌）・大歌所御歌の部門に分類列載せり。別に貫之の和文の序、紀淑望の漢文の序あり。參考書には、僧顯昭「古今和歌集顯昭註」「古今餘材抄」釋契沖「古今集打聽」賀茂眞淵「古今和歌集講義」同「古今和歌集本居宣長「古今集遠鏡」香川景樹「古今和歌集正義」金子元臣「古今和歌集評釋」

躬恒　凡河內氏。古今集の撰者。宇多・醍醐の兩朝に歷事して和泉大掾に至る。歿年不詳。

少の新傾向が出て來た。從來の抒情詩的傾向に對して、敍景的趣味を加味して來、更に又幾分か排技巧の傾向を生じたが、前期の權威は盛んなもので、猶その範疇を脱することを許さない。といつても、新進の氣は到底制せられない。古典的なものが漸次現代的にならうとして、第四期になると、一種の新派を生じて來た。卽ち金葉和歌集を撰んだ源俊頼がそれである。舊套中にありながら、新意を添へ、俗語をも用ひて一種の新味を加へたが、古典的な反對黨は藤原基俊に依つて代表せられて、これに抗爭した。この兩派抗爭の間に、又一の折衷派ともいふべき詞花和歌集の撰者藤原顯輔の一派も生じて、歌界は餘ほど複雜になつた。併し、要するに延喜を理想とするものと、現代を主とするものとの爭である。亂が極れば英雄が出る。時代は遂に藤原俊成を出した。俊成は基

金葉和歌集　十卷。天治元（一七八四）年、源俊頼、白河法皇の勅を奉じて撰す。

源俊頼　歌人。堀河・鳥羽・崇德の三朝に歷仕して從四位上に至る。

藤原基俊　歌人。俊頼と同時代の人。從五位下右兵衞佐たり。晩年雍髮して覺舜と稱す。

詞花和歌集　十卷。天養元（一八〇四）年、藤原顯輔崇德上皇の勅を奉じて撰す。

藤原顯輔　歌人。俊頼と同時代の人。正三位・左京

俊に學び、然も俊頼を慕ひ、又顯輔の傾向をも考へ、よく三派を知つてこれを併合した。千載和歌集はこれによつて成つたものであるから、これには三派併合の結果として成つた典雅があり、清新がある。殊にその間に、辭句の洗練の結果によつて成つた趣味の多い語句、卽ち後に秀句と呼ぶものが生まれた。

如上の傾向は、俊成の子定家が覇を唱へた鎌倉幕府時代の初期に、多くの技巧的な含蓄の深い歌となつて現れた。これらを集めたものが新古今和歌集である。政權は既に武士に歸したとはいへ、ために堂上は非常に閑暇であり、公卿を中心とした歌道の粹は愈〻發揮せられ、こゝに新古今和歌集は、古今を綜合し、千載に光被する意氣を以て撰ばれた。古今和歌集は從來の歌人には經典の如く崇拜せられてゐた。そ

大夫に至る。

藤原俊成　歌人。後鳥羽天皇の朝に正三位、皇太后宮大夫に進む。元久元（一八六四）年歿す。年九十一。

千載和歌集　二十卷。文治三（一八四七）年、藤原俊成後白河法皇の勅を奉じて撰す。

定家　歌人。俊成の子。正二位權中納言たり。後鳥羽上皇の寵を得。仁治二（一九〇一）年歿す。年八十。

新古今和歌集　二十卷。元久二（一八六五）年、定家・家隆等これを撰進し、後鳥羽上皇の親しく之に關預し給ひし勅撰和歌集。

れに繼いで、新の字を冠せしめたのは、これはこれ新經典であると誇稱したと同樣である。しかもこれまた後世に多大の影響を及し、舊來の歌の發達をこゝに留めてゐる。當時の歌人、定家及び家隆等の意氣は景仰すべきではなからうか。

平安朝に新旗幟を樹立した功に於て、典型を千載に殘した功に於て、吾人は古今和歌集を尊ばねばならぬ。貫之・躬恒を重んじなければならぬ。それと共に、又紛亂の後を受けてこれを平定し、更に典型を作り、歌をして至上の發達をなさしめた意氣に於て、新古今和歌集を崇拜せねばならぬ。而して定家・家隆を尊敬せねばならぬ。

二

平安朝時代に入つて、人々は甚しく季節の變化に注意し、それによつて變化する天象・草木等に注意し、また更にその

家隆　藤原氏。歌人。後鳥羽上皇に仕へ、宮內卿たり。定家と併稱せらる。嘉禎三（一八九七）年歿す。年八十。

變化の著しいのに驚嘆することとなつた。これは前時代に於てもあつた事で、萬葉集の四季の類別があるのを見ても明かであるが、それをこの當時に比すれば、たゞ一部分に過ぎぬ。この時の如く、それを骨子とし、歌の恰好の材料として取扱うた如き事はない。實にこの時ほど、季節の變化を歌の題材として用ひたことは、古來無いところで、編纂の順序にも、先づこれを最初に置いて居るのを見ても明かである。後世の季節尊重は悉く源を此處に發してゐる。

このやうに季節の變化を注意したのは、畢竟當時の公卿たち、卽ち歌の作者の生活に原因する。何となれば、これらの作者は、都以外に足を踏みだすことが少く、宮仕と遊樂と物詣とのみに日を過し、月を送つて居たのであるから、單調な生活で、變化の乏しいところから、自ら、春が來る、花が咲く、秋

が來る、紅葉が散る、夏が來る、杜宇が啼く、冬が來る、雪が降るといふ、季節とそれに伴なふ變化が大事件となつて目に映る。勿論この外に人事から起る紛亂・不平もあるが、最も美的な、單純な、感傷的な、心を刺激するものは、此の季節の變化の外になかつたのである。故に古今和歌集を讀むには先づこれを注意せねばならぬ。

又、季節の變化に多大の注意が拂はれる以上は、その季節に應じて、咲き、散り、啼き、歌ふ花木・禽鳥がまた驚喜と悲嘆との好材料とならねばならぬ。これらもすでに前代にあつたのであるが、この時の如く劃然と定つたことはない。春の季の詩材としては鶯・梅・櫻を主とし、若菜・霞・柳・藤・山吹などの優美纖麗なものが選ばれた。秋には今日何人も感ずるやうに、風の音、蟲の聲、月の色、露の光、種々の感興を惹起するものが

多く、その外、星・女郎花・紅葉・菊など、主たるものはいづれも纖細佳麗なものであつて、しかも哀感を寄せるのに都合のよいものである。夏と冬とには材料が至つて尠い。鐵を溶かさんばかりの暑さ、篠を束ぬる夕立などは、當時の人の詩材とするには餘りに峻烈である。冬は引籠りの時で、花も木も見るものの少い時節である。杜宇と雪とがこの兩季節に於て詩人の感興を惹いた殆ど全部であるといつてよい。

勿論季節に拘らぬものもあるが、概して前代あつた所の材料を選擇し、粗硬なものを棄て、纖細なものを取り、殊にその中でも特別に美しい麗しい方面を取つて詠ずる事としたのであるから、その範圍は非常に縮少し、材料に於ては貧弱である。併し、その一々の觀察は隨分微に入り細を穿つて、今日猶想到し難い所にも及んでゐる。そしてこの題材の範

園は、後になるに從ひ一層嚴重に守られるやうになつた。

ふる年に春立ちける日よめる　在原元方

年のうちに春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる　紀貫之

春日野の若菜つみにや白妙のそでふりはへて人のゆくらむ

春の夜梅の花を詠める　凡河内躬恒

春の夜の闇はあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくる丶

題しらず　在原行平

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだ

在原元方　歌人。業平の孫。歿年未詳。

在原行平　歌人。阿保親王の第二子。承和年間、藏人となり、後累進して民部卿に至る。寛平五（一五五三）年歿す。年七十六。

るべらなれ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　紀友則

さみだれに物思ひ居れば杜宇夜ふかくなきていづちゆくらむ

秋立つ日よめる　藤原敏行

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚かれぬる

是貞の皇子の歌合の歌　壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目をさましつ丶

よみ人知らず

しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月

紀友則　歌人。土佐掾・大内記たり。古今集の撰に與る。

藤原敏行　歌人。左近衛中將たり。能書の譽あり。延喜七年歿す。

壬生忠岑　歌人。御書所に候し、攝津大目に至る。古今集の撰に與る。

三

平安朝時代の末年から、幽玄といふ意味が傳播せられた。幽は深遠の意であらう。玄は「玄のまた玄、衆妙の門。」といふやうな所から、やはり深遠の意であらう。これは當時以前から既に傳唱せられたものと見えて、玄々集などといふ歌集も出來てゐる。この幽玄、卽ち深玄幽遠の趣味は、何時、如何にして發生したかといふに、その源は猶平安の末年、短歌を如何に詠むべきか、如何に解すべきかといふことが特別に研究せられた時から發する。この時は既に、自然の美の眞解と、漢詩の影響と、單調を厭ふ心と、繪畫の影響との四原因が錯綜交雜して、多くの客觀詩を出したのであるが、またこの幽玄の趣味をも誘致した。自然の美しさを認めて、それに深く思ひ入る、こゝに感ずるものは、自分の身の幸・不幸ではない、窮

玄のまた玄　老子に、「玄之又玄、衆妙之門。」

通ではない、奥の分らぬ味ひである。如何に名づくべきか、自分では知らぬ。はた如何にして極むべきか、自分には分らぬ。この時、これを古今集時代の如く淺薄な解釋をつけて、それで滿足せられるであらうか。否たゞ語の幽趣微韻によつてのみこれの幾分かを表し、その以外は對者に推量せしめて、僅にそれで滿足することが出來るのである。これによつて、それの情態を直寫して、こゝに客觀詩は生じ、それに對する感想を披瀝して、こゝに主觀詩は生じたのである。

併しこの變轉は、又その起源を、人々の單調を厭ひ、變化を好む心的狀態に發してゐる事はいふまでもあるまい。同じ道を何處までも進む、これに倦怠せぬ人は決してないであらう。必ず別種の途、それが間違つたか正しいかを意識しないでも、何か異なつたものを取らねば止まぬ。殊にそれが正

當なものと意識した以上は、必ずそれに向かつて突進するのが自然である。幽玄の趣致は又これによつて生じたのである。

當時の繪畫は、平安朝時代のそれと比して、概して意義に於て深い。單に山川草木を寫すのみではない。その中に含まれてゐる或ものを寫す所まで進んでゐる。たゞ紅を抹し、粉を塗つたのではない。これに對し、これに接して居れば、その得る所のものは、決して淺薄な感想ではない。必ず何か深いものがなくてはならぬ。故に繪は、その形體傅彩から客觀詩を起したと共に、幽遠の趣致をも起した。

更にこれら以外に、當時の人心に殊に深く浸染したのは、佛教思想である。平安朝時代に於て、佛教は既に深く人心に入つた。併し榮枯盛衰が眼前に車輪の迅速に廻轉するが如

く變化した當時、「盛者必衰、諸行無常。」が經典以外に大事實として現示せられた當時は、また別種の感觸を起さしめねばならぬ。幾種の新宗教が唱道せられ、多くの渴仰者が忽ちに出來た事蹟は、當時の宗教希求の念の如何に熱烈であつたかを說明してゐる。その心を心として出來た當時の歌は、どうしても只表面だけ宗教者めかして、無常らしい事をいひ、悟了したらしい事をいふ歌とは選を異にせねばならぬ。全體を通じて、深い味ひ、美しいながら暗い趣の見えるのは自然である。乃ち幽玄の趣致はまた此の佛教の弘通よりしても現れたのである。

而してこの幽玄の趣致、卽ち幽趣微韻は、源を人の思想と感情との深遠な處に發するのであるから、その深遠の程度が進むと共に、普通の辭句では發表し得ないこととなる。乃

盛者必衰　仁王經に、「盛者必衰（メヘ）、實者必虛（メヒ）。」

諸行無常　傳燈錄に、「世尊說（キテ）二無常偈（ヲク）一曰、諸行無常、是生滅法。」

ち從來の發表の仕方では靴を隔てて痒きを搔くが如く、到底十分に述べ盡くすことが出來なくなる。これによつて今までの發表の方法の制約を破り、更に新しい表現法を用ひて、極めて大膽に自己の思想・感情を發表しようとした當時の詞人の態度は、敬服すべきものである。

梅花遠薫といへる心を詠み侍りける　源俊頼

心あらば問はましものを梅が香に誰が里よりかにほひきつらむ

入道前關白右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りける時郭公の歌　藤原俊成

むかし思ふ草のいほりの夜のあめに涙なそへそ山ほとゝぎす

入道前關白　藤原忠通をいふ。

百首歌奉りし時　藤原定家

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

題しらず　藤原家隆

いかにせむ來ぬ夜あまたの郭公待たじと思へば村雨の空

題しらず　寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり眞木立つ山の秋の夕暮

五十首歌奉りし中に湖上の花を　宮内卿

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟のあと見ゆるまで

（尾上柴舟―「古今と新古今」）

寂蓮法師　歌僧。俗名は藤原定長。俊成の養子。定家生まるゝに及び出家す。建仁二（一八六二）年寂す。

宮内卿　歌人。後鳥羽天皇の宮女。源師光の女。

尾上柴舟　名は八郎。文學博士。岡山縣に生まる。東京帝國大學の出身。現に東京女子高等師範學校教授たり。歌人としても名あり。

一二　世繼の物語

さいつ頃、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人よりは、こよなう年老いうたてげなる翁二人、嫗といきあひて、同じ處にゐぬめり。あはれに同じやうなるもののさまかなと見侍りしに、これら打笑ひ見かはしていふやう、「年頃昔の人に對面して、いかで世の中の見聞く事どもをきこえあはせむ、この只今の入道殿下の御有樣をも申しあはせばやと思ひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心やすくよみぢもまかるべき。思しき事いはぬはげにぞ腹ふくるる心地しける。かゝればこそ、昔の人は物いはまほしくなれば、穴を掘りては言ひいれ侍りけめと覺え侍る。返す〳〵嬉しく對面したるかな。さても幾つにかなり給ひぬる。」といへ

參考資料

大鏡　八卷。世繼物語ともいふ。作者不詳。文德天皇より後一條天皇まで百七十餘年間の歷史。參考書には、大石千引「大鏡短觀抄」落合直文・小中村義象「大鏡詳解」佐藤球「大鏡詳解」關根正直「大鏡新註」

雲林院　京都市右京區にありし寺。

うたてげ　異樣なるの意。

入道殿下　藤原道長をいふ。

ば、今一人の翁、「幾つといふことは更に覺え侍らず。たゞし己は、故太政の大臣貞信公の藏人の少將と申しし折の小舍人童大犬丸ぞかし。ぬしはその御時の母后の宮の御方の召使、高名の大宅の世繼とぞいひ侍りしかしな。さればぬしの御年は、己にはこよなくまさり給へらむかし。みづからは小童にてありし時、ぬしは二十五六ばかりの男にてこそはいませしか。」といふめれば、世繼、「しか〳〵、さ侍りしことなり。さてもぬしの御名は如何にぞや。」といふめれば、「太政大臣殿にて、元服仕うまつりし時、『汝が姓は何ぞ。』と仰せられしかば、夏山となむ申すと申ししを、やがて繁樹となむつけさせ給へりし。」などいふに、いとあさましくなりぬ。

誰も少しよろしき者どもは見おこせて、ゐよりなどしけり。年二十ばかりなる、なま侍めきたるものの切に近く寄り

貞信公　藤原忠平をいふ。

藏人の少將　近衛少將にて藏人を兼官せるをいふ。

小舍人童　藏人所に屬したる召使の童。

母后の宮　宇多天皇の御母、光孝天皇の皇后班子を申す。

太政大臣殿　藤原忠平のこと。

なま侍　なまは未熟の意。青侍といはんが如し。

て、「いでいと興ある事いふ老者達かな。更にこそ信ぜられね。」といへば、翁二人見かはしてあざ笑ふ。繁樹と名乘るが方ざまに見やりて、「ぬしは幾つといふ事覺えずといふめり。この翁どもは覺え給ふや。」と問へば、「更にもあらず、一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁樹は百四十に及びてさぶらふらめど、やさしく申すなり。己は水尾の帝のおりおはします年の正月の望の日生まれて侍りしかば、十三代にあひ奉りて侍るなり。怪しうはさぶらはぬ年なりなゝまことと人人思さじ。されど父がなま學生につかはれ奉りて、下萬なれども、都ほとりといふ事侍れば、目を見給へて、產衣に書きおきて侍りける、未だ侍り。丙申の年に侍り。」といふも、げにと聞ゆ。今一人に、「猶も翁の年こそ聞かまほしけれ。生まれけむ年は知りたりや。それにていとやすく數へてむ。」といふめれば、

水尾の帝　清和天皇を申す。
十三代　清和・光孝・陽成・宇多・醍醐・朱雀・村上・冷泉・圓融・花山・一條・三條・後一條。
學生　大學寮の學生。
都ほとり　京近傍の生れ。
目を見給へて　目をかけられての意。
丙申の年　清和天皇の貞觀十八（一五三六）年。

「これは實に親にもそひ侍らず、他人のもとに養はれて十二三までぞ侍りしかば、はかゞしうも申さず。只『我は子生むわざもしらざりしに、主の御使に市へまかりしに、又私にも錢十貫を持ちて侍りけるに、憎げもなき乳兒を抱きたる女の、これ人に放たむとなむ思ふ、子を十人まで生みて、これは十人の子にて、いとゞ五月にさへ生まれて、むづかしきなりといひ侍りければ、この持ちたる錢にかへて來にしなり。』と。姓は何とかいふと問ひ侍りければ、夏山とは申しける。さて十三にてぞ、おほき大殿には參り侍りし。」などいひて、「さても嬉しく對面したるかな。佛の御靈驗なめり。年頃こゝかしこの說經、とのゝしれど、何かはとて參り侍らず。かしこく思ひたちて參り侍りにけるが嬉しき事。」とて、「そこにおはするは、その折の女人にや見えますらむ。」といふめれば、繁樹が應

我は云々　大犬丸の養父の詞。
五月に云々　下學集に「五月子不養。」註に「五月子必害父母。」
おほき大殿　太政大臣藤原忠平のこと。

へ、「いでさも侍らず。それは早う失せ侍りにしかば、これはその後相添ひて侍る童女なり。さて閣下はいかに。」といふめれば、世繼が應へ、「それは侍りし時のなり。今日も諸共に參らむと出でたち侍りつれど、瘧病をして、あたり日に侍りつれば、口惜しうもえ參り侍らずなりぬ。」など、あはれにいひ語らひて泣くめれど、涙落つとも見えず。

かくて講師待つほどに、我も人も久しうつれづれなるに、この翁どものいふやう、「いでさうづしきに、いざ給へ、昔の物語して、このおはさう人々に、さは古の世はかくこそはありけれと聞かせ奉らむ。」といふめれば、「しかづいと興ある事なり。いで覺え給へ。時々さるべき事のさしいらへ、繁樹も打覺え侍らむかし。」といひて、いはむくと思ひたるけしきども、何時しかと聞かまほしく、奥ゆかしき心地するに、そこ

閣下　世繼をさしていふ。

瘧病　ワラハヤミ。童病の義。おこりのこと。間歇熱の一種。

覺え給へ　語り給への意。

らの人多かりしかど、物はかづしく耳とゞむるもあらめど、人目にあらはれては、この侍ぞよく聞かむとあどうつめりし。世繼がいふやう、「世はいかに興あるものぞや。さりとも翁こそ少々の事は覺え侍らめ。昔さかしき帝の御政の折は、國の中に年老いたる翁・嫗やあると召したづねて、古のおきての有樣を問はせ給ひてこそは、奏する事を聞召し合はせて、世の政は行はせ給ひけれ。されば老いたる身は、いとかしこきものに侍り。若き人達思しなあなづり給ひそ。」とて、黑柿の骨の九つあるに、黄なる紙はりたる扇をさし隱して、けしきだち笑ふほども、さすがにをかしまめやかに世繼が申さむと思ふことは、ことごとかは。只今の入道殿下の御有樣の、世に勝れておはしますことを、道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたの帝・后、また大臣・公卿の

あどうつ　話を合はする意。

御上をいひつゞくべきなり。その中に、さいはひ人におはしますこの御有様を申さむと思ふほどに、世の中の事のかくれなくあらはるべきなり。傳聞に承れば、法華經一部を説き奉らむとてこそ、まづ餘經をば説き給ひけれ。それをなづけて五時教とはいふにこそはあなれ。しかの如くに、入道殿の御榮を申さむと思ふほどに、餘經の説かるゝといひつべし。」などいふも、わざ〳〵しうこと〴〵しく聞ゆれど、いでやさりとも何ばかりの事をかと思ふに、いみじうこそいひ續け侍りしか。

世間の攝政・關白と申し、大臣・公卿と聞ゆる、古へ今皆この入道殿の御有様のやうにこそはおはしますらめとぞ、今様の乳兒どもは思ふらむかし。されどそれさもあらぬことなり。いひもていけば、同じ種一つ筋にてあれど、門わかれぬれ

法華經　妙法蓮華經の略。八卷二十八品。

五時教　華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃。

ば、人々の御心もちひも、又それに隨ひてこと〴〵になりぬ。この世始りて後、帝はまづ神の世七代をおき奉りて、神武天皇を始め奉りて、當帝まで六十八代にぞならせ給ひにける。すべからくは神武天皇を始め奉りて、次々の帝の御次第を覺え申すべきなり。然りといへども、それはいと聞き耳遠ければ、たゞ近きほどより申さむと思ふに侍り。文德天皇と申す帝おはしましき。その御世よりこなた、今の帝まで十四代にぞならせ給ひにける。世を數へ侍れば、その帝位に卽かせ給ふ嘉祥三年庚午の年より今年までは、一百七十六年ばかりにやなりぬらむ。かけまくもかしこき君の御名を申すは、かたじけなくさぶらへども。」とて、いひつゞけ侍りき。

（「大鏡」）

神の世七代　國之常立神・豐雲野神・宇比地邇神・角杙神・意富斗能地神・游母陀琉神・伊邪那岐神。

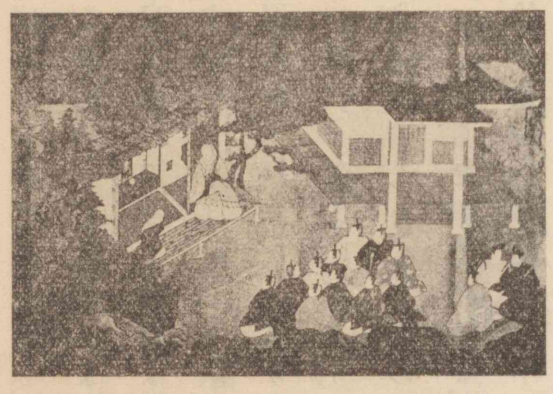
當帝　後一條天皇を申す。

嘉祥三年　一五一〇年。

今年　萬壽二（一六八五）年。

一三　大原御幸

文治元年長月の末に、女院はかの寂光院へ入らせおはします。道すがら四方の梢の色々なるを御覽じ過ぎさせ給ふほどに、山陰なればにや、日もやうやう暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、わくる草葉の露しげみ、いとゞ御袖濡れまさり、嵐烈しく、木の葉みだりがはし。空かき曇り、いつしかうちしぐれつゝ、鹿の音幽かにおとづれて、蟲の恨もたえ〳〵なり。とにかくに取りあつめたる御心細さ、たとへ遣るべき方もなし。浦傳ひ、島傳ひせしかども、流石かくはなかりしものをと思しめすこそ悲しけれ。岩に苔蒸して寂びたる處なれば、住まほしくぞ思しめす。露結ぶ庭の荻原霜枯れて、籬の菊の枯れ〳〵に、うつろふ色を御覽じても、御身の上とや思しけむ、佛の御前に參らせ給ひて、「天子聖靈、成等正覺、一門亡魂、頓證菩提。」と祈り申させ給ひけり。いつの世にも忘れ難きは、先帝の御面影、ひしと御身に添ひて、如何ならむ世にも忘るべしとも思しめさず。



大原御幸

繪巻

さて、寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結びて、一間をば佛處に定め、一間をば御寢處にしつらひ、晝夜朝夕の御勤、長時

參考資料

平家物語　十二卷。異本多し。平氏の勃興より滅亡までを記せり。作者不詳。

參考書には、

作者不詳　「平家物語抄」

平　道樹　「平家物語標註」

赤堀又次郎「平家物語通釋」

今泉定介　「平家物語講義」

内海弘藏　「平家物語評釋」

御橋悳言　「平家物語略解」

文治元年　壽永四（一八四五）年三月二十四日平氏亡ぶ。八月十四日改元して文治といふ。

女院　建禮門院。清盛の女、德子。高倉天皇の中宮、安德天皇の御母。建保元（一八七三）年薨ず。年五十七。

寂光院　京都府愛宕郡大原村にあり。

天子聖靈　安德天皇の亡靈を指す。

成等正覺　妙等の佛果を成就する意。

頓證菩提　機會に遭遇して、頓に心の闇を去り、佛果を證得すること。

先帝　安德天皇を申す。

不斷の御念佛懈る事なくして、月日を送らせ給ひけり。かくて神無月、中の五日の暮方に、庭に散りしく楢の葉を、もの踏鳴らして聞えければ、女院「世を厭ふ處に、何者の訪ひくるやらむ。あれ見よや。忍ぶべきものならば、急ぎ忍ばむ。」とて見せらるゝに、小鹿の通るにてぞ有りける。女院「さていかにやいかに。」と仰せければ、大納言の典侍の局、涙を抑へて、

岩根踏み誰かは訪はむ楢の葉のそよぐは鹿のわたるなりけり

女院、この歌餘りにあはれに思しめして、窓の小障子に遊ばし留めさせおはします。かゝる御つれ〴〵の中にも思しめしなぞらふ事どもは、つらき中にも數多あり。軒に竝べる植木をば、七重寶樹とかたどり、岩間に積る水をば、八功德水と思しめす。無常は春の花、風に從つて散り易く、有涯は秋の月、雲に伴なつて隱れ易し。承陽殿に花を翫びし旦には、風來つて薰を散じ、長秋宮に月を詠ぜし夕には、雲覆うて光を隱す。昔は玉樓金殿に錦の茵を敷き、妙なりし御住居なりしかども、今は柴引結ぶ草の庵、よその袂もしをれけり。

大納言の典侍の局　平重衡の室。

七重寶樹　佛說に、極樂には金樹・銀樹・瑠璃樹・玻瓈樹・珊瑚樹・碼碯樹・硨磲樹の七樹が七重に竝列せりといふ。

かゝりしほどに、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思しめされけれども、如月・彌生のほどは、嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。忍の御幸なりけれども、供奉の人々には德大寺・花山院・土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、かの清原深養父が補陀樂寺、小野皇太后宮の舊跡叡

八功德水　淨土にありといふ八つの功德を具有せる池水。

承陽殿・長秋宮　共に宮殿の名。後宮。

法皇　後白河法皇を申す。

北祭　官幣大社賀茂別雷神社の祭。四月中の酉の日に行はる。

德大寺　左大將實定をいふ。

花山院　大納言兼雅をいふ。

土御門　權中納言源通親をいふ。

清原深養父　平安朝初期の歌人。

補陀樂寺　京都府愛宕郡大原にありきと傳ふ。

小野皇太后宮　藤原歡子。關白敎通の女。後冷泉天皇の皇后たり。

覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたるほども思しめし知られて哀なり。

西の山の麓に、一宇の御堂あり。卽ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立、よしある樣の處なり。「甍破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。」とも、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波にたゞよひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松にかかれる藤波の、うらむらさきに咲ける色、青葉まじりの遲櫻、はつ花よりも珍らしく、岸の山吹咲きみだれ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顏なり。法皇、これ

青葉まじりの　金葉集卷二夏歌に見えたる藤原盛房の歌に、「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりも珍らしきかな」

を叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水に汀のさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

舊りにける巖の絶間より、落ちくる水の音さへ故び、由ある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。

さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・蕣（あさがほ）這ひかゝり、葱まじりのわすれ草、「瓢簞しば〳〵空し、草顏淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞（とぼそ）を濕す。」とも謂ひつべし。杉の葺目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に爭ひて、溜るべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習として、憂きふししげき竹柱、都の方の言傳は、間遠にゆへるませ垣や、僅に言問ふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれなら

瓢簞　和漢朗詠集に見えたる橘直幹の句に、「瓢簞屢空、草滋顏淵之巷。藜藿深鎖、雨濕原憲之樞。」

原憲　字は子思。孔子の門人。孔子の歿後草澤の間に隱る。

では、正木のかづら青つゞら、くる人まれなる處なり。

法皇、「人やある、人やある。」と召されければ、御いらへ申すものもなし。やゝあつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花つみにいらせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とはいひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。因果經には、『欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。』と說かれたり。過去・未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つやつや御歎あるべからず。昔、悉達太子は十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉をつらねて肌をかくし、峯に上つて薪を採り、谷に下りて水を掬び、難行苦行の功によつてこそ、遂に成等正覺し給ひき。」とぞ申しける。

この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び聚めてぞ著たりける。あの有樣にても、かやうの事申す不思議さよと思しめして、「そも〳〵汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめ〴〵と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて涙をおさへて、「申すにつけて憚おぼえ候へども、故少納言入道信西が女阿波の內侍と申す者にて候なり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむかたなうこそ候へ。」とて、袖を顏におし當てて、忍びあへぬ樣、目も當てられず。法皇、「げにも、汝は阿波の內侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。

五戒　偷盜戒・邪淫戒・妄語戒・殺生戒・飲酒戒。

十善　不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見。

因果經　四卷。劉宋の求那跋陀羅の譯。因果應報の例を擧げて敎訓せるもの。

伽耶城・檀特山　共に摩揭陀國にありといふ。

信西　藤原通憲。鳥羽天皇以下四朝に歷仕す。平治の亂に源義朝に殺さる。

紀伊の二位　信西の妻朝子。近衞天皇の御乳母。

何事につけても、唯夢とのみこそ思しめせ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、おの〳〵感じあはれける。

さて、彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかかりつゝ、外面の小田の水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引開けて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂に引替へて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの淨名居士の方丈の室の內に、三萬二千の床を並べ、十方の諸佛を請じ給ひけむも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、

三尊　彌陀・觀音・勢至。
中尊　彌陀。
普賢　德利周遍仁慈惠悟の菩薩の名。
善導和尚　唐の高僧。淨土の教義を鼓吹す。
八軸　法華經。八卷。
九帖　善導和尚の觀無量壽經の疏。九帖。
淨名居士　維摩詰。釋尊在世時の人。

色紙に書いて處々におされたり。その中に、大江定基法師が清涼山にして詠じたりけむ、笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。」とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌とおぼしくて、

おもひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそに見むとは

さてかたはらを叡覽あるに、御寢處と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾などかけられたり。さしも本朝・漢土の妙なる類、數をつくしし綾羅錦繡の粧も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、

大江定基法師　法名寂昭。圓通大師と號す。長保六（一六六四）年入宋して彼の地に寂す。
清涼山　支那山西省の靈山。

岩のかけ路を傳ひつゝおり煩ひたるさまなりけり。法皇、「あれは如何なるものぞ。」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花筐（かたみ）臂にかけ、岩躑躅とり具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に薇折りそへて持ちたるは、鳥飼中納言伊實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍の局。」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、皆袖をぞ濡らされける。

女院は、世を厭ふ御習ひながら、今かゝる有樣を見え參らせむずらむ恥づかしさよ。消えも失せばやと思しめせどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上、山路の露もしげくして、絞りやかねさせ給ひけむ、山へも歸らせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たる處に、內侍の局參りつ

鳥飼中納言伊實　藤原伊通の子。

五條の大納言國綱　又土御門と號す。

つ、花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。はや〳〵御見參あつて還御なしまゐらせ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思のほかの御幸かな。」とて、御見參ありけり。（「平家物語」）

三川入道寂照が大唐國へ渡りつゝ、清涼山の竹林寺に詣でて、終焉をとりける夕に詠じける詩もあり。

草庵無人扶杖立。　香爐有火向西眠。
笙歌遙聞孤雲上。　聖衆來迎落日前。

雲の上にほのかに樂の音すなり人に問はばや空聞きかそも

此の詩歌の次に、女院かくぞ思しめしそへられける。

乾くまもなき墨染のたもとかなこはたらちねが袖の雫か

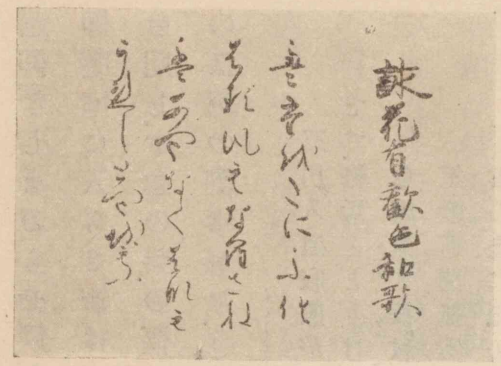
（「源平盛衰記」）

參考資料

源平盛衰記　四十八卷。源平兩氏の興亡の跡を記せる戰記物語。作者未詳。參考書として揭ぐべきほど完全なるものなし。

一四　新島守

かやうのまぎれにて承久も三年になりぬ。四月二十日帝おりさせ給ふ。春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じ二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院を中院と申し、父帝をば本院とぞ聞えさする。このほどは家實のおとゞ攝關白におはしつれど、御讓位の時、左大臣道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。



後鳥羽天皇宸筆

參考資料

増鏡　十卷。後鳥羽天皇の朝より後醍醐天皇の朝に至る約百五十年間の史實を記せり。體裁は大鏡に倣ひて、嵯峨の清涼寺に於て百餘歳の尼が物語りしところを記錄せる態となせり。作者未詳。參考書には、和田英松・佐藤球「増鏡詳解」永井一孝・竹野長次「増鏡新釋」

詠花有歡色和歌

はたなだにふくはる風のならさねばあやなくはなもうれしとやおもふ

承久三年　一八八一年。
帝　順德天皇。
春宮　仲恭天皇。
御兄の院　土御門上皇。
父帝　後鳥羽上皇。
家實　近衛基通の子。攝政關白となり、三宮に准ぜらる。仁治三(一九〇二)年薨ず。年六十四。
道家　藤原良經の子。攝政關白となる。建長四(一九一二)年薨ず。年六十。
あづまの若君　藤原頼經。當時征夷大將軍として鎌倉に在り。
院　後鳥羽上皇。
あづまの代官　京都守護。

さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれどやう〳〵漏れ聞えて、東ざまにもその心遣ひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふ者あり。かつ〴〵彼を御勘じの由仰せらるれば、身方に參るつは者ども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。先づいとめでたしとぞ院は思しめしける。

あづまにもいみじうあわて騷ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時には、はかなきさまにて屍を曝さじ、おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都にまゐらすることは、

わが身　北條義時。
時房　北條義時の弟。承久の役後、六波羅を鎮し、伊勢守護を兼ぬ。義時の卒後、執權連署となり、修理大夫に任ず。仁治元(一九〇〇)年歿す。
泰時　義時の長子。北條氏三代の執權。三善康連と貞永式目を制定す。仁治三(一九〇二)年歿す。年六十。

思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見るべからず。今を限と思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせむことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、二たびこの足柄・箱根山は越ゆべし。」など泣く〳〵いひ聞かす。誠にしかなり、また親の顔拜むこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今や限と哀に心細げなり。

かくて打出でぬる又の日、思ひかけぬほどに、泰時只一人、鞭を揚げて馳せきたり。父胸うち騷ぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたの掟などをば、仰の如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも、圖らざるに、忝く鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參りあ

へらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとて、ひとり馳歸り侍りき。」といふ。義時、とばかり打案じて、「かしこくも問へるをのこかな。そのことなり、まさに君の御輿に向かひて弓を引くことはいかゞあらむ。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら軍兵を賜はせば、命を捨てて千人が一人になるまでも戰ふべし。」といひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にもおぼし設けつる事なれば、武士ども召しつどへ、宇治・勢多の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみ、御孫のこともさる事にて、北の方一條中納言能保といふ人の女なり、その母北方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへも

宇治　京都府久世郡の町。
勢多　滋賀縣栗太郡瀨田村。
公經　西園寺公經。その孫賴經は當時鎌倉將軍なりき。
故大將　源賴朝。

- 賴朝
  - 能保室
  - 公經室
    - 公經
  - 道家室
    - 道家
  - 賴經

せず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。中院は、飽かで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騷にも殊に交らせ給はざめり。新院は同じ御心にて、萬づ軍の事なども、掟て仰せられたり。

いつの年よりも、五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲り騷ぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武士どもも、あやしく惱めり。かゝれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや。宇治・勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騷ぎ滿ちたり。いかゞあらむと君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人

人も、誠のきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、賴もしげなし。六月十日餘りにや、幾何の戰だになくて、遂に御方のいくさ敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふことさらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、先づ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限の御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるるもかひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四そぢに一つ二つやあまらせ給ふらむ。まだいと惜しかるべきおんほ

保元のためし　保元の亂後、崇德上皇を讃岐に遷し奉れり。

鳥羽殿　城南の離宮。今の京都市伏見區にありき。

ものにもがなや　源氏物語河海抄に見えたる歌に、「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我が身と思はむ」

どなり。信實朝臣召して、御姿寫し描かせらる。七條院に獻らせ給はむとなり。かくて、同じき十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御こゝち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじういかなりける代々のむくいにかと恨めし。

六つにて位に卽き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機の政を御心一つに治め、百の官を從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有樣にて、遠きを憐み、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざら

信實　藤原隆信の子。左京權大夫に至る。肖像畫に巧なり。文永二（一九二五）年歿す。年八十九。

七條院　後鳥羽上皇の御母。

土佐院　土御門天皇。

佐渡院　順德天皇。

津の國の　後拾遺集卷十二に見えたる和泉式部の歌に「津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葺」

むことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やう〳〵枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵て由なき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのが散り〴〵にさすらへ、磯の苫屋に軒を竝べて、おのづから言問ふものとては、浦に釣する海人小舟、鹽燒く煙のなびく方をも、わが故鄕のしるべかとばかり詠め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時をはてとか廻り逢ふべき限だになく、雲の浪煙の浪の、幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御樣ども、口惜しともおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里遠き島の中なり。海づら

よりは少し引入りて、山陰に片添へて、大きやかなる巖の敧てるをたよりにて、松の柱に蘆葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほりのたゞしばしと、假初に見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるゞと見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘りなきこちする、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるをきこしめして、

われこそは新島守よおきの海の荒きなみ風こゝろして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見むけふこそよそにおきの島守

（「增鏡」）

柴のいほりの　新古今集卷十八雜歌下に見えたる西行法師の歌に、「いづくにも住まれすばたゞ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に」

水無瀬殿　本院の造らせられし殿舍。大阪府三島郡島本村廣瀬に在りき。

二千里　和漢朗詠集に見えたる白樂天の句に、「三五夜中新月色。二千里外故人心。」

一五　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら陰謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯、赦さざるは法令の定むるところなれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ我が故郷の妻子をば、行方も知らず

參考資料

太平記　四十卷。花園天皇の文保二（一九七八）年より後村上天皇の正平二十二年まで四十餘年間の戰亂に關することを記せるものなり。作者不詳。參考書には、

西　道智　「太平記大全」

原　友幹　「太平記綱目」

今井弘濟・內藤貞顯　「參考太平記」

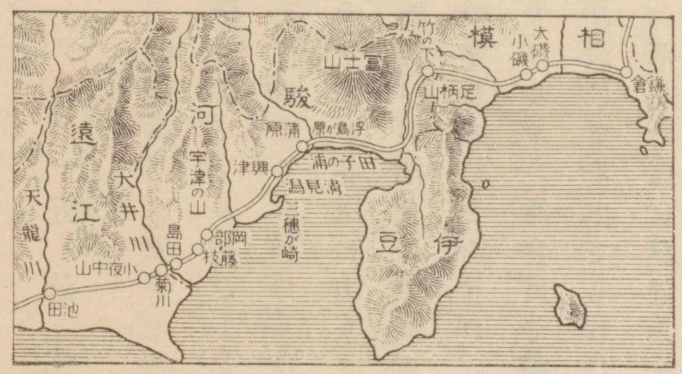
三木五百枝・大塚彥太郎　「太平記詳解」

俊基朝臣　藤原氏。後醍醐天皇の寵眷を得、資朝と共に興復の謀に參し、事露れ、辯疏して漸く解く。後に又僧文觀の陳述によりて再び執へられ、鎌倉にて殺さる。時に元弘二（一九九二）年なり。

七月　元弘元年。

交野の春　新古今集卷二春歌下に見えたる藤原俊成の歌に、「又やみむ交野の

思ひ置き、年久しくも住みなれし九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀なる。



憂きをば留めぬ逢阪の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思

み野の櫻がり花の露ちる春の曙」交野は大阪府北河内郡にあり。紅葉の錦　拾遺集卷三秋歌に見えたる藤原公任の歌に、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」逢阪の關　同集同じ卷に見えたる紀貫之の歌に、「あふ阪の關の清水にかげ見えて今やひくらむ望月の駒」

うねの野　古今集卷二十大歌所御歌に近江ぶりとして、「近江より朝立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は」時雨もいたく　同集卷五秋歌下に見えたる紀貫之の歌に、「白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり」鏡の山は　同集卷十七雜歌上に見えたる歌に、「鏡山いざ立ちよりて見て行か

へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらむ。番場・醒が井・柏原・不破の關屋は荒れはてて、猶もる物は秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劔伏拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末はいづこと遠江、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀とゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の東夷のために囚はれ

む年經ぬる身は老いやしぬるとし」此の歌一説に大伴黑主の歌なりといふ。

汐干に今や　新古今集卷六冬歌に見えたる藤原季能の歌に、「さよ千鳥聲こそ近くなる海潟傾く月に潮やみつらむ」

元暦元年　壽永三年のこと。安德天皇の御宇。一八四四年。

重衡　平氏。清盛の子。左近衛中將に進む。一の谷の戰に源氏方に捕へられ、鎌倉に送られしが、壽永四年奈良に送られて斬らる。年二十九。

て、此の宿に著き給ひしに、

東路の埴生の小屋のいぶせさに故郷いかに戀しかるらむ

と宿舍の女が讀みたりし、其の古の哀までも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館のともしびかすかにして、雞鳴曉をもよほせば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そこも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけりと詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇ればかれいひ進らするほどとて、輿を庭前に昇き止む。轅をたゝきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎

命なりけり　新古今集卷十羈旅歌に見えたる西行法師の歌に、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」

に依りて、光親鄕、關東へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。　汲下流而延齡。
今東海道菊河。　宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞ增りけむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川のおなじ流に身をや沈めむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌・管絃の宴に侍りし事も、今は二たび見ぬ夜の夢と成りぬと思ひ續け給ふ。嶋田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、ものの悲

光親卿　中納言宗行卿の誤ならんといふ。

龜山殿　京都市右京區嵯峨にありし離宮。

しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、蔦・楓いと茂りて道もなし。昔、業平の中將の住處を求むとて、東の方に下る時、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津・蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世を廻る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐ心もはなれども、日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。（「太平記」）

夢にも人に　新古今集同じ巻に見えたる在原業平の歌に、「駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり」

富士の高嶺を　同集巻十二に見えたる藤原家隆の歌に、「富士の根の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり」

一六　幻住庵記

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲、二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも、亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび物靜かなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬・根笹軒を圍み、屋根漏り壁落ちて、狐・狸、臥處を得たり。幻住庵といふ。

あるじの僧何某は勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。余また市中を去ること十年ばかりにして、五十年や

參考資料

風俗文選　十卷。本朝文選ともいふ。森川許六の編。芭蕉以下、蕉門俳人二十七人の文章百十餘編を載せ、之を辭・賦・譜・說・解・記・紀行・序・箴・銘・誄・歌・文・傳・碑・辯・表・論・頌・讃・書の二十一部門に分類せり。別に卷首に漢文の作者小傳を載せたり。參考書には、馬場正統「風俗文選通釋」　葎甘介我「風俗文選犬註解」

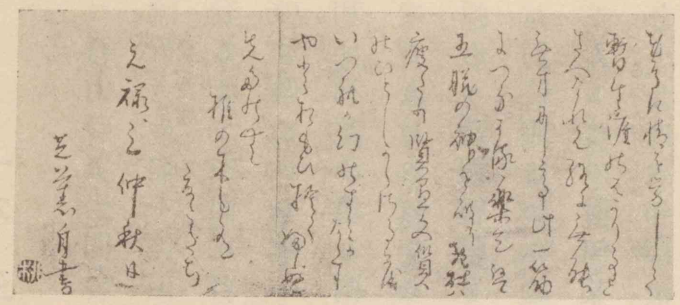
石山　滋賀縣滋賀郡石山村大字石山。

岩間　同村大字內畑にある岩間山。

國分山　同村大字國分。

唯一の家云々　神佛二敎の旨を合して一派を成せるものを兩部神道といひ、純粹の神道を唯一派といふ。この八幡宮は神佛和

や近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今歳湖水の波に漂ひ、鳰の浮巣の流とゞまるべき蘆の一本の蔭頼もしく、軒端葺きあらため垣根結ひそへなどして、卯月の初いと苟且に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。



幻住庵記（芭蕉筆蹟）

遠に春の名殘も遠からず、躑躅咲殘り、山藤松に懸つて、時鳥屢過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなどそゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそ

光同塵なるをいへり。
僧何某　膳所藩士。俗稱を本多八左衛門といふ。
菅沼曲翠子　芭蕉の門人。膳所藩士。奸臣を斬つて自殺す。

やがて出でじ　新古今集卷十七雜歌中に見えたる西行法師の歌に、「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」

吳楚云々　杜甫の登岳陽樓の詩に、「昔聞洞庭水。

ばだち、人家よきほどに隔り、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高嶺より、唐崎の松は霞籠めて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗取る歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は士峯の俤に通ひて、武藏野の古き栖處も思ひ出でられ、田上山に古人を數ふ。さゝふが嶽千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて、網代守るにぞと詠みけむ歌の姿なりけり。

なほ眺望隈なからむと後の峯に這上がり、松の棚作り、藁の圓座を敷きて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巣を營み、主薄峯に庵を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となりて辱顔に足を投げいだし、空山に虱を捫つて坐す。偶心まめなる時は谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵の雫

今上岳陽樓。吳楚東南拆。
乾坤日夜浮。親朋無一字。老病有孤舟。戎馬關山北。憑軒涕泗流。」
日枝の山　比叡山。
唐崎　滋賀縣滋賀郡滋賀村。
笠取　京都府宇治郡宇治村の東に聳ゆる山。
三上山　滋賀縣野洲郡。
士峯　富士山。
田上山・さゝふが嶽　共に栗太郡。田上山には猿丸太夫の墓あり。
袴腰　滋賀縣滋賀郡。
黒津の里　同縣栗太郡下田上村の字。
網代守る云々　古歌に、「田上や黒津の庄の寢子男網代守るとて花の黒さよ」
海棠云々　黄庭堅の山谷集に、「徐老海棠巣上、王翁主薄峯庵。」
辱顔　サンガン。嶮巖。
虱を捫つて云々　王荊公の詩に、「捫虱對青山。挾書眠北園。」

を佗びて、一爐の備いと輕し。はた昔住みけむ人の殊に心高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて夜の物納むべき處など、聊かしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は賀茂の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いと易々と筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり枕の上の柱に懸けたり。

晝は稀々とぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこども入り來りて、猪の稻くひ荒し、兎の豆畑に通ふなど、わが聞きしらぬ農談。日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴なひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を

とく〳〵の云々　西行法師の歌と傳ふるものに「とく〳〵とおつる岩間の苔清水汲みほすひまもなき住居かな」

高良山　福岡縣三井郡。山頂に高良神社あり。

賀茂の甲斐何某　賀茂神社の祠官藤木甲斐守敦直。能書家。慶安二（一六四九）年歿す。年六十八。

隱さむとにはあらず。やゝ病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。つら〳〵年月の移りこし拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、便りなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦せたり。賢愚文質の等しからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨てて臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立　（「風俗文選」―松尾芭蕉）

芭蕉野分して盥に雨を聽く夜かな　（松尾芭蕉）

初時雨猿も小蓑をほしげなり

大きなる家ほど秋の夕かな　（森川許六）

佛籬祖室の云々　嘗て江戸の深川に住みし頃、佛頂禪師に參禪せしことをいふ。

樂天云々　元稹の寄樂天詩に、「志逢佳景惟惆悵、兩地各傷無限神。」

老杜云々　李白の贈杜甫詩に、「飯顆山頭逢杜甫、頭戴笠子日曝牛、爲問緣何太瘦生、只爲從前作詩苦。」

松尾芭蕉　俳人。名は宗房。伊賀の人。城代藤堂氏に仕へ、後轉じて京都に上り、北村季吟に從つて、俳諧を學び、更に江戸に下りて、俳諧をひろむ。後世その俳諧を正風と稱す。元祿七年歿す。年五十一。

森川許六　名は百仲。五老井と號す。近江彦根の藩士。芭蕉の高弟。正德五（一七一五）年歿す。年五十九。

一七　馬方三吉

小田原ういらう、大磯・平塚・藤澤の、さはりもなしに雙六の、さいさきもよし門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程ケ谷・神奈川越え、川崎を越え品川越え、まづ先駈のお姫様、一番勝ちに勝色の花のお江戸に著き給ふ。一の裏は雙六の幸ひあり、喜あり、慰みありける道中と、どつと興にぞ入り給ふ。

お傍の衆に囃されて、幼心の姫君、「かう面白い東とは、今までおれは知らなんだ。さあ〳〵往かう、はや往かう。」「やあ御座らうとおつしやるか。そりやめでたいわ、めでたいわ。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、「そんなら、ま一度大殿様・お袋様とお盃。これも馬子殿のお蔭ぢや。出來いた出來いた。其方には禮いふ、褒美やる。其處に

参考資料

丹波與作　一卷。近松門左衛門の作りし淨瑠璃本。丹波國の一城主由留木殿の女、しらべの姫が江戸の高家入間殿へ養女として入込むこと、そのお乳人滋の井の一家のことなどを綴りしものなり。

お姫様　しらべの姫。時に十歳。江戸への旅立ちに際して、俄にこれをいなみて、一同を困却せしむ。時に十歳ばかりの馬方三吉は東海道中雙六を演じて姫の機嫌をなほして再び旅立つこととなりぬ。

待ちやや。」とさゞめき渡り、奥に御供し入りにけり。

馬方は遂に見ぬ金の間を、うそ〳〵と覗き廻れど、筵のほか踏みも習はぬ備後表、三吉「えゝ此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけつこで御座る。」と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高にお菓子さま〴〵文匣に盛入れ、「どれ〳〵」三吉其處にか。まあ〳〵其方はけな者ぢや。道中雙六お目にかけ、それ故に姫君様お江戸へ御座らうと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有りがたう戴きや。お錢三筋、買ひたい物買ひやや。殊に其方は通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋の井に逢はうといや。見れば見るほどよい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく〳〵であらう。」と、いと懇ろの詞の末、三吉つくづく聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人の滋の井様とはお

大高　腰高に同じ。菓子を盛る器。

けな者　けなげな者の略。

錢三筋　三百文。

通し　江戸まで通し雇の意。

前か。それなら己が母様」と抱付けば、「あゝこは慮外な。おのれが母様とは。馬方の子は持たぬ。」と、もぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、三吉「なんの無いこと申しませう。わしが親はお前の昔の配偶、此の御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私、此方様の腹から出た與之助はわしぢやわいの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覺え、沓掛の姥が咄には、『母様も離別とやらで殿様に御奉公。こなたを姥が養育し、父様に逢はせたう思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋の井様と尋ねよ。』と懇ろに教へて、姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、揚句に鳥羽の祭に往て、餅が喉に詰つて、つひ死んでのけました。在處の衆が養ひて、漸う馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。これ守袋を見さ

沓掛　京都府乙訓郡大枝村沓掛。

石部　滋賀縣甲賀郡の町。

馬借　バシャク。馬を借りて業となすもの。

しやんせ。何の嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一處に居て下され。見事、沓も打ちまする。此の草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は沓打ち草鞋作り、父様・母様養ひませう。父様と一つに居て下され。拜みまする母様。」と、取付き抱付き泣き居たり。

お乳ははつと氣も亂れ、見れば見るほど我が子の與之助。守袋も覺あり。跳び付いて懷に抱入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵。詐つて叱らうか。いや可愛げにさうも成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝどうせうと、百千色の憂き涙、雙つの眼には保ちかね、咽び沈みて居たりしが、いや〳〵我が子ながらもさかしいもの、詐つて誠とせず、母を心の穢いものと蔑まるゝも情なし。譯を語つ

あつあ　發語。

て合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙拭うて氣を靜め、「こへ來い、與之助。」と、引寄せて兩手を取り、「さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしうなぜ尋常にも育たぬぞ。顏の道具、手足まで、母はかうは產みつけぬ。美しい黑髪を、このやうに剃下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ。」と、又さめ〴〵と泣きけるが、「これ、物を合點しや。腹から產んだは產んだれども、今では子でも母でもない。淺ましう成りさがつたを嫌うていふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前樣の奉公人、與作殿は奧小姓、殿樣の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏者役、番頭、千三百石までお取立て、追腹ほどの御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫樣御誕生、御內證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然

とても云々　同じく成人するならば。

御前樣　由留木殿の奧方。

追腹ほどの御恩　主人に殉死せねばならぬほどの御恩。

御內證　しらべ姫の實母。

に、二番と下座にはさがらぬ人。なさけなや父樣が江戸詰に、大事のところを仕損ひ、また切腹にきはまつた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫樣の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其のまゝ殘さうため、父樣の命助り、奉公構への御改易。其の時母も一緒に退けば、尤も夫婦の道は立つ。お姫樣の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。殘つて御恩を報じてくれと父樣のことわり故、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼うても御勘氣の末、氣遣ひな。與作の子とばしいやんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、夫の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乘つたとて、これが何にな

奉公構ひの御改易　其の家の士の中より名籍を除くこと。

ばし　接尾語。

ること。」と、聲を忍びに泣くばかり。子は生まれつき賢しくて、聞分け有るほど猶泣入り、「悲しい咄を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母様にさへ逢うたならば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」と、いへばちやつと口を押へ、「あゝ〳〵勿體ない、其の乳兄弟いはぬこと。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體、三吉といふ馬追が乳兄弟に有るなどと、どう妨げにならうやら。蟻の穴から隄も崩れる。輕いやうで重いこと。ひそ〳〵いうて人も聞く。先づ早う出てくれ。」と泣く〳〵いへば、三吉、「あゝ母様あんまり遠慮過ぎました。先づいうて見て下され。」「まだいひ居るか、聞分けない。夫のこと、我が子のこと、母に如才が有るものか。合點のわるい聞分けない。」と制する內に、奥

蟻の穴云々　韓非子に、「千丈之隄以螻蟻之穴潰。」

よりも、「お乳の人はどこにぞ。御前から召します。」と呼ばはれば、「あれ聞きや、人が來る。出てたも。」と手を取つて引出す。

不便や三吉しく〳〵涙。頬冠して目を隱し、沓見まつべて腰に附け、見すぼらしげな後影。「こりや、ま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風・雪降・夜道には、腹が痛いと作病起し、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに、腹や麻疹の用心しや。可愛のなりや、いた〳〵しや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎ぞ。」と、式臺の段箱に身を投伏せて歎きしが、懷中の有合一歩十三、服紗に包み、「これたしなみに持つて居や。」と、涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一歩もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貰はう筈がない。えゝ胴慾な母様、覺

沓見まつべて　沓を調べまとめて。

式臺　玄關の板敷。

えて居さつしやれ。」と、わつと泣出す其の有樣。母は魂消え入りて、「養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、何の遣らうぞ。奉公の身のあさましや。」と、悶え焦れて歎きける。

時に奥口さゞめいて、「早御立ち。」と、姫君のお輿昇きあげ行列立て、お乳の人の乘物をひら付けにこそ昇きよせけれ。お乳はさあらぬ顏付して、「姫君の御伽に最前の馬方を此の乘物に引付け、お慰みに謠はしや。」「畏つた。」と宰領ども、「こりや、其處なじねんじよめ、謠ひ居らう。」とぎごつなく、「やあ此奴はほえをるか。何ぢやこりやいま〳〵し。」と、握り拳を二つ三つ、項きながら泣聲に、「阪はてる〳〵鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。」ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ雨宿り。（近松門左衞門―「丹波與作」）

じねんじよ　三吉の渾名。
ぎごつなく　愛想なく。

近松門左衞門　本姓名は杉森信盛。淨瑠璃作家。巢林子と號す。長門國の人といはる。大阪に出で竹本義太夫のために多くの作品を提供す。享保九（一三八四）年歿す。年七十二。

一八　奈良の庭竈

昔から今に同じ顏を見ること可笑しき世の中、此の二十四五年も奈良通ひする肴屋ありけるが、行くたびに只一色に極めて、鮹より外に賣る事なし。後には人も鮹賣の八助と、見知らぬ人もなく、それ〴〵に商ひの道つきて、ゆるりと三人口を過ぎける。されども大晦日に錢五百持つて終に年をとりたる事なし。口喰うて一盃に雜煮祝うた分なり。此の男常々世渡に油斷せず。一人ある母親の賴まれて、火桶買うて來るにも、はや間錢取りて只は通さず。まして他人の事には產婆（さんばあ）呼んで來てやる烈しき時も、茶漬飯を喰はずには行かぬものなり。如何に慾の世に住めばとて、念佛講仲間の布に利を取るなどは、寔に死ねがな目くじろの男なり。これほ

參考資料
世間胸算用　五卷。井原西鶴の作にかゝる短篇小說集。元祿五（一三五二）年板行さる。西鶴生前の板としては最後のものなり。世渡の祕訣、商賣の拔目なきこと等を書き集めたり。

間錢　アヒセン。手數料。口錢。

死ねがな目くじろ　貪慾殘忍なる意味の諺といふ。

どにしても彼のざまなれば、天の咎の道理ぞかし。抑ゝ奈良に通ふ時より、今に鮪の足は日本國が八本に極りたるものを、一本づつ切つて、足七本にして賣れども、誰か是に氣のつかぬ事にて賣りける。其の足ばかりを松原の煮賣屋に決つて買ふ者あり。さりとは恐ろしの人心ぞかし。物には七十五度とて、必ず現るゝ時節あり。過ぎつる年の暮に足二本づつ切つて、六本にして忙し紛れに賣りける

鶴西原井

に、これも穿鑿する人なく賣つて通りけるに、手貝の町の中ほどに、表に菱垣したる内より呼込み、鮪二盃賣つて出る時、法體したる親仁ぢろりと見て、碁を打ちさして立出で、何と

長持に春かくれ行く更衣　鶴永

手貝の町　奈良市手貝町。

菱垣　ヒシガキ。竹を細かく菱形に打交へて結びし垣。

やら裾の枯れたる鮪と、足の足らぬを吟味し出し、「これは何處の海よりあがる鮪ぞ。足六本づつは神代此の方何の書にも見えず。不便や今まで奈良中の者が一盃喰うたであらう。魚屋顔見知つた。」といへば、「此方のやうなる大晦日に碁を打つてゐる處では賣らぬ。」と言譯してぞ歸りける。その後誰が沙汰するともなく世間に知れて、さるほどに、狹い處は隅から隅まで、足切り八助といひふらして、一生の身すぎの留ること、これ己が心からなり。されば大年の夜の有樣も、京・大阪よりは格別靜かにして、萬づの買懸りもあるほどは隨分濟まし、此の節季に「ならぬ。」と斷りいへば、掛取聞屆けて二度來る事なく、差引四つ切りに奈良中が仕舞うて、はや正月の心、家々に庭ゐろりとて釜かけて燒火して、庭に敷物して、その家内・旦那も、下人も、一つに樂居して、不斷の居間は明け置き

節季　十二月の末。年末。

四つ　午後十時頃。

て、處慣はしとて、輪に入りたる丸餅を、庭火にて燒き喰ふも賤しからずふくさなり。さて又、都の外の宿の者といふ男共、大乘院門跡の家來因幡といへる人の許にて、例に任せて祝ひ初め、「富富々々。」といひて、町中を駈廻れば、家毎に餅に錢添へて取らせける。是を思ふに、大阪などにて厄拂に同じ。漸う夜も明け方の元日に、俵迎へ、俵迎へと賣りけるは、板に押したる大黑殿なり。二日の曙に惠比須迎へとて賣りける。三日の明方に毘沙門迎へと賣りける。毎朝三日が間福を賣るぞかし。さて元日の禮儀、世間の事は差措きて、先づ春日大明神へ參詣致すに、一家・一門、末々の親類までも引連れてさゞめきける。此の時一門の廣きほど外聞に見えける。何國にても富貴人こそ羨ましけれ。商賣の晒布は、年中、京都の吳服屋に掛賣りて、代銀は毎年大暮に取集めて、京を大晦日の夜半か

ふくさ　ふくさうか。福相。

大乘院門跡　大乘院は興福寺に屬せし法相宗の寺。攝家門跡の一にして、同じ興福寺中の一乘院と共に兩門跡と稱せられたり。

春日大明神　奈良市なる官幣大社春日神社。武甕槌神・經津主神・天兒屋根命・比賣命を祀る。

ら我先に仕舞ひ次第に、松明點し連れて南都に入込む。晒布の銀何千貫目といふ限もなし。已に奈良へ返れば、皆々夜明になれば、金銀藏に打込み置き、正月五日より互に取遣りの差引する事例年なり。此の銀荷を心懸けて、大和の片里に忍びて住みける素浪人共、年とりかぬる事の悲しさに、命を捨てて四人內談して追剝に出でしに、皆三十貫目又は五十貫目の大分にて、望ほどの端銀なければ、それかこれかと見合はすれども、終に酒手といひかねて、此の道かへてくらがり峠に出でて、大阪よりの歸を待伏せしところに、小男のかたげたる菰包を、心憎し、重き物を輕う見せたるは、隱し銀に決るところとて、抑へて取つて逃去れば、此の男聲を立てて、「明日の御用にはとても立つまい立つまい。」と申す時に、四人して明けて見れば、數の子なり。これは〳〵。

（井原西鶴―「世間胸算用」）

くらがり峠　奈良縣生駒郡より大阪府に越ゆる峠。大阪・奈良兩市間の重要交通路なりき。

井原西鶴　俳人・小說家。松壽軒・二萬堂と號す。大阪の人。俳句を西山宗因に學ぶ。元祿六年歿す。年五十二。

一九　芳流閣

古の人謂はずや、「禍福は糾へる繩の如し。」と。人間萬事往くとして、塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る處、はた禍の伏する處、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうちに年を經て、得難き時を得てければ、遙々滸我へ齎らして、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍と、降りかはりたる村雨の、刃は故の物ならで、我が身を劈く讐となりし、憾をこゝに釋く由もなく、事急にして意外にあり。僅に當座の辱めを避けばやと思ふばかりに、許多の圍みを切開きて、芳流閣の屋の上に攀登れども、とにかくに脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極

[參考資料]
南總里見八犬傳　百六卷。里見氏の勇士、犬江親兵衛仁・犬川莊介義任・犬村大角禮儀・犬阪毛野胤智・犬山道節忠興・犬飼現八信道・犬塚信乃戌孝・犬田小文吾悌順の八人の事蹟を根據とし、之を仁義禮智忠信孝悌の八德に配して組織したる歴史小説。文化十一(一二四七四)年より天保十二年まで二十八年を費しし大作なり。
禍福は云々　漢書賈誼傳に「禍之與福兮、何異糾纆。」
福の倚る所云々　老子に、「禍兮福所伏、福兮禍所伏、孰知其極。」
滸我　茨城縣猿島郡古河町。

めたる、心の中は如何なりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、「犬塚信乃を搦めよ。」とて、なまじひに擇みいだされつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。その二層なる屋の上まで、身を翳ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、火照を渡る敷瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る。流は名に負ふ阪東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷りし敵にしあれば、いかで我、繫ぎ留めんと、鰓の木傳ふ如くさら〳〵と、登り果てたる三層の、屋根にはまぶ

阪東太郎　利根川の別稱。

しさす由もなく、互に隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巣を、大蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰を打ちかけて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、槍・長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突き立て、組んで落ちなば擊留めんとて、項を反らしてこれを觀る。加之、外方は、緜連として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃、武事長け力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虛空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。彼鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば事みな休まん、脫れ果てじと見えたりけり。

その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追登らんと

成氏朝臣　足利氏。持氏の子。鎌倉管領。後古河に住み古河公方と稱す。明應六(一一五七)年歿す。

墨氏　名は翟。周代の學者。

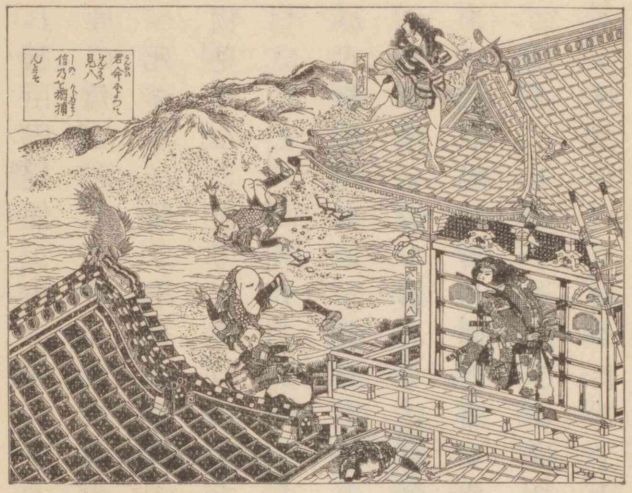
魯般　姓は公輸、名は般。周代の魯の人。故に魯般といふ。

せし兵等を、切落しつるその後は、絶えて近づく者もなきに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角を裂く力あるか、遮莫一人の敵なり、引つ組んで刺違へ、死するに難き事やはある、よき敵にこそ御座んなれ、目に物見せんと、血刀を袴の稜もて押拭ひ、高瀨の如き方棟に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、さりとても搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舍の中よりこの役儀に、擇み出されし甲斐も無し、搦め捕るとも擊たるゝとも、勝負を一時に決せんものをと、思ひにければちつとも擬議せず、「御諚ざふ」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方棟の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。「心

膳臣巴提便　欽明天皇の朝の人。百濟に使し、雪夜幼兒の虎に食はれたるを憤り、虎穴を探りて虎を獲たり。

富田の三郎　和田義盛の臣。將軍實朝の御前にて、二箇の大鹿角を重ねて折る。

得たり。」と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖を、支へて流す一上一下、滑る甍を踏留めて、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負を分かざれば、廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞ遙かなる。



芳流閣の戰（原本挿畫）

こむ刀尖　刀尖のこみあふこと。

さるほどに犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き屋の棟にして、死を爭へる爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鏁肱當のはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず、信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ。十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりと、むんづと組むを、そがまゝ左手に引著けて、互に利腕しかと取り、捩倒さんとえい聲合は

せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏滑らして、河邊の方へころ〳〵と、身を輾ばせし覆車の俵、阪より落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削り成したる甍の勢、留るべくもあらざめれど、互に執つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の、底には入らでほどもよし、水際に繫げる小舟の中へ、打累りつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切りて、射る矢の如き早河の眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

（瀧澤馬琴―「南總里見八犬傳」）

一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗字だも知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣・てにをはだにも辨へず。偏傍すら心得ざるに、只詞をのみもて教へて書かする吾が苦心はいふべうもあらず　（瀧澤馬琴）

瀧澤馬琴　名は解。小說家。江戸の人。執筆過度のため眼疾を病み、遂に失明するに至る。嘉永元（一八四八）年歿す。年八十一。

二〇　芳宜園大人の靈を祭る

こゝに文化の五年九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に、菊の初花一枝を手向け、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。

あはれ悲しきかも。君は吾に十とゝいひて一年の兄におはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は方に盛りの齡におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、朝に參るとては、君の御佩の後へに從ひ、夕に罷るとては、君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子兄弟にも何か異ならむ。書讀むとては、君を師とも尊み、歌作るとては、吾を兄弟のつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさが

參考資料

琴後集　十五卷。村田春海の和歌・文章を集錄したるものなり。

芳宜園大人　加藤千蔭。國學者・歌人。文化五（一八〇八）年歿す。年七十四。

縣居　賀茂眞淵。國學者・歌人。明和六（一七六九）年歿す。年七十三。

にかゝづらひて、自ら疎き方にも過ぎつるを、君仕を退き給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては、吾道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざの、まめ事もあだ事も、互に隔てなく心をかはせること、今に二十年、その初を繰返し數ふれば、あひ友たること、既に五十年にぞ餘りける。さるを、今後れ奉りて、いつの世にか相見む、何れの時にか言問はむ。常なきは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか歎かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下り行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を棄てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥み、こくひぜを守り　韓非子に、「宋人有レ耕レ田者。田中有レ株、兎走觸レ株、折レ頸而死。因釋レ其耒而守レ株、冀復得レ兎。兎不可復得、而身爲宋國笑。」

舟にきだつくる　呂氏春秋に、「楚人有レ涉レ江者。其劍自レ舟中墮レ于水。遽刻レ其舟曰、是吾劍所從墜也。舟止從レ其所レ刻處入レ水求レ之。舟已行矣、而劍不レ行。求レ劍若レ此、不亦惑乎。」

こにひかれて、猶怪しと見とがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌、世に盛りになりにたるは、誠に君の力によりてなり。

その自ら詠出で給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とりどりに備らざるはなし。その古を寫せるは、藤原寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡くさざる事なく、目に觸るゝものは、言葉に載せざる事なむあらざりける。これを見て、高きも短きも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがごちの歎のみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。

あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙かに鬱せとなむ申す。

（村田春海―「琴後集」）

信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹くあらしかな（賀茂眞淵）

かはほりのとびかふ軒はくれそめてなほくれやらぬ夕顔の花（加藤千蔭）

村田春海　國學者・歌人。江戸の人。文化八（一八一一）年歿す。年六十六。

二一　新しい詩の生誕

新しい詩の生まれる時代は美しい夢を追ふ時である、理想の青い花を求むる時である、憧憬の眼を輝かして聲朗かに高く歌ふ時である。日清戰後、國民的自覺の精神が強められると共に、社會は活氣づき、人氣は湧立ち、文壇は著しく勃興の機運に向かつた。こゝに明治文學の第一躍進時代が來たのである。創作に、評論に、新人が活躍した。しかも全體を通じてロマンチックの色彩が強く詩歌の勃興を促した。新體詩・俳句・短歌などの上に華々しい革新運動が起つた。そしてそれが或程度まで成功の美果を收めたのである。新體詩の革新と勃興とは、特に著しいものがあつた。それは機運の成熟にもよつたが、一つは島崎藤村・土井晩翠等を中心に、薄田

ロマンチック　浪漫的。情熱的なること、空想的なること。Romantic.

俳句の革新　正岡子規によつて唱へらる。

和歌の革新　落合直文等によつて唱へらる。

土井晩翠　二〇五頁參照。

薄田泣菫　名は淳介。岡山

泣菫・蒲原有明、其の他の有力な詩人が輩出して詩壇に盡くしたためであつた。

明治三十年八月に出た島崎藤村の『若菜集』は、詩界の混沌を破つて若き日本の詩の向かふところを知らしめた、エポック・メイキングの一産物であつた。內容・詩形・詞藻の上で、藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色は『若菜集』によつて濃度を加へて來た。

藤村が『若菜集』を出して、新體詩人としての顯著な成功を得たわけは、(一)專念ヨオロッパの詩に讀耽つて、スキンバアン・ロセッチ等の影響を受けたこと、(二)詩形・用語の上に細心の注意と研究とを傾けたこと、(三)藝術的氣稟が豐かで、新時代の感情を代表的に歌ひ出たこと、(四)敍事・抒情、兩面に於ける才能を備へたこと、(五)國文學・支那文學の素養が相當にあ

縣の人。
蒲原有明　名は隼雄。東京の人。
若菜集　藤村が雜誌「文學界」・「帝國文學」等に寄せし新體詩五十篇を集錄せるもの。
エポック・メイキング　新時代を劃する如き。Epock-making.

スキンバアン　英國の詩人・批評家。(一八三六—一九〇九年) Charles Swinburne.
ロセッチ　英國の詩人・畫家。(一八二七—一八八二年) Charles Dante Gabriel Rossetti.

つたことなどによるであらう。藤村の詩には勿論彼の個性の色彩・匂はあるが、詩人として奔放な情想を披瀝したロセッチや、「バイロンの再生」と稱せられたスキンバアンの官能的な抒情の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに彼自身、あり餘るほどの情熱を抱いて、孤獨の境、漂泊の旅などに自然の美を思ひ、憧憬愛慕の感に身を浸したのである。それらの體驗を透して、彼は若き日本に於ける青春の人々の感情を直覺して、それを烈しく『若菜集』に歌ひ出たのである。而も彼には、藝術的に細心な用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、其の詩の上に何等の破綻を示さなかつたのである。かうして『若菜集』が劃期的な痕を詩壇に印したのは當然のことである。

勿論、今日から見ると、『若菜集』にはセンチメンタルな傾向

バイロン　英國の詩人。二十九歲にして再びイギリスの地を踏まざらんことを期して大陸に渡り、西曆一八二四年ギリシヤの獨立戰爭に投じて歿せり。(一七八六—一八二四年) George Gordon Byron.

センチメンタル　感傷的。Sentimental.

が多くて、餘りに夢を見過ぎたやうなところがある。人生に對して高踏的、逃避的な點があるが、さうした缺陷があつても、『若菜集』の美點は決して傷つけられない。そこに永遠の美しい夢があるからである。消しても、消しても、消えさらぬ情熱の噴泉があるからである。『若菜集』中の秀拔な詩はどれであるかといふことについては、各自の好みがあらう。私は『深林の逍遙』・『四つの袖』・『秋風の歌』などを推したい。

清しいかなや、西風の
まづ秋の葉を吹ける時、
さびしいかなや、秋風の
彼のもみぢ葉に來たる時。

道を傳ふる婆羅門の

西に東に散るごとく、
吹きたゞよはす秋風に、
飄りゆく木の葉かな。

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく、
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり。（秋風の歌）

『若菜集』で成功した藤村は、其の向上の一路を歩むことを忘れなかつた。其の翌年の初夏には『一葉舟』を出し、冬には『夏草』を出して、彼の詩的心境の推移を示した。『一葉舟』には、彼の情熱に一味の沈靜を加へた跡が見える。『夏草』には、藤村がロマンスの世界から現實の世界へ移つて行かうとした心持

一葉集　春やいづこ・鷲の歌・銀河・白磁花瓶賦・きりぐすの五篇の詩及び、利根川だより・木曾谷日記・七曜のすさびの三篇の散文を集錄せり。
夏草　晩春の別離・曉の誕生・二つの泉等の十四篇の詩集にて、詩風は著しく積極的・樂天的となれり。
ロマンス　空想。Romance.

が見える。此の傾向は三十四年に出した『落梅集』に至つて一層具體化されたことが解る。センチメンタリズムの殼を破ることは、かなりに困難であつた。が、藤村は力めてそれを打破つて現實の上に自己の新しい地盤を築きあげようとしたのである。

情熱の詩人藤村に對して、瞑想の詩人土井晩翠が居たのは好個の對照であつた。藤村は女性的、晩翠は男性的、一は考へるよりも先づ鋭く感じ、一は感ずるよりも先づ深く考へる。前者は優雅清新の致を具し、後者は雄健豪放の趣を備へて居る。そして其の何れもロマンチックであつた。

晩翠の詩的成功の素因は、(一)當時彼の如き瞑想派の詩人が殆ど居なかつたこと、(二)詩的表現の明快であつたこと、(三)男性的風格に富んで而も粗放蕪雜に流れなかつたこと等

落梅集　千曲川旅情の歌・胸より胸に・壯年・椰子の實などを收む。
センチメンタリズム　感傷主義。Sentimentalism

を擧げることが出來る。彼の最初の詩集は、三十二年に出した『天地有情』である。そこには、主觀的に人生に對して現實の悲痛・無情を嘆き、一個理想の天地に憧憬を寄せた詩人の胸懷が明かに洩らされて居る。其の詩思の上にまつはつて居るのは、燃ゆるやうな青春の情熱ではなくて、理智に根ざした哲理的な思想の流である。『暮鐘』は殊に其のうちで優れた詩篇である。

祇園精舍の檐朽ちて
葦酒の香のみ高くとも、
セントソヒヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも、
聞けや、夕の鐘のうち
靈鷲・橄欖いにしへの

天地有情　希望・雲の歌・鷲・花と星・星落秋風五丈原・暮鐘などの四十篇の詩集。

高き尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ、
わが驂鸞の夢さめて、
鳳樓いつか跡もなく、
うつゝは脆き春の世や。
岑上の霞たちきりて、
縫へる仙女の綾ごろも
袖にあらしはつらくとも、
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲、
その一音はこゝにあり。

晩翠は『天地有情』の次に、三十四年になつて『曉鐘』を出した。

曉鐘　三十四年出版。萬里長城の歌・秋興八首・黑龍江上の悲劇・霹靂などの二十一篇の創作詩及びユーゴーの詩三篇を載せたり。

それには、以前よりも現實味が加つて、技巧が進んで居た。また北清事變を主題として『黑龍江上の悲劇』などを歌つたが、其の詩想の上では何等の向上を見せなかつた、詩的生命の流動が遲緩になつて居た。蓋し彼は藤村のやうに、自己の進路について反省し凝思しなかつたために、早く行詰つたのである。

藤村・晩翠のほかに、稍〻後から出た青年詩人中の双璧は、薄田泣菫と蒲原有明とである。泣菫は大體に於て藤村と同じ行き方をした。最初はロマンチックの情想に浸つて居た。ところが二三年の後には、一轉して現實に親しみ、美しい夢よりも當面の現實に興味を見出すやうになつた。それらが藤村の歩いた道によく似て居ると同時に、恐らく泣菫には藤村から少からぬ感化・影響を受けた時期があつたらうと思

はれる。

泣菫の最初の詩篇『暮笛集』は三十二年十一月に出た。彼は中國の生れで、暖かい情緒と溢るゝやうな才氣とを持つて居た。そしてイギリスの詩人シェレイ・キイツなどに私淑して、『希臘古瓶賦』などを愛誦し、『西風の歌』などに共鳴したものだと思はれる。さうした影響も亦彼の詩のうちに見出される。『暮笛集』の熱烈な情操と清新典雅の格調とは、最初から泣菫の詩的成功を著しくした。そして彼は三十四年に至つて、『行く春』を出した。こゝにも『暮笛集』時代の名殘を見ることが出來るが、一方に於て、泣菫が農民・田園を始め當面の時事問題などにも眼を注いで、彼の詩想をそれらに奔らせたものが往々見える。『石彫獅子の賦』は彼の秀什である。

裂けたる岩に爪かけて

暮笛集　詩のなやみ・鶴鴿・冬の歌・兄と妹・尼が紅など四十五篇の詩集。

シェレイ　二三三頁參照。

キイツ　英國の詩人。始め醫に志し、後文學に身を委ぬ。(一七九四―一八二一年) John Keats. 希臘古瓶賦はその作なり。

行く春　牧笛・夕暮海邊に立ちて・夕の歌・泉・遠情・石彫獅子の賦など二十九篇の詩集。

雄々し、憤るかその姿、
鬣ながく背にまきて、
見れば湧きよる春の潮。
胸はゆたかに力男が
引きしぼりたる弓のごと。

忿怒現ずる明王の
ひろき肩より燃えあがる
焔か、ながき尾は躍り、
綿毛密なる脚の裏、
落ちて野薔薇の花踏むも、
巣くへる鳥は眼ざめんや。

雄麗の趣に於て、泣菫の詩中、特異とすべきものだが、泣菫

の缺點は、內容よりも詞藻の上により多く苦心して、ともすると美しい言葉に囚はれ易い傾きがあつたことだ。或意味に於て、彼は詞藻美の詩人であつた。藝術至上主義者であつた。で、詩形などの上でもいろ〳〵の工夫を凝らした。八六調其の他に苦心を重ねて、不退轉の熱心を示した。けれども思想的・情意的に飛躍すべきことを彼は閑却して居た。

蒲原有明は、泣菫よりも稍〻深みのある詩人であつた。少くとも思想的に彼は內在する生命を摑まうとする傾向を持つて居た。『草わかば』は彼の最初の詩集で、靈的神祕の境地に觸れようと力めた。そこから來る煩惱や悶えや淋しさを歌つたのが、三十六年五月に出た『獨絃哀歌』であつた。有明はロセッチに私淑した傾向があつたので『獨絃哀歌』にはさうした影が印せられて居た。そして神祕の色と詩的情想とが一

草わかば　三十五年一月出版。序の歌・日神頌歌・牡蠣の殼・彩雲などの十八篇を黎明・新譜の二部に大別せり。

獨絃哀歌　さまよひの歌・優曇華・憂愁・幻影・獨語などの二十七篇を煩惱・紫蘇の葉の二部に大別せり。

つに解けあつて、有明の特色・個性が漸く滲み出て居た。今『幻影』中の二聯を引く。

今眼に入れるかげ見れば
小甕は涙に燃え浮かび、
甕のおもてはかゞやきて
火もて描ける火の少女。

幻影はげにこゝに盡き、
小甕は涙に沈むとき、
わが身焰の琴の絃、
火の小指もて誰か彈くべき。

以上の四詩人は、何れもロマンチシズムの時代を代表する人たちである。そして此の期の一特質として見るべきは

史詩の流行であつた。それは過去の歴史・人物などの美に對する強い憧憬が中心となつて、史詩を生んだのである。スコットが中世の騎士に憧憬したのと同趣である。白星の『釋迦』・『おさよ新七』、鐵幹・林外・白星等の合作『源九郎義經』、岩野泡鳴の『豐太閤』・『田戸の海ぬし』、其の他多くの史詩が一時續出して、ロマンチックな夢をそゝつた。泣菫の如きは此の趨勢につれて、神話の世界を歌つた。（高須芳次郎―〈日本現代文學十二講〉）

山のあなたの空遠く
「幸ひ」住むと人のいふ。
噫、われひとと尋めゆきて、
涙さしぐみかへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸ひ」住むと人のいふ。

（上田敏譯）

スコット　英國の小説家・詩人。始め法律を學びしが、後文學に身を委れ好んで傳奇小説を作れり。（一七七〇―一八三二年）Sir Walter Scott.

白星　平木照雄。千葉縣の人。新體詩人。大正四年歿す。年四十。

鐵幹　與謝野寛。京都の人。歌人。

林外　前田儀作。兵庫縣の人。新體詩人。

岩野泡鳴　名は義衛。兵庫縣の人。大正九年歿す。年四十八。

高須芳次郎　文學者。嘗て梅溪と號す。大阪に生まる。早稲田大學英文科出身。

上田敏　文學博士。東京の人。東京帝國大學の出身。京都帝國大學教授。大正五年歿す。年四十四。

二二　星落秋風五丈原

祁山悲秋の風更けて、
陣雲暗し五丈原。
零露の文は繁くして、
草枯れ馬は肥ゆれども、
蜀軍の旗、光無く、
鼓角の音も今しづか。
　丞相病篤かりき。

清渭の流、水瘦せて、
むせぶ非情の秋の聲。
夜は關山の風泣いて、

祁山　支那甘肅省西和縣。

五丈原　陝西省郿縣の西南にありて渭水の南岸に當る。

丞相　諸葛孔明のこと。名は亮。蜀の名將。蜀主の知遇を受く。建興五（西紀二三四）年自ら軍を率ゐて魏を伐ち、同十二年五丈原に魏軍と對陣中歿す。年五十四。

渭　渭水。甘肅省渭源郡に出で、東流して、陝西省に入り、遂に黄河に合す。

關山　關所のある山。

暗に迷ふか、かりがねは。
令風霜の威もすごく、
守るとりでの垣の外。
　丞相病篤かりき。

帳中眠かすかにて、
短檠光薄ければ、
こゝにも見ゆる秋の色。
銀甲堅くよろへども、
見よや、侍衛の面かげに、
無限の愁溢るゝを。
　丞相病篤かりき。

風塵遠し三尺の
劒は光曇らねど、
秋に傷めば、松柏の
色もおのづとうつろふを、
漢騎十萬今さらに、
見るや、故郷の夢いかに。
　丞相病篤かりき。

夢寐に忘れぬ君王の
いまはの御こと畏みて、
心を焦し身を盡くす、
暴露のつとめ幾とせか。
今落葉の雨の音、

漢　蜀漢をいふ。今の四川省地方に位置し、漢末に劉備これを占有す。二世四十四年にして魏に亡さる。

大樹一たび倒れなば、
漢室の運、はたいかに。
　丞相病篤かりき。

四海の波瀾收らで、
民は苦しみ天は泣き、
いつかは見なん、太平の
心のどけき春の夢。
群雄立つて悉く
中原鹿を爭ふも、
誰か王者の師を學ぶ。
　丞相病篤かりき。

中原鹿を　晉書の石勒載記に、「脫遇光武、當踞於中原、未知鹿死誰手。」

末は黃河の水濁る、
三代の源遠くして、
伊周の跡は今いづこ。
道は衰へ文弊れ、
管仲去りて九百年、
樂毅滅びて四百年、
誰か王者の治を思ふ。
　丞相病篤かりき。

（土井晩翠―「天地有情」）

臣本布衣、躬耕南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、許先帝以驅馳。（諸葛亮―「前出師表」）

三代　夏・殷・周の三代。
伊周　殷の賢相伊尹と周の賢相周公旦と。
管仲　齊の賢相。
樂毅　燕の昭王の亞卿となり、齊の七十餘城を降す。
土井晩翠　名は林吉。文學者。仙臺市に生まる。東京帝國大學の出身。現に第二高等學校教授。詩人として名あり。

二三　寒山拾得

唐の貞觀の頃だといふから、西洋は七世紀の初、日本は年號といふもののやつと出來掛つた時である。閭丘胤といふ官吏がゐたさうである。尤もそんな人はゐなかつたらしいといふ人もある。なぜかといふと、閭は台州の主簿になつてゐたといひ傳へられてゐるのに、新舊の唐書に傳が見えない。主簿といへば、刺史とか太守とかいふのと同じ官である。支那全國が道に分れ、道が州又は郡に分れ、それが縣に分れ、縣の下に鄉があり、鄉の下に里がある。州には刺史といひ、郡には太守といふ。閭が果して台州の主簿であつたとすると、日本の府縣知事ぐらゐの官吏である。さうして見ると、唐書の列傳に出てゐる筈だといふのである。しかし閭がゐなくては話が成立たぬから、兎も角もゐたことにして置くのである。

さて閭が台州に著任してから三日目になつた。長安で北支那の土埃を被つて、濁つた水を飲んでゐた男が台州に來て、中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲むことになつたので、上機嫌である。それに此の三日の間に、多人數の下役が來て謁見をする。受持々々の事務を形式的に報告する。その慌しい中に、地方長官の威勢の大きいことを味はつて、意氣揚々としてゐるのである。

閭は前日に下役の者に言つて置いて、今朝は早く起きて天台縣の國清寺をさして出掛けることにした。これは長安にゐた時から、台州に著いたら、早速往かうと決めてゐたのである。

貞觀　唐の太宗の時の年號。西紀六二七—六四九年。

台州　支那浙江省南部の府。地勢三面山に限られ、東の一面は海に臨む。天台山近く、台州の名はこれに基づく。

新唐書　二百二十五卷。舊唐書を改修したるもの。

舊唐書　二百卷。

天台縣　台州府の域內。天台山あり。

國清寺　天台山中にある天台宗の寺。唐代に於ては南支那に於ける佛敎の一大道場たりき。

何の用事があつて國清寺へ往くかといふと、それには因緣がある。閭が長安で主簿の任命を受けて、これから任地へ旅立たうとした時、生憎悚へられぬほどの頭痛が起つた。單純なレウマチス性の頭痛ではあつたが、閭は平生から少し神經質であつたので、掛りつけの醫者の藥を飲んでもなかなか直らない。これでは旅立の日を延ばさなくてはなるまいかといつて、女房と相談してゐると、そこへ小女が來て、「只今御門の前へ乞食坊主がまゐりまして、御主人にお目に掛りたいと申しますが、いかゞ致しませう。」といつた。

「ふん、坊主か。」といつて、閭は暫く考へたが、「兎に角逢つて見るから、こゝへ通せ。」といひつけた。そして女房を奥へ引つ込ませた。

元來閭は科擧に應ずるために、經書を讀んで、五言の詩を作ることを習つたばかりで、佛典を讀んだこともなく、老子を研究したこともない。併し僧侶や道士といふものに對しては、何故といふこともなく尊敬の念を持つてゐる。自分の會得せぬものに對する盲目の尊敬とでもいはうか。そこで坊主と聞いて、逢はうといつたのである。

間もなくはひつて來たのは、一人の背の高い僧であつた。垢づき弊れた法衣を著て、長く伸びた髪を、眉の上で切つてゐる。目に被さつてうるさくなるまで打遺つて置いたものと見える。手には鐵鉢を持つてゐる。

僧は默つて立つてゐるので、閭が問うて見た。「わたしに逢ひたいといはれたさうだが、何の御用かな。」

僧はいつた。「あなたは台州へお出でなさることにおなり

なすつたさうでございますね。それに頭痛に惱んでお出でなさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて參りました。」

「いかにも、いはれる通りで、其の頭痛のために出立の日を延ばさうかと思つてゐますが、どうして直してくれられる積りか。何か藥方でも御存じか。」

「いや。四大の身を惱ます病は幻でございます。只清淨な水が此の受糧器に一杯あればよろしい。呪で直して進ぜます。」

「あゝ呪をなさるのか。」かういつて少し考へたが、「仔細あるまい、一つまじなつて下さい。」といつた。これは醫道の事などは平生深く考へても居らぬので、どういふ治療ならさせる、どういふ治療ならさせぬといふ定見がないから、唯自分の悟性に依賴して、其の折々に判斷するのであつた。勿論さう

四大　圓覺經に、「四大謂人身、攬外地水火風四大、而成內身四大。」
受糧器　行脚僧の手にする鐵鉢。

いふ人だから、掛りつけの醫者といふのも、善く人選をしたわけではなかつた。素問や靈樞でも讀むやうな醫者を搜して決めてゐたのではなく、近處に住んでゐて呼ぶのに面倒のない醫者に掛つてゐたのだから、ろくな藥は飲ませて貰ふことが出來なかつたのである。今乞食坊主に賴む氣になつたのは、何となくえらさうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいでする呪なら、間違つたところで危險なこともあるまいと思つたのとのためである。

閭は小女を呼んで、「汲立の水を鉢に入れて來い。」と命じた。水が來た。僧はそれを受取つて、胸に捧げて、ぢつと閭を見詰めた。淸淨な水でも好ければ、不潔な水でも好いのである。不潔な水でなかつたのは、閭がためには勿怪の幸ひであつた。暫く見詰めてゐるうちに、閭は覺えず精

素問　支那最古の醫書。
靈樞　支那古代の醫書。素問と共に內經と稱す。

神を僧の捧げてゐる水に集注した。

此の時、僧は鐵鉢の水を口に銜んで、突然ふつと閭の頭に吹きかけた。

閭はびつくりして、背中に冷汗が出た。

「お頭痛は。」と僧が問うた。

「あ、癒りました。」實際閭はこれまで頭痛がする頭痛がすると氣にしてゐて、どうしても癒らせずにゐた頭痛を、坊主の水に氣を取られて、取逃してしまつたのである。

僧は徐かに鉢に殘つた水を床に傾けた。そして、「そんならこれでお暇をいたします。」といふや否や、くるりと閭に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、一寸。」と閭が呼留めた。

僧は振返つた。「何か御用で。」

「寸志の御禮がいたしたいのですが。」

「いや。わたくしは群生を福利し、驕慢を折伏するために、乞食はいたしますが、療治代は戴きませぬ。」

寒山拾得

「なるほど、それでは強ひて申しますまい。あなたはどちらのお方か、それを伺つて置きたいのですが。」

「これまで居つた處でございますか。それは天台の國清寺で。」

「はあ。天台に居られたのですな。お名は。」

「豐干と申します。」

「天台國淸寺の豐干と仰しやる。」閭はしつかりおぼえて置かうと努力するやうに眉を顰めた。「わたしもこれから台州に往くものであつて見れば、殊さらお懷かしい。序だから伺ひたいが、台州には逢ひに往つてためになるやうな、えらい人はをられませんかな。」

「さやうでございます。國淸寺に拾得と申すものが居ります。實は普賢でございます。それから寺の西の方に、寒巖といふ石窟があつて、そこに寒山と申すものが居ります。實は文殊でございます。さやうなら、お暇をいたします。」かういつてしまつて、ついと出て行つた。

かういふ因緣があるので、閭は天台の國淸寺をさして出懸けるのである。

普賢・文殊　共に菩薩の名。毘盧遮那如來の左右に侍し、文殊は智惠の表現、普賢は行願の表現とせらる。

全體世の中の人の、道とか宗教とかいふものに對する態度に三通りある。自分の職業に氣を取られて、唯營々役々と年月を送つてゐる人は、道といふものを顧みない。これは讀書人でも同じことである。勿論書を讀んで深く考へたら、道に到達せずにはゐられまい。然し、さうまで考へないでも、日日の務だけは辨じて行かれよう。これは全く無頓著な人である。

次に著意して道を求める人がある。專念に道を求めて、萬事を拋つこともあれば、日々の務は怠らずに、斷えず道に志してゐることもある。儒學に入つても、道教に入つても、佛法に入つても、基督教に入つても同じことである。かういふ人が深くはひり込むと、日々の務が卽ち道そのものになつてしまふ。約めていへば、これは皆道を求める人である。

この無頓著な人と、道を求める人との中間に、道といふものの存在を客觀的に認めてゐて、それに對して全く無頓著だといふわけでもなく、さればといつて、自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦め、別に道に親密な人がゐるやうに思つて、これを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、單に同じ對象を尊敬する場合を顧慮していつて見ると、道を求める人なら、遲れてゐるものが進んでゐるものを尊敬することになり、こゝにいふ中間人物なら、自分のわからぬもの、會得することの出來ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶〻それを差向ける對象が正鵠を得てゐても、何にもならぬのである。

閭は衣服を改め、輿に乘つて、台州の官舍を出た。從者が數十人ある。

時は冬の初で、霜が少し降つてゐる。椒江の支流で、始豐溪といふ川の左岸を迂回しつゝ北へ進んで行く。初め陰つてゐた空が、やう〳〵晴れて、蒼白い日が岸の紅葉を照らしてゐる。路で出會ふ老幼は、皆輿を避けて跪く。輿の中では、閭がひどく好い心持になつてゐる。牧民の職にゐて賢者を禮するといふのが手柄のやうに思はれて、閭に滿足を與へるのである。

台州から天台縣までは六十里半ほどである。日本の六里半ほどである。ゆる〳〵輿を舁かせて來たので、縣から役人の迎へに出たのに逢つた時、もう午を過ぎてゐた。知縣の官舍で休んで、馳走になりつゝ聞いて見ると、こゝから國清寺

知縣　縣の長官。知縣事。

までは、爪尖上りの道が又六十里ある。往著くまでには夜に入りさうである。そこで閭は知縣の官舍に泊ることにした。

翌朝、知縣に送られて出た。今日も昨日に變らぬ天氣である。一體天台一萬八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるやうだが、兎に角虎の居る山である。道はなかなか昨日のやうには捗取らない。途中で午飯を食つて、日が西に傾き掛かつた頃、國清寺の三門に著いた。智者大師の滅後に、隋の煬帝が建てたといふ寺である。

寺でも主簿の御參詣だといふので、おろそかにはしない。道翹といふ僧が出迎へて、閭を客間に案内した。さて茶菓の饗應が濟むと、閭が問うた。「當寺に豐干といふ僧が居られましたか。」

道翹が答へた。「豐干と仰しやいますか。それは先頃まで本

智者大師　名は智顗。支那陳代の高僧。天台宗の開祖。

堂の背後の僧院に居られましたが、行脚に出られたきり歸られませぬ。」

「當寺ではどういふことをして居られましたか。」

「さやうでございます。僧共の食べる米を舂いて居られました。」

「はあ。そして何か外の僧達と變つたことはなかつたのですか。」

「いえ。それがございましたので、初め只骨惜みをしない、深切な同宿だと存じてゐました豐干さんを、わたくしどもが大切にいたすやうになりました。すると、或日ふいと出て行つてしまはれました。」

「それはどういふことがあつたのですか。」

「全く不思議なことでございました。或日山から虎に騎つ

歸つて參られたのでございます。そして其のまゝ廊下へはひつて、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一體詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ。活きた阿羅漢ですな。其の僧院の址はどうなつてゐますか。」

「只今も空家になつて居りますが、折々夜になると虎が參つて吼えて居ります。」

「そんなら御苦勞ながら、そこへ御案内を願ひませう。」かういつて、閭は座を起つた。

道翹は蛛の網を拂ひつゝ、先に立つて、閭を豐干のゐた空家に連れて行つた。日がもう暮れ掛つたので、薄暗い屋内を見廻すに、がらんとして何一つ無い。道翹は身を屈めて、石疊

阿羅漢　アラカン。小乘佛教の修行者が悟に到達する最上の位。又その位を得たる人。

の上の虎の足跡を指さした。偶〻山風が窓の外を吹いて通つて、堆い庭の落葉を捲上げた。其の音が寂寞を破つて、ざわざわと鳴ると、閭は髪の毛の根を締めつけられるやうに感じて、全身の肌に粟を生じた。

閭は忙しげに空家を出た。そして跡から附いて來る道翹にいつた。「拾得といふ僧はまだ當寺に居られますか。」

道翹は不審らしく閭の顏を見た。「よく御存じでございます。先刻あちらの廚で、寒山と申すものと火に當つて居りましたから、御用がおありなさるなら、呼寄せませうか。」

「はゝあ。寒山も來て居られますか。それは願つても無いことです。どうぞ御苦勞序に、廚に御案内を願ひませう。」

「承知いたしました。」といつて、道翹は本堂について西へ歩いて行く。

閭が背後から問うた。「拾得さんはいつ頃から當寺に居られますか。」

「もう餘程久しいことでございます。あれは豐干さんが松林の中から拾つて歸られた捨子でございます。」

「はあ。そして當寺では何をして居られますか。」

「拾はれて參つてから三年ほど立ちました時、食堂で上座の像に香を上げたり、燈明を上げたり、その外供へものをさせたりいたしましたさうでございます。その中、或日上座の像に食事を供へて置いて、自分が向き合つて一緒に食べてゐるのを見付けられましたさうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜずに致したことと見えます。唯今では廚で僧どもの食器を洗はせて居ります。」

「はあ。」といつて、閭は二足三足歩いてから問うた。「それから

賓頭盧　ビンヅル。釋迦の弟子。十六羅漢の隨一。

唯今寒山と仰しやつたが、それはどういふ方ですか。」

「寒山でございますか。これは當寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んで居りますものでございます。拾得が食器を洗ひます時、殘つてゐる飯や菜を竹の筒に入れて取つて置きますと、寒山はそれを貰ひに參るのでございます。」

「なるほど。」といつて、閭はついて行く。心の中では、そんなことをしてゐる寒山・拾得が文殊・普賢なら、虎に騎つた豐干は何だらうなどと、田舍者が芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑ふ時のやうな氣分になつてゐるのである。

「甚だむさくるしい處で。」といひつゝ、道翹は閭を廚の中に連込んだ。

こゝは湯氣が一ぱい籠つてゐて、遽かにはひつて見ると、しかと物を見定めることも出來ぬくらゐである。その灰色

の中に大きい竈が三つあつて、どれにも殘つた薪が眞赤に燃えてゐる。暫く立止つて見てゐる中に、石の壁に沿うて造り附けてある卓の上で、大勢の僧が飯や菜や汁を鍋・釜から移してゐるのが見えて來た。

この時道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得。」と呼掛けた。

閭がその視線を辿つて、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧の蹲つて火に當つてゐるのが見えた。

一人は髪の二三寸伸びた頭を剝出して、足には草履を穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いて居る。どちらも痩せて、身すぼらしい小男で、豐干のやうな大男ではない。

道翹が呼掛けた時、頭を剝出した方は振向いてにやりと笑つたが、返事はしなかつた。これが拾得だと見える。帽を被

つた方は身動きもしない。これが寒山なのであらう。

閭は、かう見當をつけて二人の傍へ進み寄つた。そして袖を搔合はせて、恭しく禮をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱國、賜緋魚袋、閭丘胤と申すものでございます。」と名告つた。

二人は同時に閭を一目見た。それから二人で顔を見合はせて、腹の底からこみ上げて來るやうな笑聲を出したかと思ふと、一緒に立上がつて、廚を駈出して逃げた。逃げしなに、寒山が、「豐干がしやべつたな。」といつたのが聞えた。

驚いて跡を見送つてゐる閭が周圍には、飯や菜や汁を盛つて居た僧等が、ぞろ〳〵と來てたかつた。道翹は眞蒼な顔をして立疎んでゐた。（森鷗外―「鷗外全集」）

森鷗外　名は林太郎。醫學博士・陸軍軍醫總監・文學博士。陸軍省醫務局長・帝室博物館總長・帝國美術院長等に任ず。大正十一年歿す。年六十一。

二四　山路

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い處へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて、畫が出來る。

人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒兩隣に、ちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世より猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處を

どれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引拔いて、有り難い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である。或は音樂と彫刻である。細かくいへば、寫さないでもよい。只目のあたり見ればそこに詩も生き歌も湧く。著想を紙に落さずとも、璆鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向かつて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑

璆鏘の音　詩想の胸に湧くをいふ。璆は玉の擦合ふ音。鏘は金石の響。

靈臺方寸　心を寫眞機に喩ふ。

なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、――千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のあたる處にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。――喜の深き時、憂愈深く、樂しみの大いなるほど、苦しみも大きい。これを切放さうとすると身が持てぬ、片付けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば寢る間も心配だらう。

閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天

不同不二の乾坤　藝術の境地を指す。

下がおぶさつて居る。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へば後が不愉快だ。――

余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りの惡い角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つために、すはやと前に飛出した左足が、仕損じの埋合せをすると共に、余の腰は工合よく方三寸ほどな岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸ひと何の事もなかつた。

立上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らぬが、根本から頂まで悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續目が確と見えぬくらゐ靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つ

たか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりして居る。行手は二丁ほどで切れて居るが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、さほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等のために道を讓る氣色はない。向うで聞かぬ上は、乘越すか、廻らなければならぬ。巖のない處でさへ歩きよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんより、川底を涉るといふ方が適當だ。固より

急ぐ旅でないから、ぶら〳〵と七曲りへかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居たゝまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。のどかな春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ氣が濟まぬと見える。其の上どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えて無くなつて、只聲だけが空の裏に殘るのかも知れぬ。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落つるところを、際どく右へ切れて、横に見おろすと、菜の花が一面に見える。雲

足の下で雲雀の聲　芭蕉の句に、「雲雀より上に休らふ峠かな」

雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛上がつて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上がる雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も上がる時も、また十文字に擦れ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて正體なくなる。只、菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ、魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた處だけ諳誦して見たが、覺えて居る處は二三句しか無かつた。其の二三句のなかにこんなのがある。

前を見ては、しりへを見ては、物欲しと、あこがるゝかなわれ。

腹からの、笑といへど、苦しみの、そこにあるべし。
うつくしき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るこそ知れ。

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらう

十文字　去來の句に「時鳥なくや雲雀の十文字」

シェレー　英國の抒情詩人。名門に生まれたれど一生不遇にて、一八二二年イタリヤにて歿す。（一七九一―一八二二年）その作品には、「雲」・「雲雀」・「西風の歌」・「悲憤の賦」等あり。Percy Bysshe Shelley.

雲雀の詩は一八二〇年の作。こゝに引用せるは、全篇二十一節中の第十八節なり。

"Ode to a Skylark"
We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are
those that tell of saddest
thought.

が、無量の悲しみも多からう。そんならば、詩人になるのも考へものだ。

しばらくは路が平らで、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏附けたあとで、氣の毒なことをしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎭座して居る。呑氣なものだ。又考をつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れぬが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も、――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れて、旨いものが食べられぬくらゐの事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする料簡も起らぬ。只此の景色が、――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此の景色が、景色としてのみ、余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として、醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につき

ものだ。余も三十年の間、それをし通して、飽き〳〵した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。

どこまでも世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を驅けあるいて、錢の勘定を忘れる暇がない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。それ

しい事に、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下。悠然見南山。

只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の娘が覗いて居る譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。
深林人不知。明月來相照。

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は、『不如歸』や『金色夜叉』の功德ではない。汽車・汽船・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寐込むやうな功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的

採菊云々　陶淵明の飲酒二十一首の中の詩に、
結廬在人境、而無車馬喧。問君何能爾。心遠地自偏。採菊東籬下。悠然見南山。山氣日夕佳。飛鳥相與還。此中有眞意。欲辯已忘言。

獨坐云々　王維の題竹里館といふ詩。

不如歸　德富蘆花の作れる小説。

金色夜叉　尾崎紅葉の作れる小説。

の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を浮かべて、此の桃源に溯るものはないやうだ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようといふ心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも藥になるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも有り難く考へられる。かうやつて、只一人繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ〳〵歩くのも全く之がためである。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰め

桃源に云々　陶淵明の文に桃花源記あり。俗界を離れたる仙境に至りしことを記す。

王維　字は摩詰。盛唐の詩人。

淵明　名は潛。東晉の詩人。

ファウスト　獨逸の詩人ゲーテの作。"Faust"

ハムレット　英國の詩人シェイクスピヤの作。"Hamlet"

て居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寢た男でもなかからう。矢張り餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余も其の通り、いくら雲雀と菜の花が氣に入つたとて、山のなかへ野宿するほど非人情が募つては居らん。こんな處でも人間に逢ふ。ぢん〳〵端折の頰冠りや、赤い腰卷の姉さんや、時には人間より顏の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜に取圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭はなか〳〵取れぬ。それどころか、山を越えて落ちつく先の、今宵の宿は那古井の溫泉場だ。

（夏目漱石―「漱石全集」）

風や海に夕日を吹きおとす

（夏目漱石）

那古井　熊本縣飽託郡小天溫泉ならんといふ。

夏目漱石　名は金之助。文學博士。東京の人。東京帝國大學の出身。大正五年歿す。年五十。

二五　春を待ちつゝ

一

フランスの旅にある頃、私はパリの客舍に身を置いて、遠く自分の國を振りかへつて見るやうな靜かな時を見つけることがよくあつた。わが國における十九世紀といふものに興味を持ちはじめたのも、あの旅であつた。曾て私はその心持を故國宛の旅のたよりの中に、次のやうに書きつけて見たこともある。

「もしわが國における十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があつたら、いかに自分はそれを讀むのを樂しむだらう。明治年代とか、德川時代とかの區劃はよくされるが、過去つた一世紀を纏めて考へて見ると、そこに別樣

フランスの旅　作者は大正二年より三年間佛國に遊學せり。

の趣が生じて來る。まづ本居宣長の死あたりからその時代の研究を讀みたい。萬葉の研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の念、それらのものがいかばかり當時に目ざめて來た國民的意識の基礎となつたかを讀みたい。一方には、あの時代の初において、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田秋成も歿し、十八世紀風の特殊な藝術が、次第に式亭三馬とか、十返舍一九とか、爲永春水とか、或は歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つたことを讀みたい。一方には聖堂を學問の中心として、文藝・趣味・道德の上に支那の憧憬があるかと思へば、一方には蘭學の研究なぞが非常な勢で起つてゐる十九世紀の初期を考へると、舊いものと新しいものとが雜然同棲してゐる。それを委しく讀んで見たい。組織的な西洋の文物を受納れようとしてから、

喜多川歌麿　浮世繪の大家。文化二(二四六五)年歿す。年五十三。

皆川淇園　儒者・畫家。名は應。文化四年歿す。年七十四。

上田秋成　國學者。和歌文章をよくす。文化六年歿す。年七十八。

式亭三馬　小說家。通稱四宮太助。文政五(二四八二)年歿す。年四十八。

十返舍一九　小說家。本名は重田貞一。天保二(二四九一)年歿す。年六十七。

爲永春水　小說家。佐々木氏。通稱越前屋長次郎。天保十三年歿す。年五十四。

まだ漸く四五十年だ。兎も角もその短期の間に今日の新しい日本を仕上げた、かういふ人もあるが、それは餘り卑下した考へ方と思ふ。少くも百年以前の前半期を殆どその準備の時代であつたと見なければなるまい。前野良澤とか桂川甫粲とか、杉田玄白とか、大槻玄幹とか、その他、足立左内・高橋作左衞門・伊藤圭助・足立長雋、あゝいふ人達が、來るべき時代のために地ならしをしていつた跡を委しく讀んで見たい。賴山陽といふ人もあの時代には見のがせない代表的の人物であつたらう。あの人の書いたものは隨分混りけの多いものとしても、一代の人心をチャアムしたことは爭はれまい。けれども、山陽にはまだ餘程十八世紀風の殘つたところがある。渡邊崋山・高野長英・吉田松陰等になつて來ると、何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱においてはよ

前野良澤　醫師・蘭學者。中津藩に仕ふ。享和三(二四六六)年歿す。年八十一。

桂川甫粲　醫師・蘭學者。幕府に仕ふ。文化五年歿す。年五十五。

杉田玄白　醫師・蘭學者。文化十四年歿す。年八十五。

大槻玄幹　醫師。仙臺藩に仕ふ。又幕府の蠻書和解御用を勤む。天保八年歿す。年五十二。

足立左内　大阪鐵砲組同心。

高橋作左衞門　東岡と號す。大阪御定番同心。曆學地理學に精し。文政元年歿す。年四十一。

伊藤圭助　尾張藩の醫士。植物學の大家。理學博士・男爵・大學名譽教授。明治三十四年歿す。年八十九。

足立長雋　醫師・蘭學者。天保七年歿す。年六十一。

賴山陽　歷史家・詩人。名

り熱烈であり、その思想においてはより實行的であり、その學問においてもより新しいものとなつて來てゐる。反抗・憤怒・悲壯な犧牲的精神、あの人たちの性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激しい動搖と、神經質と、新時代の色彩を帶びたものとがある。そんなことなぞが詳しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。わが國の十九世紀は、舊いものが次第にすたれていつて、新しいものがまだ眞實に生まれなかつたやうな時だ。すべての物が統一を欲して叫をあげてゐたやうな時だ。そのうちで『士族』といふ一大階級が滅落していつた。幾何の悲劇がそこに釀されたらう。それを讀んで見たい。長谷川二葉亭・山田美妙齋などの始めた言文一致の仕事を國語の統一といふ上から論じたのも讀みたい。新しい詩歌が僅に頭を

は襄。字は子成。通稱久太郎。天保三年歿す。年五十三。

チャアム　魅する。Charm.

渡邊崋山　畫家・蘭學者。名は登。三河の人。天保十二年自刄す。年四十九。

高野長英　本姓後藤氏。蘭醫。嘉永三(二五一〇)年自刄す。年四十七。

吉田松陰　萩の藩士。名は矩方。通稱寅次郎。尊王の志士。安政六(二五一九)年刑死す。年三十。

長谷川二葉亭　小說家。名は辰之助。明治四十一年歿す。年四十六。

山田美妙齋　小說家。名は武太郎。硯友社同人。二葉亭と共に言文一致運動に功あり。明治四十三年歿す。年四十三。

持ちあげたのも漸く十九世紀の末のことである。」

二

異郷の旅に萌した私の心持は、歸國の後も長く變らずにあつた。前世紀とはいつても、あの時代に起つて來てゐることは、皆私達に直接關係の深いものばかりである。或意味からいへば、私達はそこから出發してゐる。あの暗い時代をもつと探つて見るといふのは、今日の私達に取つても興味の深いことではなからうか。

ゴンクウルには日本の浮世繪に關した名高い著述がある。あゝいふ著述が單なる異國趣味でなしに、十八世紀の藝術に寄せた深い興味から作られたといふのは面白い事だと思ふ。もし吾が國の十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があるなら、過ぐる二つの世紀の間の藝術の

ゴンクウル　佛國の小説家。（一八二二―一八九六年）Goncourt.

比較だけでも、もつと私達の目をあけてくれることが多からうと思ふ。あの歌麿などがあれほどデカタンの傾向のあつた人にもかゝはらず、あの畫にあらはれて居る線や色彩から私達の受取る感じは、あの熟し切つたやうな男女の形態や髪や唇などから私達の受取る感じは、十八世紀でなければ見られないものといふ氣もする。十九世紀の藝術となると、もつと神經質なものがあるやうな氣がする。さういふ比較を讀んで見たい。私達が北齋の畫に見つけるグロテスクの美とも言ひたいものは、一茶の俳句や南北の脚本に見つけるものと何處か共通したやうな性質のものであるか、どうか。さういふことも讀んで見たい。過去の藝術が靜的な物の表現であるといふことは、よく私達の教へられるところである。さういふ判斷に從へば、北齋の畫にあらはれて居

デカタン　衰亡墮落。Decadance.

北齋　葛飾氏。名は爲一。浮世繪師。嘉永二年歿す。年九十。

グロテスク　奇異。Grotesque.

一茶　小林氏。俳人。通稱は彌太郎。信濃の人。文政十年歿す。年六十五。

南北　名は北壽。戲曲家。文政十二年歿す。年七十五。

るやうな動きを、あのムーヴマンをどう見たらいゝのだらう。江戸時代の藝術家が概して淡泊であり、洒脫であるといふこともよく私達の教へられるところである。その見方に從へば、小說作者としての馬琴、畫家としての北齋、戲曲家としての南北、詩人としての一茶、あの人達に見るやうな執拗と濃情とをどう考へたらいゝだらう。さういふことも精しく讀んで見たい。

文學の上から考へて見ても、私達は三馬や一九などの書いたものを一概に輕く見る先入主な考へ方に捉へられて、はつきりした特色も摑めない。或は前世紀の初期の特色は、南北の戲曲などの方に色濃くあらはれてゐるやうにも思へる。詩人としての一茶は確に十九世紀初期の人で、その自我を高調したといふ點から見ても、人間の煩惱を憚らずに

ムーヴマン　運動。Movement

歌ひ出したといふ點から見ても、あの蕪村なぞに比べて遙かに近代的であると言へよう。私達は前世紀の初の詩歌を見渡して、桂園派の諸歌人の歌よりも、千蔭の流を汲む人達のそれよりも、一茶の俳句の方により多く時代の特色を見得るやうな氣もする。しかし、かういふことは、今俄に言つてしまへるものでもない。景樹の歌の中にも、かなり私達の心持に近いものがある。さういふことが精しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。

若し、さういふ研究を書いてくれる人があるなら、寫生に關したことも讀みたい。文學の上に寫生の唱へられたのは明治になつてからのことのやうであるが、それは洋畫の方法から刺戟された寫生論の組織立てられたまでであつて、寫生そのものは、私達の根深い傳統の一つと言つてもいゝ

蕪村　名は谷口信實。俳人。俳句中興の功を立つ。天明三(一七八三)年歿す。年六十七。

桂園派　香川景樹の歌風を繼ぐもの。

ほど、かなり古くからあつたことを讀みたい。應擧をめぐつて流れて來た四條派の畫風を擧げるまでもなく、繪畫以外の小說にも、戲曲にも、俳句にも、前世紀の初の藝術の多くが寫生の方法を取入れてゐることを讀みたい。

三

善かれ惡しかれ、私達は父をよく知らなければならない。その時代をよく知らなければならない。もし私の讀みたいと思ふやうな研究を書いてくれる人があるなら、何ほどの題目をそこに見出し得るか知れないやうな氣もする。それは當時の人の心を結晶したやうな文學や美術の作品の比較にのみ止るまい。あの諧謔と諷刺とに滿たされて居るやうな三馬・一九、その他の作者の戲作の中に、當時の平民の道德と虛無的な傾向とを探らうと試みたものは北村透谷であつた。あゝいふことも精しく讀んで見たい。意氣とか粹とかの美の觀念が、當時の民衆の間から生まれて來て居ることも注目に値する。武士の階級が次第に墮落して俠客などの輩出するやうになつた時、何ほど當時の一般の人の心が、經濟的にも、道德的にも、また精神的にも解放を求めていつたか、それがまた滑稽文字ともなり戲作ともなつて、奈何に當時の文學の上にあらはれて來て居るか、さういふことも讀みたい。

契沖・眞淵・宣長、その他先覺者の大きな功績は、古語の研究によつて、幾世紀に亙る支那の模倣的な風潮から自國の言葉を救つたところにあらう、一大反抗の精神を喚起したところにあらう。あの人達の遺した仕事の大きかつたことに氣づいたのも、矢張私はフランスの旅にあつて我が國を返

應擧　圓山氏。寫生畫に巧にして、その流を圓山派といふ。寛政七（二四五四）年歿す。年六十三。四條派　寫生畫派の一派。

北村透谷　文學者。名は門太郎。東京の人。明治二十六年自殺す。年二十七。

契沖　國學者。攝津の人。大阪高津の圓珠庵住僧。元祿十四（二三六一）年歿す。年六十二。

つて見た時であつた。前世紀の初には既に宣長も歿して居ることを思ふと、恐らく當時はその使徒達の時代であつたらう。その中での代表とも見るべき平田篤胤は國學を神道にまで持つていつたやうな人で、あの人の歩いた道は、宣長あたりよりずつと窮屈なものといふ氣がするが、當時の人の心に刺戟を與へたことは爭はれまい。私は前世紀の初に起つて來た保守的な精神を、單に頑固なものとばかり見ずに、もつと別な方面から研究されたものを讀みたい。それが盛んな愛國運動となつていつた跡を讀みたい。この保守的な精神は、吉田松陰等によつて代表されるやうな世界の探求の精神と全く腹ちがひのものであつたらうか。何と言つても前世紀での大きな出來事の一つは明治の維新であらうが、舊制度の打破、民族の獨立、外國勢力への對抗といふこ

平田篤胤　秋田の人。本姓大和田。平田篤穭の養子となる。天保十四年歿す。年六十八。

とにかけて、前世紀の初から流れて來たこの二つの精神が、相交叉し、相刺戟した跡を讀みたい。今日、私達の眼前に展開しつゝあるやうな世界主義と、その反動の大勢とは、早くも前世紀に產聲を揚げた雙生兒であることを讀みたい。

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間は、かなり暗かつた時代のやうに思ふ。恐らく西南戰爭以前の十年間は、もつと暗かつたらう。私達は明治維新と共に開けて來た新時代の輝いた方面のみを見るに慣されて、その慘澹たる光景には兎角眼を塞ぎがちであつた。さういふ眞相をも讀みたい。私達が唯、結果に於いて知り得るやうな父の時代を、もつとよく讀みたい。明治の初に生まれて來たものは、文學でも美術でも、德川時代の末にすら比較しがたいほど見劣りのする粗末なものばかり

だ。明治維新の齎らしたものは、その一面に於て、こんな深刻な影響のあることを想ひ見なければならない。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。僅に默阿彌の脚本があつて前世紀の中ほどを飾るのみで、詩も隱れ、繪畫も潛み、あらゆる藝術は一時姿を晦ましたかに見える。さういふ破壞の動いて行つた跡が正しく判斷されてあるものを讀みたい。

實際、私達はかういふ時代から出發して來てゐる。一概に過去を黃金時代のやうに考へ、今日を頽廢墮落の極と見るやうなことは、私は取らない。今日の青年の激しい精神の動搖を思ふものは、もつとその由來するところを自分等の內部に尋ねて見なければなるまい。（島崎藤村―「春を待ちつゝ」）

默阿彌　河竹默阿彌。名は吉村新七。劇作家。明治二十六年歿す。年七十八。

島崎藤村　詩人・小說家。名は春樹。長野縣に生まれる。明治學院の出身。

二六　樹の根

一

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、あまり考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると幹の色はしつとりと落ちついた潤ひのある鮮かさを見せる。綠の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽かな氣分が樹の色や光の內に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折ふし可愛い小鳥の群が活き〳〵した聲で囀り交はして、綠の葉の間

を樂しさうに往き來する。――それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時、私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處に佇んで、砂の中に喰込んだ複雜な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に竝んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、――それに比べて、地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力をつくしたやうに、枝から枝と分れて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることを知つてはゐたし、かしそれを目の前にまざ〳〵と見たときには思はず、驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間

に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や、萎れた顏も、その機會さへ過ぎれば、すぐに元の快活に歸つて、苦しみの痕を滅多にあとへ殘さない。しかも彼等は、我々の眼に祕められた地下の營みを、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこのやうな勞苦の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新し

い事實としか思へなかつた。

二

私は高野山へのぼつた。さうして不動阪にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜から、何ともいへぬ莊嚴な心持を押しつけられた。成程これは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つく〴〵敬服するやうな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて平野から切離された急峻な山の斜面である。幾世紀を經て來たか解らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷のない、壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひたひたと人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心

高野山　和歌山縣伊都郡の南部にある山。海拔九八五米。山中に眞言宗古義派總本山金剛峯寺あり。

不動阪　金剛峯寺に至る途中の阪路。極樂橋より女人堂に至る間約千米の急阪なり。

金剛不壞　絶對に堅固なる本體。金剛とは梵語縛日羅の譯にして、金中の剛なるものといふ意。

の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向かつた。地下の烈しい營みは既に地上一尺のところに明かに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い强靱な根は力限り四方へ廣がつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。

確に山は烈しい生の力の營みによつて、殘るところなく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れたる努力の威壓が神祕の影をさへ帶びて、我々

に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の淺い自分を恥ぢた。さうして地下の營みに沒頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遲くない。

三

成長を欲するものは先づ根を確におろさなくてはならぬ。

上に延びる事をのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

四

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ

人がある。下に喰入ることに沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と感激の強い心臟と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒せられて、自分のやうなものは生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現せられた時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。――私は彼の前途を信じてゐる。根の確な人から貧弱な果實が生まれる筈はない。

五

古來の偉人には雄大な根の營みがあつた。それ故に彼等の仕事は味はへば味はふほど深い味ひを示して來る。

現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、どもすればそれが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍らしい變種が出來るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で、纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出來ない。

天を突かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大なる根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

六

根のためには、出來るならば、地の質を選ばなくてはならぬ。

果實のためには、出來るならば、根を培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。

根に對する情熱を鼓吹し、其の根の本能的に好むところの土壤のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分をその根に供給してやるのが、教育の任務である。

七

教養は培養である。それが有効であるためには、先づ生活の大地に喰入らうとする根がなくてはならぬ。

人々はあまりに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸收する力のないところでは、何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが我々の前に乏しいとは思はない。たゞそれに相當する根が小さ

いのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。（和辻哲郎「偶像再興」）

和辻哲郎　哲學者。兵庫縣に生まる。東京帝國大學の出身。京都帝國大學教授たり。

	卷一	卷三	卷五	卷七	卷九	卷十一
一	ハナ	イマハ	大日本	世界	今日	太陽
二	ハト	ハヤオキ	中村君	長き行列	トラック島便り	孔子
三	ミノ	ヒヨコ	記大蛇たいぢ	横濱	記弟橘媛	上海
四	カラス	うちの子ねこ	松太郎の日記	潮干狩	養雞	遠足
六	ユキタルマ	大工小屋	磁石	看板	登校の道	鳴門
七	ハナサカヂヂイ	平扇のまと	けんやくと義捐	塙保己一	言ひにくい言葉	間宮林藏
八	カゲエ	山がら	賀茂川	アメリカだより	文天祥	法律
九	ナゾ	ナゾ	メリンス	コロンブスの卵	溫室の中	釋迦
二〇	オクスリ	一本杉	氷すへり	稅	手紙	奈良
二一	目ト耳ト口	汽車の旅	風	水の力	日光山	青の洞門
二二	オヤ牛ト子牛	ヒナマツリ	象	啞の學校	捕鯨船	トマスエヂソン
二三	コレカラ	春が來た	太千	名古屋市	太宰府まうで	電氣の世の中
二四	ヒカウキ	曾我兄弟	早城	廣瀨中佐	たしかな保證	舊師に呈す
二五	論人	江山	記念の木	胃とからだ	平和なる村	港入
二六			芽	分業	進水式	勝安房と西鄕隆盛
二七			伊勢參宮	人を招く手紙	太兒島高德	我が國民性の長所短所
二八				乃木大將の幼時		

記……古事記
平……平家物語
太……太平記
玉……玉勝間
眞……眞書太閤記
紀……日本書紀
曾……曾我物語
謠……謠曲
雲……雲萍雜志
風……風土記
沙……沙石集
伽……お伽草子
藩……藩翰譜
古……古今著聞集
德……德川實紀

尋常小學 國語讀本教材研究（その五）教材資料

記……古事記　平……平家物語　太……太平記　玉……玉勝間　眞……眞書太閤記

紀……日本書紀　曾……曾我物語　謠……謠曲　雲……雲萍雜志

風……風土記　沙……沙石集　伽……お伽草子　藩……藩翰譜

古……古今著聞集　德……德川實紀

一	ハナ	巻一
二	ハト	巻一
三	ミノヒコ	巻一
四	カラス	巻一
五	ウシウマ	巻一
六	ハサミ	巻一
七	オヤミヤ	巻一
八	イヌ	巻一
九	ネコ	巻一
一〇	サルカニ合戰	巻一
一一	アメアガリ	巻一
一二	カタツムリ	巻一
一三	アニトアネ	巻一
一四	ホタル	巻一
一五	ハス	巻一
一六	ヘチマ	巻一
一七	ハコニハ	巻一
一八	アヒル	巻一
一九	ヒケシ	巻一
二〇	ガン	巻一
二一	アサガホノエ	巻一
二二	ユフガタ	巻一
二三	ホシ	巻一
二四	モモタラウ	巻一
二五	……	巻一
二六	……	巻一
二七	……	巻一
二八	……	巻一

一	イマハ	巻三
二	ハヤオキ	巻三
三	ヒヨコ	巻三
四	うちの子ねこ	巻三
五	お花	巻三
六	ゆびのなかんがへもの	巻三
七	わらびとり	巻三
八	竹の子	巻三
九	きやうだい	巻三
一〇	五一ぢいさん	巻三
一一	右と左	巻三
一二	まはりつこ	巻三
一三	萬うらしま太郎	巻三
一四	四方	巻三
一五	私ノ村	巻三
一六	一口ばなし	巻三
一七	なのたうふう	巻三
一八	セミ	巻三
一九	さ舟	巻三
二〇	水デッパウ	巻三
二一	虫ぼし	巻三
二二	カウモリ	巻三
二三	十五や	巻三
二四	ふじの山	巻三
二五	謠はごろも	巻三
二六	……	巻三
二七	……	巻三
二八	……	巻三

一	大日本	巻五
二	中村君	巻五
三	記大蛇たいぢ	巻五
四	松太郎の日記	巻五
五	紀金鴉勳章	巻五
六	鯉のぼり	巻五
七	大賣出し	巻五
八	ツバメ	巻五
九	私のうち	巻五
一〇	遠足	巻五
一一	紀熊襲征伐	巻五
一二	一口話	巻五
一三	蠶	巻五
一四	雨	巻五
一五	古養老	巻五
一六	日本三景	巻五
一七	虹	巻五
一八	峠から町へ	巻五
一九	用水池	巻五
二〇	古八幡太郎	巻五
二一	水見舞	巻五
二二	郵便函	巻五
二三	一足々々	巻五
二四	ブダウ	巻五
二五	熊のさゝやき	巻五
二六	東京停車場	巻五
二七	……	巻五
二八	……	巻五

一	世界	巻七
二	長き行列	巻七
三	横濱	巻七
四	潮干狩	巻七
五	れんげさう	巻七
六	太鎌倉攻	巻七
七	傘松	巻七
八	馬	巻七
九	大阪	巻七
一〇	獅子と武士	巻七
一一	初夏の夜	巻七
一二	大連だより	巻七
一三	一太郎やあい	巻七
一四	川中島二、	巻七
一五	麥打二、	巻七
一六	軍艦生活の朝	巻七
一七	東京から青森まで	巻七
一八	いもほり	巻七
一九	石安工場	巻七
二〇	星の話	巻七
二一	白馬岳	巻七
二二	初秋	巻七
二三	北風號	巻七
二四	手紙三、	巻七
二五	水兵の母	巻七
二六	選擧ノ日	巻七
二七	……	巻七
二八	……	巻七

一	今日	巻九
二	トラック島便り	巻九
三	記弟橘媛	巻九
四	養雞	巻九
五	動物ノ色ト形	巻九
六	五代の苦心	巻九
七	ナイヤガラの瀧	巻九
八	若葉の山道	巻九
九	雨將軍の握手	巻九
一〇	水師營の會見	巻九
一一	物ノ價	巻九
一二	雲濤師の苦心	巻九
一三	弟から兄へ	巻九
一四	ゴム	巻九
一五	老か	巻九
一六	社長	巻九
一七	麥	巻九
一八	北海道	巻九
一九	人と火	巻九
二〇	沙無言の行	巻九
二一	玉松坂の一夜	巻九
二二	貨幣	巻九
二三	我は海の子	巻九
二四	遠泳	巻九
二五	曆の話	巻九
二六	リンカーンの苦學	巻九
二七	南米より	巻九
二八	孔明	巻九

一	太陽	巻十一
二	孔子	巻十一
三	上海	巻十一
四	遠足	巻十一
五	のぶ子さんの家	巻十一
六	裁判	巻十一
七	眞賤嶽の七本槍	巻十一
八	瀬戸内海	巻十一
九	植林	巻十一
一〇	手紙	巻十一
一一	自治の精神	巻十一
一二	ウエリントンと少年	巻十一
一三	ガラス工場	巻十一
一四	鐵眼の一切經	巻十一

一	ウンドウクワイ	巻二
二	オキヤクアソビ	巻二
三	キクノハナ	巻二
四	謠ウシワカマル	巻二
五	カンガヘモノ	巻二
六	犬ノヨクバリ	巻二
七	ユフヤケ	巻二
八	月	巻二
九	クリヒロヒ	巻二
一〇	木ノハ	巻二
一一	ミヨチヤン	巻二
一二	ネズミノチエ	巻二
一三	オ正月	巻二
一四	風モチノマト	巻二
一五	ユキ	巻二
一六	ユキダルマ	巻二
一七	ハナサカヂイ	巻二
一八	カゲエ	巻二
一九	ナゾ	巻二
二〇	オクスリ	巻二
二一	目ト耳ト口	巻二
二二	オヤ牛ト子牛	巻二
二三	コレカラ	巻二
二四	ヒカウキ	巻二
二五	謠大江山	巻二
二六	……	巻二
二七	……	巻二
二八	……	巻二

一	お祭	巻四
二	柿	巻四
三	十月三十一日	巻四
四	麥まき	巻四
五	記白ウサギ	巻四
六	たぢさんのうち	巻四
七	私どもの町	巻四
八	山びこ	巻四
九	フクロフ	巻四
一〇	日と風	巻四
一一	平すすはき	巻四
一二	かるた取	巻四
一三	ゐはがき	巻四
一四	お話二つ	巻四
一五	しひの木とかし	巻四
一六	のみ	巻四
一七	大工小屋	巻四
一八	平扇のまと	巻四
一九	山がら	巻四
二〇	ナゾ	巻四
二一	一本杉	巻四
二二	汽車の旅	巻四
二三	ヒナマツリ	巻四
二四	春が來た	巻四
二五	曾我兄弟	巻四
二六	……	巻四
二七	……	巻四
二八	……	巻四

一	俵の山	巻六
二	日本の高山	巻六
三	ヤクワントテツビン	巻六
四	きのこ取	巻六
五	一、しけ	巻六
六	二、なぎ	巻六
七	平くりから谷	巻六
八	霜	巻六
九	虎と蟻	巻六
一〇	町の朝	巻六
一一	平弓流し	巻六
一二	入營した兄から	巻六
一三	笑ひ話	巻六
一四	鮭	巻六
一五	冬の夜	巻六
一六	餅つき	巻六
一七	伽萬じゆの姫	巻六
一八	町の辻	巻六
一九	磁石	巻六
二〇	看板	巻六
二一	塙保己一	巻六
二二	けんやくと義捐	巻六
二三	アメリカだより	巻六
二四	賀茂川	巻六
二五	コロンブスの卵	巻六
二六	メリンス	巻六
二七	氷すへり	巻六
二八	税	巻六
二九	水の力	巻六
三〇	神風	巻六
三一	啞の學校	巻六
三二	象	巻六
三三	太千早城	巻六
三四	名古屋市	巻六
三五	記念の木	巻六
三六	廣瀬中佐	巻六
三七	芽	巻六
三八	伊勢參宮	巻六
三九	……	巻六
四〇	……	巻六
四一	……	巻六

一	山の秋	巻八
二	犬ころ	巻八
三	競馬	巻八
四	藩德武將の幼時	巻八
五	揚子江	巻八
六	吳鳳	巻八
七	心と心	巻八
八	手の働	巻八
九	炭	巻八
一〇	朝鮮人蔘	巻八
一一	大岡さばき	巻八
一二	手紙	巻八
一三	驚	巻八
一四	餅つき	巻八
一五	町の辻	巻八
一六	看板	巻八
一七	塙保己一	巻八
一八	アメリカだより	巻八
一九	コロンブスの卵	巻八
二〇	水の力	巻八
二一	啞の學校	巻八
二二	名古屋市	巻八
二三	廣瀬中佐	巻八
二四	胃とからだ	巻八
二五	分業	巻八
二六	人を招く手紙	巻八
二七	乃木大將の幼時	巻八
二八	……	巻八

一	明治神宮參拜	巻十
二	アレクサンドル大王と醫師	巻十
三	道ぶしん	巻十
四	馬市見物	巻十
五	燈臺守の娘	巻十
六	霧	巻十
七	パナマ運河	巻十
八	開墾	巻十
九	陶工柿右衛門	巻十
一〇	銀	巻十
一一	行	巻十
一二	傳書鳩	巻十
一三	謠鉢の木	巻十
一四	京城の友から	巻十
一五	炭坑	巻十
一六	輪出入	巻十
一七	登校の道	巻十
一八	鳴門	巻十
一九	言ひにくい言葉	巻十
二〇	文天祥	巻十
二一	溫室の中	巻十
二二	手紙二、	巻十
二三	日光山	巻十
二四	捕鯨船	巻十
二五	太宰府まうで	巻十
二六	たしかな保證	巻十
二七	平和なる村	巻十
二八	進水式	巻十
二九	太兒島高德	巻十
三〇	……	巻十

一	明治天皇御製	巻十二
二	出雲大社	巻十二
三	チヤールスダーウイン	巻十二
四	新聞	巻十二
五	蜜柑山	巻十二
六	商業	巻十二
七	鎌倉	巻十二
八	ヨーロッパの旅	巻十二
九	月光の曲	巻十二
一〇	我が國の木材	巻十二
一一	十和田湖	巻十二
一二	小さなねぢ	巻十二
一三	國旗	巻十二
一四	リヤ王物語	巻十二
一五	まぐろ網	巻十二
一六	鳴門	巻十二
一七	間宮林藏	巻十二
一八	法律	巻十二
一九	釋迦	巻十二
二〇	奈良	巻十二
二一	青の洞門	巻十二
二二	トマスエヂソン	巻十二
二三	電氣の世の中	巻十二
二四	舊師に呈す	巻十二
二五	港入	巻十二
二六	勝安房と西郷隆盛	巻十二
二七	我が國民性の長所短所	巻十二
二八	……	巻十二

	巻一	巻三	巻五	巻七	巻九	巻十一
一	ハナ	イマハ	大日本	世界	今日	太陽
二	ハト	ハヤオキ	中村君	長き行列	トラック島便り	孔子
三	ミノ	ヒヨコ	大蛇たいぢ	横濱	弟橘媛	上海
四	カラス	うちの子れこ	松太郎の日記	潮干狩	養雞	遠足
五	ユキ	のみ	磁石	看板	登校の道	鳴門
六	ユキダルマ	大工小屋	Dけんやくと義捐	塙保己一	言ひにくい言葉	間宮林蔵
七	ハナサカヂイ	扇のまと	賀茂川	アメリカだより	宋文天祥	法律
八	カゲエ	山がら	メリンス	コロンブスの卵	溫室の中	釋迦
九	ナゾ	ナゾ	氷すへり	税	手紙	奈良
一〇	オクスリ	一本杉	神風	水の力	日光山	青の洞門
一一	目ト耳ト口	汽車の旅	象	Q唖の學校	捕鯨船	※トマスエヂソン
一二	オヤ牛ト子牛	ヒナマツリ	千早城	名古屋市	太宰府まで	電氣の世の中
一三	コレカラ	春が來た	記念の木	廣瀬中佐	たしかな保證	舊師に呈す
一四	ヒカウキ	曾我兄弟	芽	乍胃とからだ	平和なる村	港入
一五	大江山		伊勢參宮	分業	進水式	勝安房と西郷隆盛
一六				人を招く手紙	兒島高德	我が國民性の長所短所
一七				乃木大將の幼時		
一八						
一九						
二〇						
二一						
二二						
二三						
二四						
二五						
二六						
二七						
二八						

D 獨逸讀本　Æ イソップ物語　A 米國讀本　E 英國讀本
Q クオレ　L ロングマンス、リーダー　N ナショナル、リーダー
S 沙翁物語　宋 宋史　※ 各種傳記

尋常小學 國語讀本教材研究（そのヘ）教材資料

卷一

一 ハナ
二 ハト
三 ミノ
四 カラス
五 ウシウマ
六 ハサミ
七 オミヤ
八 イヌ
九 ネコ
一〇 サルカニ合戰
一一 アメアガリ
一二 カタツムリ
一三 アニトアネ
一四 ホタル
一五 ハス
一六 ヘチマ
一七 ハコヒハ
一八 アヒル
一九 ヒケシ
二〇 ガン
二一 アサガホノエ
二二 ユフガタ
二三 ホシ
二四 モモタラウ
二五 ……
二六 ……
二七 ……
二八 ……

卷二

一 ウンドウクワイ
二 オキヤクアソビ
三 キクノハナ
四 ウシワカマル
五 Dカンガヘモノ
六 Æ犬ノヨクバリ
七 ユフヤケ
八 月
九 クリヒロヒ
一〇 木ノハ
一一 ミヨチヤン
一二 Æネズミノチエ
一三 オ正月
一四 モチノマト
一五 ユキ
一六 ユキダルマ
一七 ハナサカヂヂイ
一八 カゲエ
一九 オクスリ
二〇 ナゾ
二一 目ト耳ト口
二二 オヤ牛ト子牛
二三 コレカラ
二四 ヒカウキ
二五 大江山
二六 ……
二七 ……
二八 ……

卷三

一 ハハ
二 ハヤオキ
三 ヒヨコ
四 うちの子れこ
五 お花
六 ゆびのな
七 かんがへもの
八 わらびとり
九 竹の子
一〇 きやうだい
一一 五一ぢいさん
一二 右と左
一三 まはりつこ
一四 うらしま太郎
一五 四方
一六 私ノ村
一七 一口ばなし
一八 たののたうふう
一九 セミ
二〇 さ舟
二一 水デツパウ
二二 虫ぼし
二三 Æカウモリ
二四 十五や
二五 ふじの山
二六 はごろも
二七 ……
二八 ……

卷四

一 お祭
二 柿
三 十月三十一日
四 麥まき
五 白ウサギ
六 たぢさんのうち
七 私どもの町
八 Aぶこ山
九 フクロフ
一〇 Æ日と風
一一 すすはき
一二 かるた取
一三 ゐはがき
一四 お話二つ
一五 しひの木とかし
一六 のみ
一七 大工小屋
一八 扇のまと
一九 山がら
二〇 一本杉
二一 汽車の旅
二二 ヒナマツリ
二三 春が來た
二四 曾我兄弟
二五 ……
二六 ……
二七 ……
二八 ……

卷五

一 大日本
二 中村君
三 大蛇たいぢ
四 松太郎の日記
五 金鵄勳章
六 鯉のぼり
七 大賣出し
八 ツバメ
九 私のうち
一〇 遠足
一一 熊襲征伐
一二 一口話
一三 鸞
一四 雨
一五 養老
一六 日本三景
一七 虹
一八 峠から町へ
一九 用水池
二〇 八幡太郎
二一 水見舞
二二 郵便函
二三 一足々々
二四 ブダウ
二五 Æ熊のさゝやき
二六 東京停車場
二七 ……
二八 ……

卷六

一 俵の山
二 日本の高山
三 ヤクワントテツピン
四 きのこ取
五 一、しけ
六 二、なぎ
七 海
八 くりから谷
九 霜
一〇 虎と蟻
一一 町の朝
一二 弓流し
一三 入營した兄から
一四 笑ひ話
一五 鮭
一六 冬の夜
一七 萬じゆの姫
一八 磁石
一九 賀川茂
二〇 メリンス
二一 氷すへり
二二 神風
二三 象
二四 千早城
二五 記念の木
二六 芽
二七 伊勢參宮
二八 ……

卷七

一 世界
二 長き行列
三 横濱
四 潮干狩
五 れんげさう
六 鎌倉攻
七 傘松
八 馬
九 大阪
一〇 D獅子と武士
一一 初夏の夜
一二 大連だより
一三 一太郎やあい
一四 川中島
一五 カヂ屋
一六 航海の話
一七 安倍川の義夫
一八 木下藤吉郎
一九 海の生物
二〇 八幡太郎
二一 Eマリーのきてん
二二 二百十日
二三 助力
二四 加藤清正
二五 彼岸
二六 電報
二七 注文
二八 ……

卷八

一 山の秋
二 犬ころ
三 競馬
四 武將の幼時
五 揚子江
六 吳鳳
七 心と心
八 手の働
九 炭
一〇 朝鮮人蔘
一一 大岡さばき
一二 手紙
一三 驚
一四 餅つき
一五 町の辻
一六 看板
一七 塙保己一
一八 アメリカだより
一九 コロンブスの卵
二〇 稅
二一 水の力
二二 Q啞の學校
二三 名古屋市
二四 廣瀨中佐
二五 Æ胃とからだ
二六 分業
二七 人を招く手紙
二八 乃木大將の幼時

卷九

一 今日
二 トラック島便り
三 弟橘媛
四 養雞
五 動物ノ色ト形
六 五代の苦心
七 ナイヤガラの瀧
八 若葉の山道
九 兩將軍の握手
一〇 水師營の會見
一一 物ノ價
一二 弟から兄へ
一三 老社長
一四 麥打
一五 軍艦生活の朝
一六 東京から青森まで
一七 いもほり
一八 石安工場
一九 星の話
二〇 白馬岳
二一 初秋
二二 北風號
二三 手紙
二四 水兵の母
二五 選擧ノ日
二六 ……
二七 ……
二八 ……

卷十

一 明治神宮參拜
二 ※アレクサンドル大王と醫師
三 道ぶしん
四 馬市見物
五 L燈臺守の娘
六 霧
七 バナマ運河
八 開墾
九 陶工柿右衞門
一〇 銀行
一一 傳書鳩
一二 鉢の木
一三 京城の友から
一四 炭坑
一五 輪出入
一六 登校の道
一七 言ひにくい言葉
一八 宋文天祥
一九 溫室の中
二〇 手紙
二一 日光山
二二 捕鯨船
二三 太宰府まうで
二四 たしかな保證
二五 平和なる村
二六 進水式
二七 兒島高德
二八 ……

卷十一

一 太陽
二 孔子
三 海上
四 遠足
五 のぶ子さんの家
六 裁判
七 賤嶽の七本槍
八 瀨戸內海
九 植林
一〇 手紙
一一 畫師の苦心
一二 ゴム
一三 Eふか
一四 北海道
一五 人と火
一六 無言の行
一七 松坂の一夜
一八 貨幣
一九 我は海の子
二〇 遠泳
二一 暦の話
二二 ※リンカーンの苦學
二三 南米より
二四 孔明
二五 自治の精神
二六 ※ウエリントンと少年
二七 ガラス工場
二八 鐵眼の一切經

D 獨逸讀本　Æ イソップ物語　A 米國讀本　E 英國讀本
Q クオレ　L ロングマンス、リーダー　N ナショナル、リーダー
S 沙翁物語　宋 宋史　※ 各種傳記

師範國文選

定價

卷一	壹圓
卷二	壹圓
卷三	九拾錢
卷四	八拾八錢
卷五	九拾錢

昭和六年九月二十六日印刷
昭和六年九月三十日發行
昭和七年二月七日訂正印刷
昭和七年二月十一日訂正發行

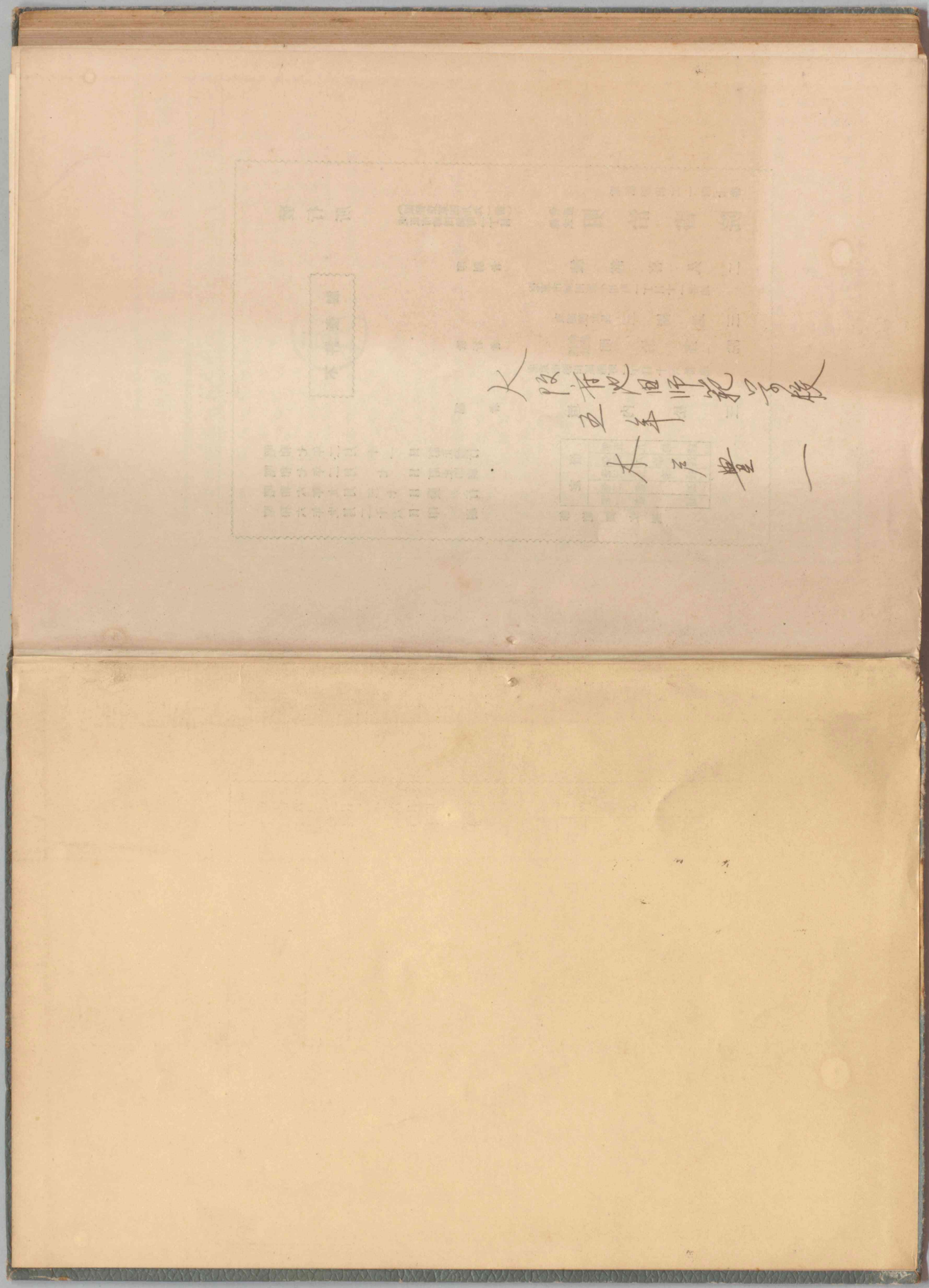
不許複製

編者　東京市神田區錦町一丁目十六番地　垣内松三

發行者　東京市神田區小川町一丁目十一番地　株式會社明治書院　取締役社長　三樹退三

印刷者　東京市神田區錦町一丁目（振替東京四九九一番）　綾部喜久二

發行所　東京市神田區錦町一丁目（振替東京四九九一番）　株式會社明治書院　電話神田二一四七番



広島大学図書
2000301917